

史跡 萩城跡(東園)

保存整備に伴う発掘調査報告書

2018

山口県萩市まちじゅう博物館推進部文化財保護課

史跡 萩城跡(東園)

保存整備に伴う発掘調査報告書

2018

山口県萩市まちじゅう博物館推進部文化財保護課

卷頭写真



1・2トレンチ[御殿跡]から庭園を見る(北西から)

序

東園は、萩（長州）藩6代藩主毛利宗広の時代、江戸時代中期に造られた大名庭園です。本丸御殿から井上門跡を抜け、二の丸に入ったすぐのところに位置します。この地に古くからあった池を浚い、その周囲を回遊式庭園としました。西方には御茶屋や御殿も建っていたといわれています。7代藩主重就の時代には東園内に設けられた建物・池・中島・巨石・珍しい樹木等の多くの見どころに「六景二十勝」の名を与えました。その後も13代藩主敬親が山口へ移鎮するまでの間、遊息空間・祭祀空間として利用されました。

明治7年の萩城解体以後、東園一帯は貸地となり、明治時代後半には園内の建物も解体されたようです。今現在でも園池や小高い地形、巨石等が残っており、僅かながら往時の面影を留めていますが、御茶屋跡や御殿跡等の地下遺構については現状の地形から全く判断できない状態です。

これらを解明するため、平成24年度・26年度に御殿跡の発掘調査を実施しました。その結果、現地表面から約1m下で御殿跡に伴う石組溝や井戸等を確認しました。本書はそれらの成果をまとめたものです。

本書が学術研究の基礎資料のみでなく、文化財への理解や郷土の歴史を学ぶ資料として、幅広く活用されることを願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査にあたってご指導・ご協力いただいた関係各位ならびに地域の皆様方に対し、心からお礼を申し上げます。

平成30年3月

萩市長 藤道健二

例　　言

1. 本書は平成24年度及び平成26年度における国庫補助事業（文化財保存事業） 史跡 萩城跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業に伴う史跡萩城跡 東園の発掘調査報告書である。併せて、平成23年度から平成29年度までの発掘調査に関連した事業内容についても記している。

2. 本報告書に収載した調査区の所在地は以下のとおりである。

山口県萩市大字堀内字旧城 1(山) 及び 1 の第 2(山)

3. 発掘調査に係る担当は以下のとおりである。

萩市歴史まちづくり(現 まちじゅう博物館推進)部 文化財保護課 文化財保護係 主任専門職 西川雄大

4. 調査にあたっては文化庁・山口県教育委員会、並びに地元関係者各位の協力・援助を得た。

5. 本報告書に使用した方位は国土座標（世界測地系）で示し、標高は海拔標高（m）で示す。

6. 本報告書に使用した遺構実測図は調査担当者及び調査補助員が作成し、整理作業員が墨書きしたものと、3Dレーザー測量による成果品がある。遺物実測図は整理作業員が作成・墨書きした。

7. 図版中の遺物番号は実測図・表の遺物番号と一致する。

8. 本報告書に使用した土色・遺物の色調は下記に準拠した。

農林水産省農林水産技術会議事務局（監修）『新版標準土色帖』1998

9. 本報告に使用した遺構略号は以下のとおりである。

SD:溝 SE:井戸 SK:土坑 SP:柱穴 SS:礎石・配石 SX:その他

10. 本報告書に使用した遺構写真は調査担当者が撮影した。遺物写真は調査担当者及び文化財保護係主任 松本周作が撮影した。

11. 本報告書に使用した遺構写真及び遺物写真は全てデジタルカメラを用いて撮影を行った。

12. 本報告書で使用した地図は萩市が平成14年に作成した1/10000の地図を縮小し、複製加工して使用した。

13. 出土遺物の年代比定については以下の著書を参考とした。

山口県教育委員会『萩焼古窯』1990

兵庫埋蔵銭調査会『日本出土銭総覧』1996

九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』2000

江戸遺跡研究会『江戸考古学研究事典』2001

14. 出土遺物のうち近世陶磁器および輸入陶磁器の鑑定については上田秀夫氏（故人：元山口県立萩美術館・浦上記念館）の協力を得た。

15. 出土遺物のうち墨書きや銘のあるものの判読については、樋口尚樹氏（至誠館館長）の協力を得た。

16. 出土遺物・図面・写真等は萩市まちじゅう博物館推進部文化財保護課に保管している。

17. その他、報告書作成にあたり、多くの方々にご指導・ご協力を賜った。記して感謝する次第である。

18. 本報告書の執筆は西川及び総括専門職 柏本秋生（第1章）が行い、編集は西川が行った。

本文目次

第1章 萩城東園の概要	1
1.位置と環境	1
2.萩城と東園の歴史	1
3.東園の六景二十勝について	7
第2章 保存整備事業に至る経緯	10
1.整備計画の策定	10
2.保存整備事業	11
第3章 保存整備事業の経過	12
1.東園保存整備事業の概要	12
2.事業の経過	13
3.事業費	16
第4章 発掘調査の概要	17
1.調査の経過と方法	17
2.検出遺構	18
3.出土遺物	28
4.小結	45
第5章 まとめ	46
1.検出遺構の検討	46
2.検出遺構と「差図」との照合	47
3.今後の調査計画	48

挿 図 目 次

第1図 萩城の縄張及び惣構	2	第20図 24-1トレンチ出土土器類②	30
第2図 慶安5年(1652)萩城下町絵図	3	第21図 26-1トレンチ出土土器類①	31
第3図 元文年間(1736~40)萩城下町絵図	3	第22図 26-1トレンチ出土土器類②	32
第4図 東園六景二十勝比定図	9	第23図 24-2トレンチ出土土器類	32
第5図 史跡萩城跡(東園地区)整備計画全体図	10	第24図 26-2トレンチ出土土器類	33
第6図 東園推定復原図(東上空から)	11	第25図 24-3トレンチ出土土器類	34
第7図 東園周辺の3Dレーザー測量図	13	第26図 24-1トレンチ出土瓦類①	37
第8図 孝姫様基之允様東園御部屋差図	14	第27図 24-1トレンチ出土瓦類②	38
第9図 トレンチ配置図	17	第28図 26-1トレンチ出土瓦類①	40
第10図 1トレンチ遺構平面図	21・22	第29図 26-1トレンチ出土瓦類②	41
第11図 2トレンチ遺構平面図	23・24	第30図 24-2トレンチ出土瓦類	42
第12図 3トレンチ遺構平面図	25・26	第31図 26-2トレンチ出土瓦類	43
第13図 1トレンチ西壁土層断面図	25・26	第32図 24-3トレンチ出土瓦類	44
第14図 1トレンチ南壁土層断面図	25・26	第33図 出土石製品	44
第15図 2トレンチ東壁土層断面図	25・26	第34図 出土金属製品	44
第16図 2トレンチ北壁土層断面図	25・26	第35図 出土銭貨	45
第17図 3トレンチ東壁土層断面図	25・26	第36図 本丸御殿西長屋の建物配置	46
第18図 3トレンチ南壁土層断面図	25・26	第37図 檜出遺構と「差図」との照合	47
第19図 24-1トレンチ出土土器類①	28		

表 目 次

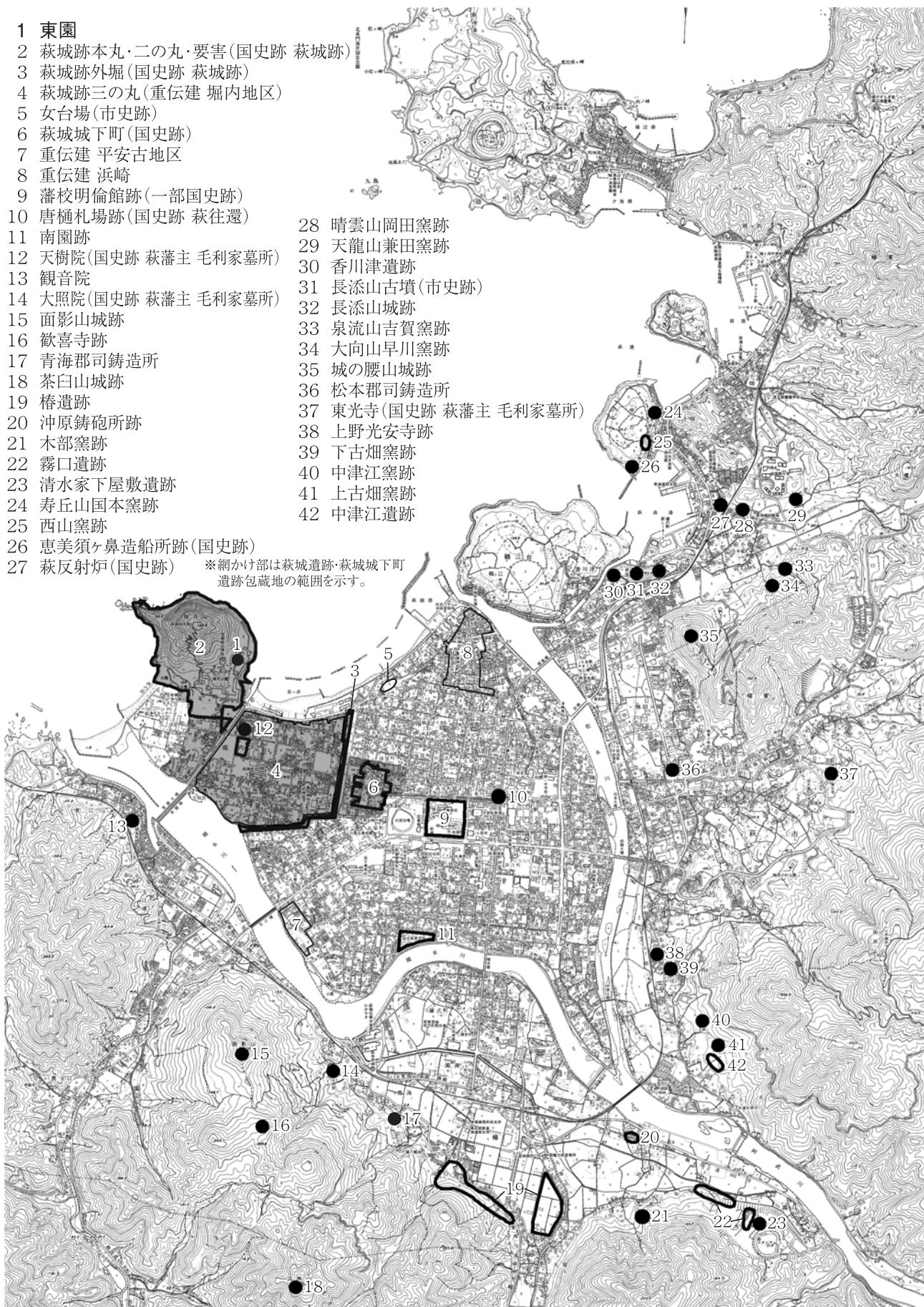
表1 東園六景二十勝概要一覧	8	表4 東園保存整備事業請負業者一覧	16
表2 東園保存整備事業年次計画	15	表5 出土土器類觀察表①	35
表3 年度別事業費一覧	16	表6 出土土器類觀察表②	36

図版目次

- 図版 1 1. 遺構検出作業(東から)
2. SD1・SK2~4ほか遺構検出(北北東から)
3. SD1土層堆積(北西から)
4. SD1・SK2~4・SK6~8遺構検出(北西から)
- 図版 2 1. SK6土層堆積(北東から)
2. SK7土層堆積(北から)
3. 第5層上面遺構検出[SX41-g~i・SK68ほか](南から)
4. 第5層上面掘削(北から)
5. SD1・SD12・SS13・SD14ほか遺構検出全景(南南西から)
- 図版 3 1. SK15土層堆積(南から)
2. SK68土層堆積(東から)
3. SD12・SD14遺構検出(西から)
4. SD1・SD12・SS13・SD14・SK15ほか遺構検出全景(北西から)
- 図版 4 1. SD12・SD14・SS13・SK15・SX39遺構検出(北東から)
2. SD12・SD14・SK15遺構検出(西から)
3. SD12・SS13・SD14・SK15遺構検出(東南東から)
4. 遺構検出全景(南東から)
- 図版 5 1. 第5層上面近代土坑等の遺構検出(南西から)
2. SD23・SX40・SX41・SX15ほか遺構検出全景(北西から)
3. SS34遺構検出(南西から)
4. 北壁土層堆積(合成)
5. SK15・SK16・SK33ほか遺構検出全景(西から)
- 図版 6 1. SD23・SD27・SS31・SS32ほか遺構検出(南西から)
2. SD23土層堆積(南東から)
3. SX39・SX40・SK15ほか遺構検出(東から)
4. SD27・SS31・SS32・SX40ほか遺構検出(北から)
5. 遺構検出全景(東から)
- 図版 7 1. SK39土層堆積(南西から)
2. SK38土層堆積(北西から)
3. SX40-h土層堆積(北西から)
4. SX41-a土層堆積(南東から)
5. SK19下層遺物出土(南東から)
6. SS10遺構検出(西から)
7. SX39遺構検出(北東から)
8. 調査区内に滞留した雨水(南西から)
- 図版 8 1. 近現代堆積土の重機掘削(東から)
2. 遺構検出作業(西から)
3. SD61遺構検出(北西から)
4. SD61完掘、SX55・SS50ほか遺構検出(南東から)
5. SK44・SS46・SD48・SX55ほか遺構検出全景(北北西から)
- 図版 9 1. SK42・SK44・SS46・SX55ほか遺構検出(南西から)
2. SK44遺構検出及び土層堆積(南西から)
3. 1トレンチ南壁土層堆積(北東から)
4. SX55-a土層堆積(北西から)
5. SX55-d土層断面(東から)
- 図版10 1. 近現代堆積土の重機掘削(東から)
2. 調査区壁面整形作業(北西から)
3. 北壁土層堆積(合成)
4. 南壁土層堆積(合成)
5. SD48・SX55~58・SK54ほか遺構検出全景(南東から)
- 図版11 1. SK51・SK52埋土上層・下層での遺構検出作業(南から)
2. SK51埋土上層・下層での遺構検出状況(南西から)
3. SK54遺物出土(東から)
4. 同左底面検出(南南西から)
5. SK51~54・SK62ほか遺構検出全景(南南西から)
- 図版12 1. SX57-e土層堆積(北西から)
2. SX58-c土層堆積(南から)
3. SK62土層堆積(北東から)
4. SD60掘削作業(北から)
5. 遺構検出全景(北東から)
- 図版13 1. 発掘調査着手前(南東から)
2. SE63遺構検出(北北東から)
3. SE63・SP64・SK65・SK66・SS67遺構検出(北北西から)
4. SE63・SP64・SK65・SS67遺構検出(南東から)
5. SE63・SP64・SK65・SS67遺構検出(南南西から)
- 図版14 1. 南壁土層堆積(北東から)
2. 同左(北西から)
3. 東壁土層堆積(南西から)
4. 同左SE63据付掘方埋土の堆積(西から)
5. SE63井戸内で礫検出(東から)
- 図版15 調査区内出土遺物①(土器類)
- 図版16 調査区内出土遺物②(土器類・瓦類・石製品・金属製品・錢貨)

- 1 東園
 2 萩城跡本丸・二の丸・要害(国史跡 萩城跡)
 3 萩城跡外堀(国史跡 萩城跡)
 4 萩城跡三の丸(重伝建 堀内地区)
 5 女台場(市史跡)
 6 萩城城下町(国史跡)
 7 重伝建 平安古地区
 8 重伝建 浜崎
 9 藩校明倫館跡(一部国史跡)
 10 唐柵札場跡(国史跡 萩往還)
 11 南園跡
 12 天樹院(国史跡 萩藩主 毛利家墓所)
 13 觀音院
 14 大照院(国史跡 萩藩主 毛利家墓所)
 15 面影山城跡
 16 歓喜寺跡
 17 青海郡司鑄造所
 18 茶臼山城跡
 19 椿遺跡
 20 沖原鑄砲所跡
 21 木部窯跡
 22 霧口遺跡
 23 清水家下屋敷遺跡
 24 寿丘山国本窯跡
 25 西山窯跡
 26 恵美須ヶ鼻造船所跡(国史跡)
 27 萩反射炉(国史跡)

※網かけ部は萩城遺跡・萩城城下町
遺跡包蔵地の範囲を示す。



遺跡の位置と周辺の遺跡(1/25,000)

第1章 萩城東園の概要

1. 位置と環境

萩市は、山口県の北部、日本海側に位置する。昭和7年(1932)に市制を施行し、昭和30年(1955)には周辺の阿武郡三見村、大井村、六島村、見島村を編入合併した。さらに平成17年(2005)、阿武郡川上村、田万川町、むつみ村、須佐町、旭村、福栄村と対等合併し、改めて萩市として発足した。

現在の総面積は698.79km²で、県土の11.4%を占める。市域の北部は阿武町を取り巻く形で日本海に面し、東部は島根県（益田市、津和野町）と接し、南東部は山口市、西部は長門市、美祢市と接している。

地形は、全体として東部の中国山地から北西部の日本海に向かう傾斜地であり、南部の市域境界付近に標高700mを超える山々が連なっている。低地は少なく、県下第2の河川である阿武川河口部に形成された萩三角州とその周辺地に見られる程度である。丘陵地は、田万川地域から須佐地域にかけての臨海部に比較的大らかに広がる。

萩市の中心市街地は、阿武川河口の萩三角州上に展開する。萩低地とも呼ばれる三角州の面積は15km²、平均高度は2 m。海に沿って広がる砂堆は幅0.7km、東西4.5kmに及ぶ。北を日本海、他の三方を標高400m級の山々に囲まれている。

2. 萩城と東園の歴史

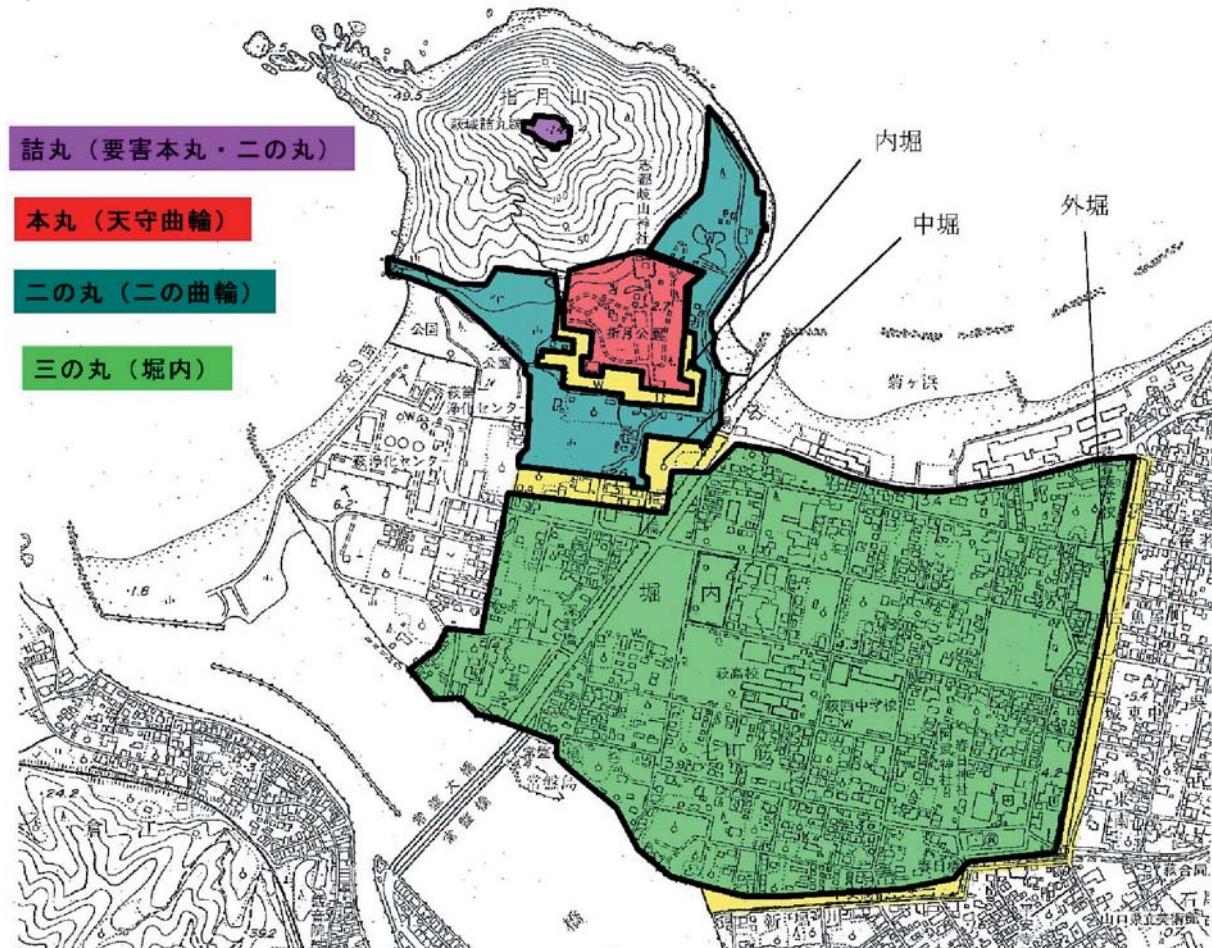
現在の萩市の中心市街地は、近世の萩城及びその城下町に由来する。関ヶ原の戦いに敗れた毛利輝元は、それまでの中国地方8カ国112万石から、周防・長門の2カ国36万石に減封された。居城も広島城から移ることになり、阿武川河口の三角州北西部にある指月山を中心として萩城を、そして三角州全体に城下町を建設することとした。この建設の際、それまで阿武川東岸の一部の地名であった「萩」の地名が、三角州全域を指すものになった。慶長9年(1604)、毛利輝元萩入府後、萩城の建設がはじまり、慶長13年(1608)に完成した。また築城と並行して城下町建設が行われた。町並みの概要是築城後半世紀を経た慶安5年(1652)作成の絵図に示されているが、その後拡大し、享保年間には町数30に及ぶ城下町として一応の完成をみた。

萩城は指月山頂の山城と山麓の平城とを組み合わせた平山城の形態をとり、背後の守りを指月山にまかせた梯郭式の縄張りである。指月山頂には要害（詰丸：純軍事的施設）、南麓の平地中央奥に天守閣や藩主の御殿のある本丸（天守曲輪）を配置し、本丸を囲んで東・西・南の三方に二の丸（二の曲輪）を設けた。二の丸東部には本事業の対象である東園のほか、藩主に関する祈祷を行う寺社が配され、二の丸西部には毛利元就等先祖の菩提寺が所在した。一方南部には御蔵元（江戸時代中期に三の丸に移転）や武具蔵等、政治的・軍事的な施設がおかれた。本丸南半には内堀が巡り、二の丸との間を隔てていた。二の丸の南端には中堀をめぐらせ、その外側に上級武士の居住地である三の丸（三の曲輪・堀内とも呼ぶ）が展開した。そして三の丸と城下町は外堀で区画した。外堀は、当初20間の堀幅であったものが、城下町側の堀端への町屋進出とともに14間、8間と狭められた。城下町から三の丸への出入りは北の総門・中の総門・平安古の総門のいわゆる大手三つの門に限られた。

毛利氏は江戸時代を通じて防長2カ国を統治し、萩城はその政治的中心であった。しかし文久3年(1863)、13代藩主毛利敬親は、国事多難の中、藩内各地への指揮号令に便利な山口に藩庁を移すことを決した。以後、萩城の機能は縮小され、萩城本丸御殿の大広間、大書院など建物一部や矢倉などが解除されて山口に移築された。

さらに明治維新後、明治7年には萩城の建物の入札、払い下げが実施された。築城から270年を経て、天守閣を初めとする城郭の建物は姿を消し、城の面影は石垣や堀に偲ばれるのみとなった。明治12年には本丸北東隅に毛利氏を祀る志都岐山神社が創建され、明治20年には本丸・二の丸の大部分が山口県最初の都市公園となった。

昭和26年に、国指定史跡に指定され、8度の追加指定を経て現在に至っている。



第1図 萩城の縄張及び物構

東園は萩城二の丸（二の曲輪）東部に所在する、藩主の遊息の地である。

まず、東園成立以前の同地の状況について述べる。現在、萩城に関して知られる最も古い絵図は、慶安5年(1652)絵図である。各地に残る正保期の国絵図と同じ性格の絵図で、幕府の命に応じて作成されたものである。城郭中心部の建物配置や外構施設の寸法が克明に記載され、この絵図が藩の軍事機密情報を幕府に提出することを目的に描かれたものであることを示している。

同絵図中の、現在東園が所在する二の丸東部を確認すると、松が数本描かれるのみで建物の記載はなく、空き地となっている。松の北には「山際ヨリ東ノ堀迄六拾八間」、南には「山際ヨリ東ノ堀迄九拾四間」と土

地の規模が書き込まれている。北側の1段高い場所に宮崎八幡宮が描かれるほか、「寺」と書き込まれた場所は、満願寺を示すと思われる。

その後、古文書によれば、元禄11年(1698)に、同地に菅原道真を祀る天神社が建立された。翌元禄12年から2・5・9月に藩主の江戸参勤の無事を願い、祈祷の連歌会が催された。またすでに御茶屋も存在し、連歌会の際の料理や茶湯などの接待の場所として利用されていたと考えられる。すなわち、東園の所在する土地は、当初天神社を中心とした祭祀空間として発足したと考えられるのである。

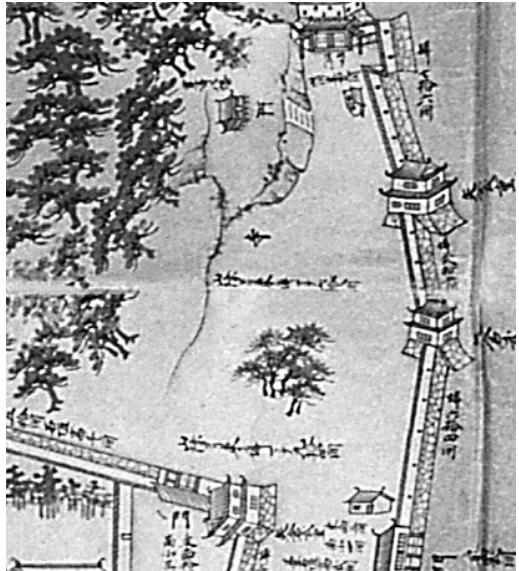
東園の成立は、草舎年表（毛利家文庫）の延享元年(1744)の条に「是年改二ノ丸号東苑」とある。萩藩の儒学者山県周南(1687～1752)が記した『東園記』によれば、江戸時代中期、6

代藩主毛利宗広(1717～1751)の時に、この地に古くからあった池を浚渫し、庭園を作った事に始まると言う。さらに続く7代藩主毛利重就(1725～1789)の時に、園内に「六景二十勝」を定めた。これは、庭園の中に設けられた建物・池・中島・巨大な石や珍しい樹木などを見どころとしたものである。延享元年は宗広の治世中なので、草舎年表の記述とも符号する。なお、『東園記』は成立年代を記さないが、文中で重就を現在の藩主としていることから、上限は重就が藩主となった宝暦元年(1751)、下限は周南の歿した宝暦2年(1752)で、ほぼ特定される。

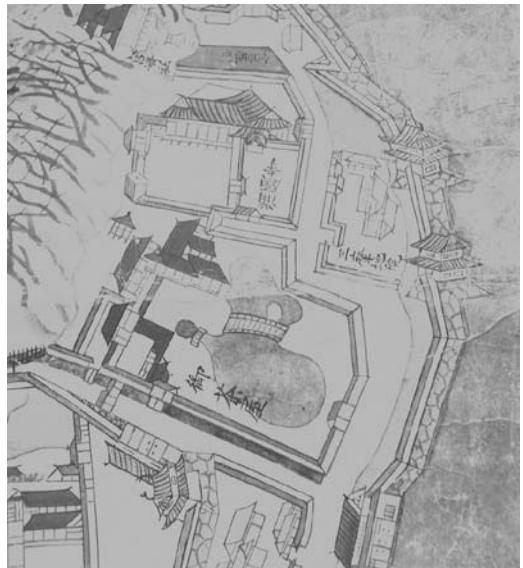
東園成立時期に当たる絵図として、元文年間(1736～40)絵図が現存する。図は北を上にして描かれ、東園は、北は満願寺・三摩地院、東は海沿いの城壁と矢倉、南は本丸の井上門・井上矢倉、西は指月山の山裾によって区画されている。また、東園の外周は土堀で囲まれており、南側と東側にそれぞれ1箇所ずつ棟門が設けられ、東側の棟門の西には小門が1箇所開いている。内部には西半に8棟の建物群、東半に庭園が描かれる。建物群の北東隅に描かれた小堂は、二の丸天神社と思われる。建物群の屋根は桧皮葺きを示す茶色に着色されている。ちなみに瓦葺きは青色で表現されている。また、「御茶屋」の書入れがあることから、この建物群が「東園御茶屋」であることがわかる。

この図から建物の寸法や規模を読み取ることは困難であるが、概要は判明する。東園園池には2つの橋が架かっている。絵画表現の類似性から素材は同一で、石橋ではなく木橋か土橋と考えられる。

また、宝暦7年～明和7年(1757～70)に作成されたと思われる萩城絵図では、東園内部に建物を描く代わりに、北側に「東園御茶屋」南側に「御鳥部屋」、東側に「東園御庭」と記した付せんが貼り付けられている。このことから、東園成立当初には、御茶屋南側に、鷹の飼養所である御鳥部屋が設けられていたことがわかる。なお、御鳥部屋が東園内に建設された年代は不明であるが、『防長寺社由来』の満願寺の項（寛保元年



第2図 慶安5年(1652)萩城下町絵図部分
(山口県文書館所蔵)



第3図 元文年間(1736～40)萩城下町絵図部分
(萩博物館所蔵)

=1741提出)によれば、その地には元々満願寺家来の居木屋敷があり、御鳥部屋建設のために召し上げられたという。

この時期の記録として、「御城内御作事諸御惱所坪数（毛利家文庫8館邸19）」が存在する。これは天明6年(1786)に改訂された、萩城内における作事方管轄の建築目録であり、東園建築の種別、坪数などを知ることができる。以下にその内容を記す。なお、屋根の仕様は原本では改行されているが、紙数節約のため一行に記載した。

(前略)

東園御茶屋

- 一 御座之間二ノ間三ノ間廻り御土地共共ニ三拾七坪」但屋根桧皮葺
- 一 同所湯殿御用場共式坪七合五勺」但屋根桟瓦葺
- 一 同御次廻り拾六坪」但屋根桧皮葺
- 一 同所湯殿式ヶ所三坪半」但屋根桟瓦葺
- 一 同所御台所廻り長局共式拾四坪七合五勺」但屋根同断
- 一 天神社本社釣屋共三拾七合五勺」但屋根桧皮葺内壱坪銅瓦
- 一 同拝殿八坪」但屋根桟瓦葺
- 一 御茶屋物置用場共四坪半」但屋根同断

メ百坪式合五勺

内

五拾五坪七合五勺 桧皮葺
壱坪 銅瓦葺
四拾三坪五合 桟瓦葺

メ練塀百五拾間

渡塀拾壱間半

ひしき竹塀拾三間半

杉塀拾間半

□しかき九寸六間半

井戸壱ヶ所

御中門四ヶ所

内

壱ヶ所 桟瓦ふき
式ヶ所 杉皮葺
壱ヶ所 本瓦ふき

御鷹部屋御鳥部屋

- 一 御鷹方役所拾八坪」但屋根曾木葺
- 一 御鷹塀三ヶ所式拾五坪六合」但屋根桧皮葺内四坪八合桟瓦ふき

- 一 天神鳥場新キ御鷹壇一ヶ所拾四坪弐合五勺」但屋根棧瓦ふき
- 一 餌壇弐ヶ所拾五坪六合」但屋根同断
- 一 御鳥方役所弐拾八坪五合」但屋根同断
- 一 同所前之番所壹坪半」但屋根同断

メ百弐坪八合五勺

内

弐拾坪八合 桧皮葺

拾八坪 曽木葺

六拾四坪五勺 棧瓦ふき

メ練塀八間

渡塀五間用心口三ヶ所共

門壹ヶ所

雪隠弐ヶ所

(中略)

- 一 東園橋弐ヶ所内壹ヶ所石橋壹ヶ所板橋

(後略)

以上、天神社を含む東園御茶屋の建物の総坪数は100坪2合5勺(内天神社の総坪数11坪7合5勺)であった。また、この当時も東園内に存在していたと思われる御鷹部屋・御鳥部屋の総坪数は102坪8合5勺であった。

次に東園に大きな動きが見られるのは天保3年(1832)である。東園御茶屋の南側に、孝姫(11代藩主毛利斉元の次女)及び基之允(同三男教徳)のための御部屋が建設された。「孝姫様基之允様東園御部屋差図」(第8図)という、詳細な平面図が残されている。「忠正公伝」によると、この御部屋は「西御殿」と称された。「出来るだけ御手軽(簡素)に建て調えること」「なるべく御庭、御境内に張り出し申さぬように」という注文がつけられていることから、東園の景観を損なわず、しかも簡素に建てられたものと思われる。この東園御部屋について、本中真「第5章 東園地区の復原」(『史跡萩城跡(東園地区)整備計画策定報告書』、1990)及び「萩城東園庭園における眺望景観」(『造園雑誌』54、1991)をもとに概要を以下に記す。

差図によれば、御殿の南端に「大灌」と記す帯状の部分があり、これは現在東園南端を斜行する堀に比定することができる。それゆえ、御茶屋・御部屋を中心とする建物群は、この堀に接して北側に存在したものと推定できる。

建物は大きく4つのブロックに分かれている。門に入った正面に位置する主殿、その南の個室の並ぶ二階屋、反対の北側に廊下で続く台所屋、さらにその北東に建つ、庭園に面した御茶屋である。御殿の平面を機能的に区分すると、前面の玄関から奥の御座の間に至る導入部とその左右にある控侍の番所的的部分、中央に位置する御膳所や御茶之間等の日常生活上の機能を果たす部分、最奥の御座ノ間とその前室部分の3つである。

「御庭」に向かって張り出している主殿は、東西の棟通りに「フスマ四」による間仕切りを設け、これを中心に左右対称に「六畳」の控えの間と「八畳」の「御座ノ間」をとっている。つまり、主室となるべき座敷が並立することになり、あるいは片方が孝姫様用で、片方が基之允様用と考えること

も可能である。ところが、この「御座ノ間」の東側に当たる主殿の東端の間は、特殊な構造と平面を持ち、座敷の延長としての扱いでは律しきれない空間を構成している。すなわち、本来ならば「御座ノ間」から「御庭」を眺望したくなる東面を壁で仕切り、ここに桁行4間・梁行1.5間の部屋をとり、ここだけを二階屋としていることである。梁行は「御座ノ間」と全く同じであるところから、ここだけ別の屋根をかけていたとは考えにくく、二階屋といつてもかなり無理な構造であったことが想定される。事実、一階は東壁側に押入と階段とをとり、「小納戸」との記入があるから、いたって閉鎖的な天井の低い部屋であったと考えられる。しかしこれが二階へ上がれば一転して開放的となり、東側は「セウシハ」（障子8枚のこと）の記入にみられるとおり、いかにも高見から室内を望むのにもっとも良い条件を備えた部屋となっている。このことは、この絵図より年代的には少し遡る頃にあらわされた『東園記』にいう「聚遠」を彷彿させるにふさわしい構えであるということができる。

御茶屋は、その名の通り接待、遊興の場だけに、数奇屋を主体とした造りであったと考えてよい。問題は直接庭園に臨む茶室の外回りに単線で囲んだ部分の処理で、この図だけでは外周に屋根が設けられていたのか、または地上での仕上げ工法の差なのかが判然としない。もし屋根があったとすると茶室の外に濡縁がついているところからして、本体の屋根とは別に単なる土庇がめぐっていたとする方が、さらに数奇屋的要素が加味されて、全体の統一感がでる。

また、おそらくはこの御部屋新築に伴って、御茶屋南側にあった御鷹部屋・御鳥部屋は東園の外に移されたと思われる。弘化4年(1847)頃の萩城下町絵図で、二の丸南部の武具蔵・御廄の間に「御鳥部屋」と記されていることは、この推測を裏付けるものである。

なお、この御部屋はあまり長く存続しなかった。天保6年には兩人は新川御殿に移居し、天保8年には御部屋は解体され、わずか5年ほどで姿を消したことになる。

また、東園は、藩主が参勤交代で江戸詰の際には利用がなくなることから、他の役所に利用されることもあった。天保12年(1841)4月12日、本丸御殿東北隅に位置する台所部分が焼失した。台所は早速再建に取り掛かられ、翌天保13年5月までには完成した。台所普請の約1年間、御数寄屋方役所が東園に移されたが、台所再建後は再び元の場所に戻った。このとき御数寄屋方役所の建物は東園内に新たに建設されたのではなく、東園の御茶屋を一時転用していたものと思われる。

東園の御茶屋から御数寄屋方役所が立ち退いた翌天保14年には、御茶屋を借り受けて藩の諸記録の整理編集がなされ、以後、この事業は弘化2年(1845)、弘化4年(1847)、嘉永2年(1849)、嘉永5年の5カ年に渡り、藩主の江戸参勤中に行われた。ただし、記録によると、東園が祭祀や遊息の行事に利用される場合には、たとえ東園内に役所が設置されていようと、その役所は一時的に閉鎖され、行事が優先されたようである。

文久3年(1863)4月16日、萩藩13代藩主毛利敬親は萩城を発し、山口に移り中河原の茶屋に移った。これを山口移鎮といい、この時以降、藩庁は山口に移ることとなる。これより先、同年1月15日に本丸御殿の西長屋(大奥)の女中衆を東園に移し、東園御長屋と称させた。これは山口移鎮後、西長屋を城代の役所としていることから、その布石であったが、その際、東園御茶屋の建物に付設する形で新たに建物(東園御長屋)を建設または移築したものと思われる。

明治維新後、萩城とともに、東園もその機能を失った。明治3年(1870)9月、萩藩大組士の山添金之助が住居として東園御茶屋の借用を願い出、許可されているので、この頃にはすでに東園御茶屋は使用されてい

なかったことがわかる。

この頃の図面として、明治2年から萩城が解体される明治7年までに描かれたと思われる萩城絵図には、東園内に建物が描かれ「東園茶屋」と記されている。この絵図から大まかではあるが、「東園茶屋」の平面的な形態を把握することができる。それによると、先に「孝姫様基之允様東園御部屋差図」で見たように、北側のいわゆる東園御茶屋といわれる建物に接続して南側にも建物が建てられている。この南側の建物は、天保8年に解除された孝姫・基之允の御部屋でないことは言うまでもないが、おそらく文久3年(1863)に西長屋の女中衆を東園に移した時に建設または移築されたであろう建物と考えられる。このように「東園茶屋」の建物は、その役目を終え不用となつてはいたが明治になってからも存続し、同3年(1870)に山添金之助に貸し渡され、同7年の萩城解体後は山添玲(金之助との関係は不明)の宅地であることが確認できる。そして明治42年(1909)作成の地籍図には建物が描かれていないことから、遅くともこの頃までにはこの建物は解体され、東園の遺構としては池のみが残つたのである。

大正時代の東園の様子については、大正14年5月に、郷土史家安藤紀一によって記された、「東園修理贅議」が参考となる。それによれば、安藤は、大正14年4月5日、天樹公(毛利輝元)三百年祭の祭典の日、東園の池畔の草を除去し、当時の石組を露出されたばかりか、中島の上に新たに小さな東屋が作られているのを見た。これは誠によい計画であるとする一方、東園は大きく荒廃し、杉林となっているので、草の除去だけでは東園を復元できない。できればこの機会をとらえ、周南の『東園記』に記されている内容を標準として、池を浚渫し、洲を埋め、橋を架け、樹を□(判読困難)し、これを指月公園に併設して、園内で最も幽静森厳の一区画とすることを願う。としている。この安藤の提言がどこまで実行されたかは不明であるが、現状ではその通り、池は浚渫され、中島には橋が架けられている。ただし、江戸時代には中島には橋が架かっていなかつたため、この部分では護岸が改変されている可能性が高い。

また、戦後に至つて、東園の一角には小動物園が設けられた。現在、50代以上の人聞くと、孔雀などが飼育されていたことを記憶しているが、これは平成以前に廃止され、その後はツツジ園、椿園などに利用されたが、現在は廃止している。また、池の周囲には昭和38年(1963)萩ライオンズクラブによってツツジが植えられ、現在に至っている。

3. 東園の六景二十勝について

山県周南の「東園記」に記す六景二十勝は、表1の通りである。「東園記」出来以後の史実に大がかりな庭園の改作を示す記事を認めないので、おそらくこの時期の庭園景観は、幕末まで存続したのではないかと考えられる。東園の庭園部分が10,600m²と比較的狭いため、豊富な景観がかなりの高密度で凝集されていたことがうかがえる。これらの六景二十勝のうちで、ほぼ間違なく位置の復元ができるものが8箇所、比較的推定復元の容易なものが9箇所である。

六景のうち、1. 聚遠は『東園記』に記すように高さの高い建物であったことがうかがえ、眺望の利く部屋を指すのであろう。しかし、その位置については絵図や文献から特定することはできない。また、現状の園池が各絵図に記す園池の形態と酷似していることを考えれば、「東園記」に記す池と現在の池との間に形状の上で大差があるようには考えられない。従つて、2. 停雲、3. 小蓬萊が現在の池水面と中島を指すことは明白である。同時に4. 龍蟠が寛保から延享年間の絵図に記す南の橋を指すことも明らかである。これに対して、

5. 老人峰は位置特定の明確な決め手を欠くが、池の北に存在し小山を形成していることがうかがわれるから、現状の池北岸から東園と満願寺とを隔てる築地塀までのやや小高い樹林帯を比定することが可能である。6. 臨湖亭は老人峰の東に隣接しているから、これもある程度の位置を推定することが可能である。

表1 東園六景二十勝概要一覧

六景

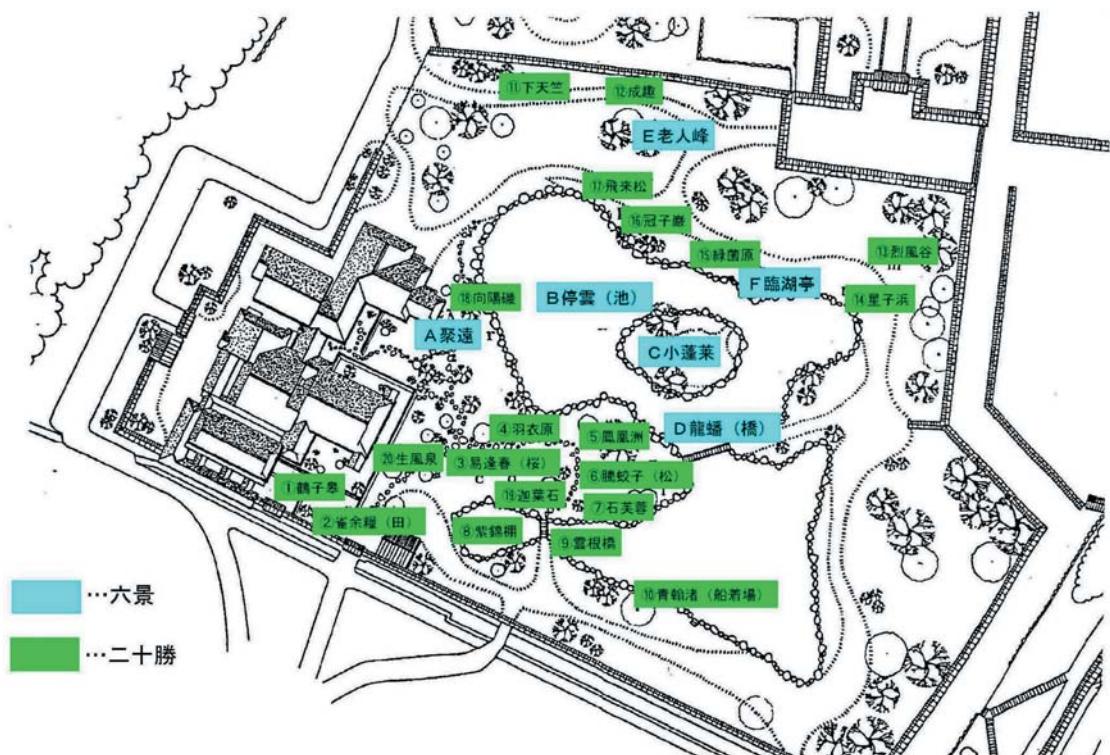
No.	名称	読み方	説明
1	聚遠	シュウエン	館の東軒
2	停雲	ティウン	池
3	小蓬萊	ショウホウライ	中島。珍しい岩や石、美しい草や枝
4	龍蟠	リョウバン	橋。中島の南。龍の姿のようにうねうねしている。
5	老人峰	ロウジンホウ	池の北。老人星（南極星=カノープス）に対向するの意
6	臨湖亭	リンコテイ	老人峰の東。東屋は鳥の羽の如し。水上閣

二十勝

No.	名称	読み方	説明
1	鶴子皋	カクシコウ	館の南。2羽の鶴が囲いの中に住む
2	雀余糧	ジャクヨリヨウ	一畝に満たない、雀の餌程度の水田。田園地帯の趣
3	易逢春	エキホウシン	桜。四季開花。駿河からの分枝
4	羽衣原	ウイゲン	松原。易逢春の隣。三保の洲になぞらえる。
5	鳳凰洲	ホウオウス	羽衣原から龍蟠橋の間。水中に突出。青石を敷き詰める。ソテツ植栽あり
6	騰蛟子	トウコウシ	鳳凰州の岸。大蛇が舞っているような24尺の松。
7	石芙蓉	セキフヨウ	鳳凰洲にある富士山の山容に類似した石
8	紫錦棚	シキンボウ	紫の藤。羽衣原の南の小池の上に架してある。
9	雲根橋	ウンコンキョウ	紫錦棚の池を中断する橋
10	青翰渚	セイカンショ	池南際の水中にある船着場
11	下天竺	カテンジク	池の北の樹林。満願寺に至る
12	成趣	セイシユ	樹林後方の野菜園
13	烈風谷	レップウコク	樹林奥の暗部。2頭の木製の虎あり。
14	星子浜	セイシヒン	老人峰の跡が池水際にあり。白い小石が敷かれている。
15	緑菌原	リョクキンゲン	星子浜の西。冠子巖に至る箇所に青草を織ったような部分がある。
16	冠子巖	カンシゲン	緑菌原の西方、館に近い水辺に存在する巨石を組んだ山
17	飛来松	ヒライショウ	冠子巖の岩間に生えている松
18	向陽磯	コウヨウキ	館の正面。小蓬萊に対向する位置。
19	迦葉石	カショウセキ	磯から8尺の位置にある平らな大石。
20	生風泉	ショウフウセン	階の傍らに存在。湧水があり、手洗いあり。

二十勝では、まず11. 下天竺の位置を東園区画の東寄付方隈付近に求めることができる。これはおそらく6. 老人峰の後方に当たるのであろう。9. 雲根橋は現在の池西南隅に架かる橋と同一位置に存在した橋で、この橋

の西方の小池に8. 紫錦棚を想定することが可能である。また、19. 遊葉石は現在も南の橋の北袂に遺存する上面の平らな巨大な石を指すのであろう。これに対してその他の16勝地は上記のいくつかの勝地の位置を勘案して大まかな位置の特定はできるが、確実な証拠はない。例えば、13. 烈風谷や14. 星子浜は6. 老人峰の位置から割り出すことができるし、15. 緑菌原や16. 冠子巖は14. 星子浜の位置から導き出すことができる。10. 青翰渚は9. 雲根橋東方の池南岸辺りに比定できる。また、17. 飛来松、18. 向陽磯も同様にして位置を求めることができる。このように、確実な決め手は欠いているのであるが、二十勝の各位置をほぼ推定することができる。これを図示したものが第4図である。見られる通り、館の南の1. 鶴子臥を先頭に、館西から池の西北隅、西岸、南岸、東岸を経て北岸へと至り、再び西岸へと回帰する反時計回りのコースが設定されていることがわかる。すなわち東園は、園池の周囲を園路沿いに六景二十勝を順次鑑賞できるように設計された回遊式庭園であったことがわかる。

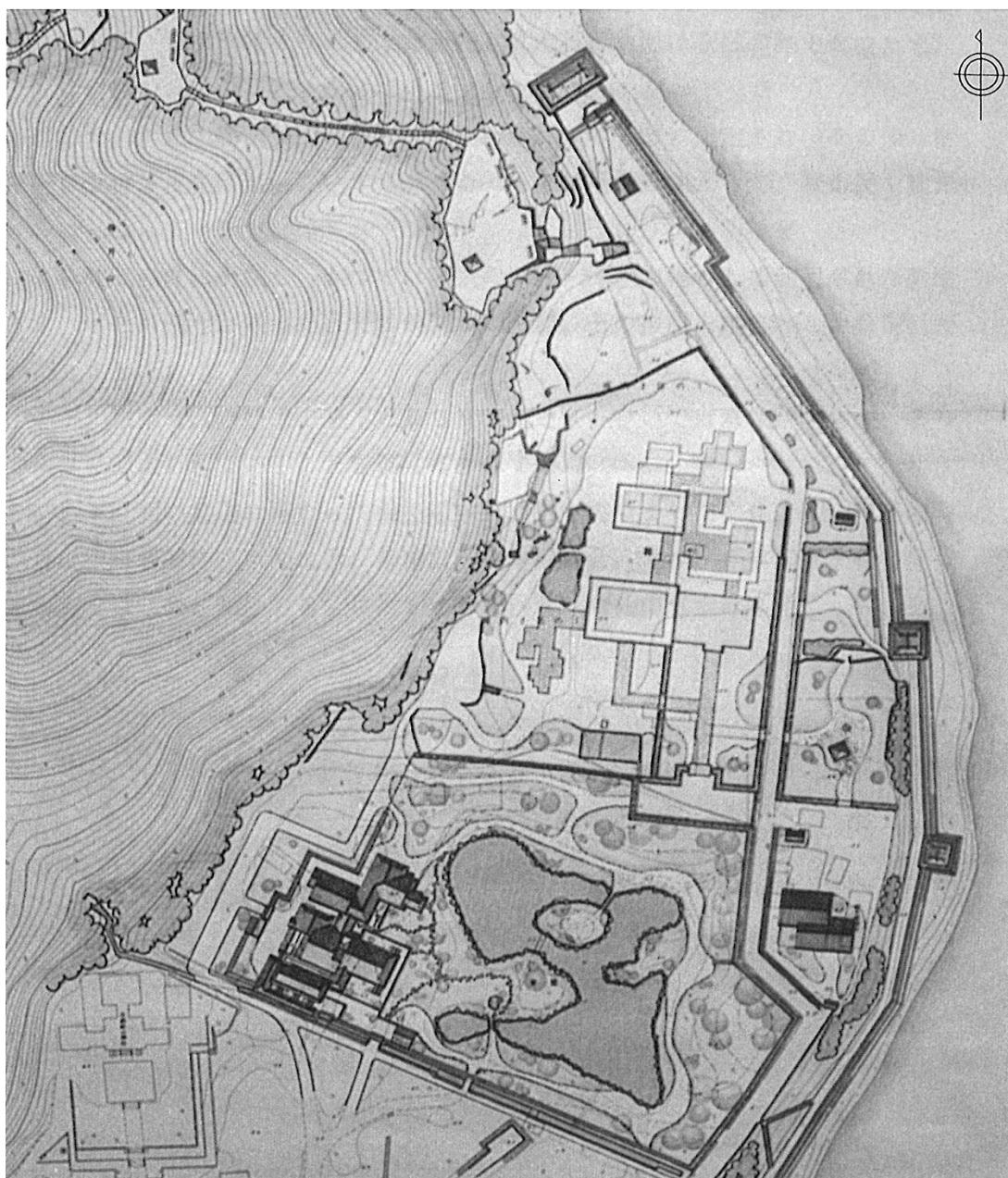


第4図 東園六景二十勝比定図

第2章 保存整備事業に至る経緯

1. 整備計画の策定

萩市では、昭和63年度及び平成元年度の2箇年にわたり、萩城跡二の丸（二の曲輪）に所在する東園地区を中心とした整備に係る基本方針及び計画を定めるため、史跡萩城跡（東園地区）整備計画策定事業を実施した。その中で同整備計画策定協議会の委員でもあった高瀬要一氏（当時は奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 計測修景調査室長）、本中眞氏（当時は奈良国立文化財研究所 平城宮跡発掘調査部 主任研究官）の協力を得て、萩城跡（東園地区）の整備計画全体図及び東園復原パース図等を作成し、東園・満願寺・三摩地院・宮崎八幡宮等の一体的な整備計画の基礎資料とした（第5・6図）。そして、その整備内容を『史跡萩城跡（東園地区）整備計画策定報告書』にまとめ、平成2年3月に刊行した。

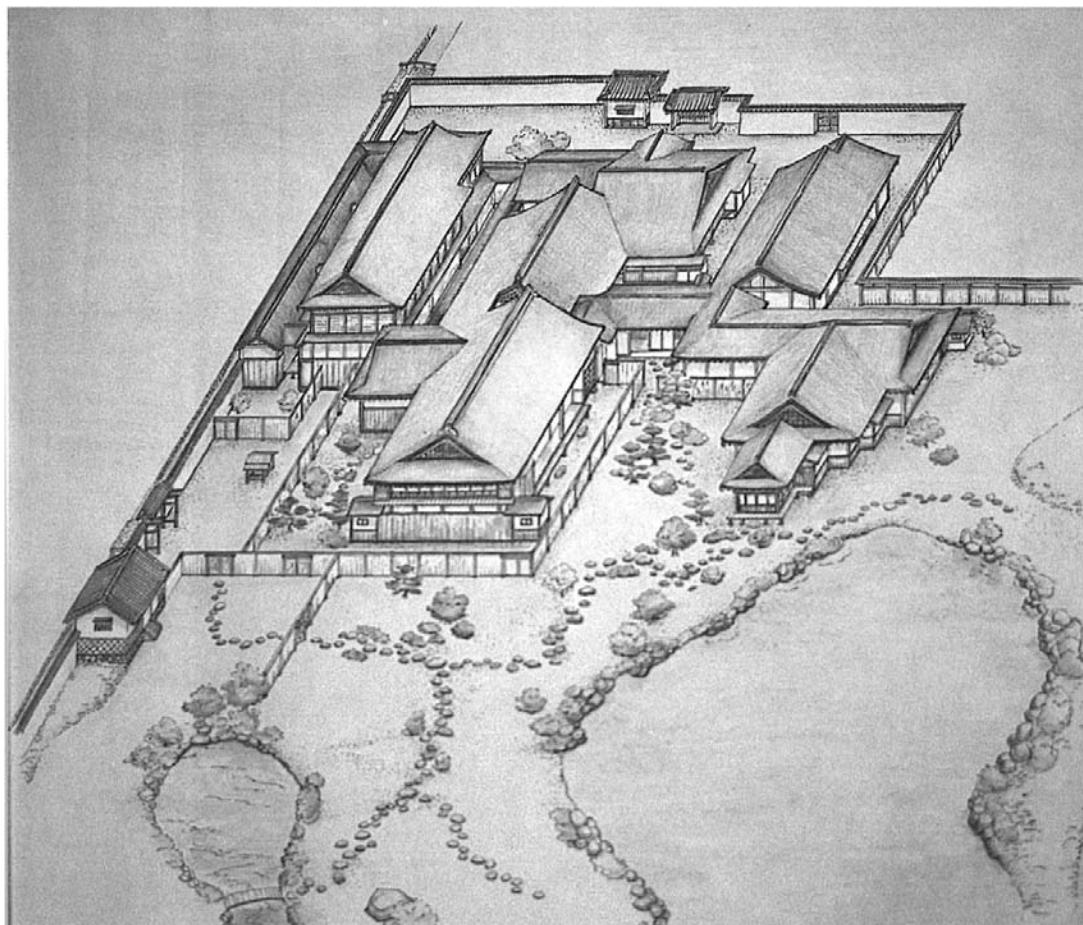


第5図 史跡萩城跡（東園地区）整備計画全体図

この計画のもと、東園地区を市民の憩いの場として、高い学術的価値を持った史跡整備の実現に向け事業を進めていく予定であったが、当時は、並行して史跡萩城跡・史跡萩城城下町保存管理計画の策定事業も実施中であり、昭和60年(1985)から萩市歴史的地区環境街路整備事業として整備を進めていた外堀東側の都市計画道路事業と平成元年(1989)に史跡萩城跡に追加指定された外堀地区の保存整備事業の完成が優先されたため、着手には至らなかった。

2. 保存整備事業

その後、外堀地区の保存整備事業は平成22年度に完了し、ようやく平成23年度から東園保存整備事業に着手となった。整備方針や整備内容は昭和63年度・平成元年度に策定した基本計画を踏襲しているが、御茶屋跡・御殿跡・園池等をはじめとした東園に特化した整備内容に限定することになった。具体的には、①『孝姫様基之允様東園御部屋差図』を基礎資料として、建物の原寸大復元及び遺構平面表示を行う。②原寸大復元は御茶屋跡のみとする。③御殿跡の主殿・台所屋等の遺構は平面表示とする。④庭園の一部復元と修景を行う。⑤橋を復元し、山県周南『東園記』記載の「六景二十勝」のうち位置特定の可能なものを解説板等によって表示する。⑥現状植栽を適宜伐採し、新たな灌木等を補充する。⑦築地塀・門等の外構施設を原寸大復元する。⑧池を回遊する園路の復元を行う。等の内容を掲げ、総事業費272,277千円（概算）で平成31年度完成を目指とした。



第6図 東園推定復原図（東上空から）

第3章 保存整備事業の経過

1. 東園保存整備事業の概要

(1) 方針

東園保存整備は、残存状況の良好な園池及びその周辺の景観を含めた大名庭園の往時の姿と御茶屋及び東園全体をとり囲んでいた築地塀（土塀）の復元を目指し着手した。まずは、発掘調査による地下遺構の確認を行うとともに、専門家で構成する「史跡萩城跡等整備委員会」の指導・助言を受けながら整備手法を検討することとした。その方針は以下のとおりである。

- ①萩城跡において東園が占める空間的位置およびその特殊性が、来訪者にわかるように整備する。
- ②全体的に廃城のイメージの濃い萩城跡の中で、藩政時代の景観をビジュアルに再現した空間創出を目指し、東園地区の特殊性を強調する。
- ③東園の庭園と御茶屋を一体的に復元整備し、将来萩市民の活用に供する場とする。

(2) 事業実施体制

事業の事務局は萩市文化財保護課に置いた。

歴史まちづくり部長	湯本 重男（平成23～25年度）
	植山 幸三（平成26～27年度）
まちじゅう博物館推進部長	松浦 好洋（平成28年度）
	杉山 寛校（平成29年度～）
文化財保護課長	松浦 好洋（平成23年度）
	柴田 一郎（平成24～25年度）
	池田 亮（平成26～27年度）
	大槻 洋二（平成28年度～）
統括専門職	中村 達也（平成26年度～）
文化財保護課長補佐	松浦むつみ（平成26～27年度）
	山下 芳夫（平成26年10月～27年度）
	市瀬 公俊（平成29年度～）
総括専門職	中村 達也（平成23～25年度）
	柏本 秋生（平成29年10月～）
埋蔵文化財係長	上野耕太郎（平成23～26年度）
文化財保護係長	中村 浩二（平成27年度～29年9月）
	市瀬 公俊〔兼〕（平成29年度10月～）
主任専門職	柏本 秋生（平成23年度～29年9月）
	西川 雄大（平成23年度～）
	市瀬 公俊（平成28年度）
主任	岡田 一広（平成23年度～26年9月）
	神崎 紘充（平成23～24年度）
	松本 周作（平成29年度～）

(3) 史跡萩城跡等整備委員会

萩市ではこれまで史跡萩城跡保存整備事業として平成8年度から平成22年度までの間、外堀の整備を実施した。それに伴い萩城跡等整備委員会を組織し、保存・整備・活用方法等について各方面の専門家から指導・助言を受けながら事業を進めた。平成23年度からは史跡萩城跡等整備委員会と名称を改め、史跡萩城跡・史跡萩城城下町及びその周辺地域の保存と整備の具体化を目的に委員会を開催し、保存整備事業の内容に関して審議を諮りながら事業を進めている。併せて文化庁文化財部記念物課及び山口県教育庁社会教育・文化財課からもオブザーバーとして出席を求めている。史跡萩城跡等整備委員会の任期は平成23年12月13日から平成30年3月31日までである。なお、下記委員の所属先・役職名等は就任当時のものを記している。

服部 英雄（九州大学大学院教授：歴史）会長

篠原 修（東京大学名誉教授：都市景観）副会長

仲 隆裕（京都造形芸術大学教授：庭園史）

乗安和二三（財山口県埋蔵文化財センター所長：考古学）※平成26年12月逝去

渡辺 一雄（梅光学院大学教授：考古学）※平成27年3月から委嘱

樋口 尚樹（萩博物館副館長：地方史）

東園に関する整備委員会での議事

[平成23年度]

第1回 平成23年12月13日(火)：整備計画の概要説明

第2回 平成24年3月28日(水)：3Dレーザー測量成果品の概要説明

[平成24年度]

第1回 平成24年9月18日(火)：発掘調査範囲変更の概要説明、東園古写真・分間図の検討

第2回 平成25年3月18日(月)：発掘調査の成果報告

[平成26年度]

第1回 平成27年1月13日(火)：発掘調査進捗状況の報告

第2回 平成27年3月25日(水)：発掘調査の成果報告

[平成27年度]

第1回 平成28年2月17日(水)：東園保存整備の今後の計画について

2. 事業の経過

(1) 平成23年度事業

史跡萩城跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業として平成23年2月9日付け萩文第215号で申請し、平成23年4月1日付け指令平23教社文第4号で国庫補助金交付決定を受け、平成24年3月30日付け萩文第297号で実績報告を行った。

事業内容は、地表面に露出する園池周辺の石組遺構



第7図 東園周辺の3Dレーザー測量図

及び周辺地形を測量し、遺構配置状況や遺構構築状況を検討するための基礎資料として3Dレーザー測量を実施した。

(2) 平成24年度事業

史跡萩城跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業として平成24年2月13日付け萩文第235号で申請し、平成24年4月10日付け24庁財第13号で国庫補助金交付の決定を受けた事業内容を萩文第119号平成24年7月19日付けで事業内容の変更を行い、平成24年8月31日付け指令平24教社文第988号で計画変更承認の決定を受けた。平成25年3月30日付け萩文第324号で実績報告を行った。

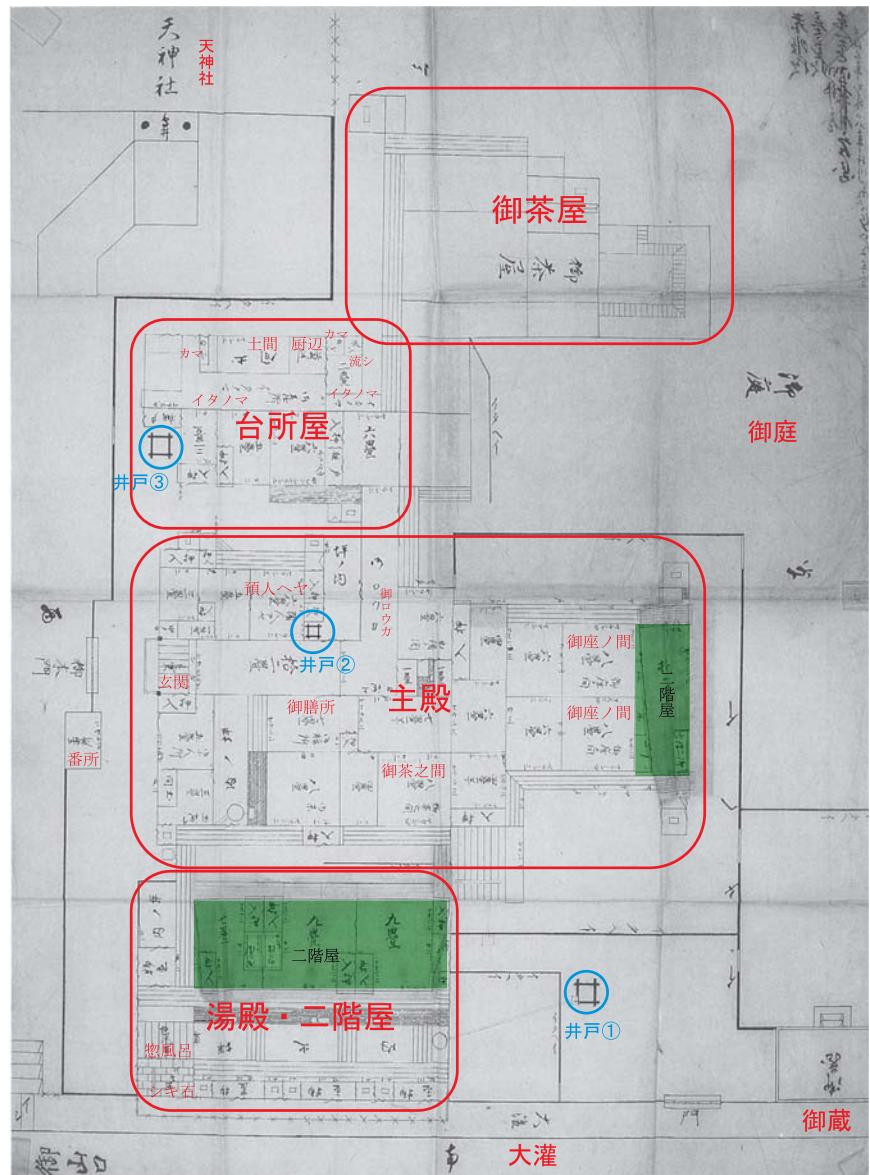
当初事業内容は、園池・御殿跡（台所屋・主殿・湯殿・二階屋）・御茶屋跡周辺10箇所（239m²）での発掘調査及び調査範囲の3Dレーザー測量を実施する予定であったが、平成24年度交付申請書の提出後に開催した平成23年度第2回 史跡萩城跡等整備委員会（平成24年3月28日開催）において、以下の指導・助言を受けた。

・「差図に描かれている井戸は地下遺構として残存している可能性が高いので、まずは井戸の位置を確定した上で建物位置の調査に着手する方がよい。」（乗安委員）

・「園池周辺は発掘調査を行う前に護岸石等を清掃し、石組の構築状況をよく観察すべきである。石に個体番号を付けた「石材カルテ」の作成も有効である。」（仲委員）

・「3Dレーザー測量図を基礎資料として、当時の人が散策した経路、六景二十勝の視点から各名所の特定や植栽のシミュレーションを行い、不用樹木を決定することも必要。伐採は優先順位を付けて徐々に進める方がよい。急激に伐ると土壤に変化をもたらす恐れがある。」（仲委員）

以上のことから平成24年度の発掘調査では園池護岸の調査は行わず、御殿跡周辺の井戸検出を目的とした3箇所（89m²）での発掘調査に変更した。また狭小な面積での3Dレーザー測量の実施は非効率であるため、



第8図 孝姫様基之允様東園御部屋差図（山口県文書館所蔵に加筆）

来年度以降の調査範囲を含めたより広範囲での測量実施に事業内容を変更した。

発掘調査については後述するが、3箇所でのトレント調査を実施し、うち1箇所で「差図」に該当すると考えられる井戸を検出した。なお、平成25年度は事業実施せず、平成24年度に発掘した結果を精査するとともに、「差図」・分間図等の再検討及び文書館等の史料との照合作業を実施した。

(3) 平成26年度事業

史跡萩城跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業として平成26年2月6日付け萩文第227号で申請し、平成26年4月1日付け指令平26教社文第180号により補助金の交付の決定を受け、平成27年3月31日付け萩文第293号で実績報告を行った。

平成26年度事業では、検討内容をもとに井戸が検出できなかった平成24年度の2箇所のトレントを拡張して発掘調査を実施した。その結果、井戸は両トレントの間に1基存在する可能性が高くなった。調査終盤では3Dレーザー測量を実施し、遺構平面図を作成した。なお、各トレントは次年度以降も近接地を調査する予定であったため、埋め戻さずに土嚢、防水シートによる遺構保護を行った。

(4) 平成27年度事業

史跡萩城跡 歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業として平成27年2月5日付けで申請し、平成27年4月9日付け26府財第542号で国庫補助金交付の決定を受けた事業内容を平成28年2月12日付け萩文第211号で事業内容の変更を行い、平成28年2月26日付け27受府財第12号の394により計画変更承認の決定を受けた。平成28年3月31日付け萩文第251号で実績報告を行った。

平成27年度事業では、並行して実施している萩城跡石垣保存修理事業を優先する必要があったため、東園保存整備事業は休止とした。なお、平成24・26年度に発掘調査を実施し、検出遺構の仮保護を継続していたトレント3箇所のうち、24-3トレントは埋め戻しを行い、その他については土嚢、防水シートの取り替えを行った。

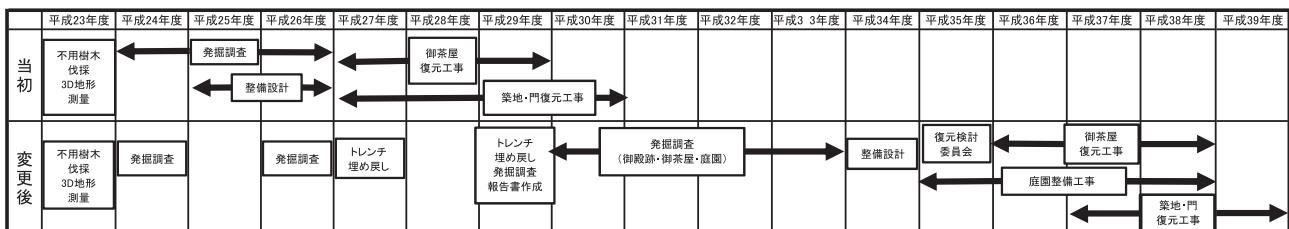
なお、平成27年11月には文化庁より平成28年度から「調査」と「整備」を分離するため、これまで史跡整備予算で行っていた発掘調査経費を全て埋蔵文化財調査予算に切り替えるという方針が伝えられた。東園ではすでに史跡整備予算で実施していた平成24・26年度の発掘調査について、速やかな報告書の刊行が必要となった。

(5) 平成29年度事業

史跡萩城跡 歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業として平成29年2月8日付け萩文第234号で申請し、平成29年4月3日付け指令平教社文第52号で国庫補助金交付の決定を受けた。

平成29年度事業では、平成24・26年度に発掘調査を実施し、検出遺構の仮保護を継続していた2箇所のトレントの埋め戻しを行い、当該発掘調査報告書を作成した。

表2 東園保存整備事業年次計画



3. 事業費

平成23年度から平成26年度までは、前項で記したように史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業の国庫補助を受けた。平成23年度は園池周辺の3Dレーザー測量及び不用樹木伐採に2,320,687円を要した。平成24年度は発掘調査及びそれに伴う表土掘削、基準点測量等に1,904,214円を要した。平成26年度は発掘調査及びそれに伴う表土掘削、3Dレーザー測量に3,974,566円を要した。

平成27年度以降は、歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業の国庫補助を受けた。平成27年度は24-1・26-1トレンチ、24-2・26-2トレンチの遺構保護及び24-3トレンチの埋め戻し等に544,180円を要した。平成29年度は24-1・26-1トレンチ、24-2・26-2トレンチの埋め戻し及び発掘調査報告書作成等に2,900,000円（見込み）を要した。

表3 年度別事業費一覧

	平成23年度 (史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業)	平成24年度 (史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業)	平成26年度 (史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業)	平成27年度 (歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業)	平成29年度 (歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業)
総事業費	9,074,000	10,509,509	3,974,566	9,239,266	6,780,000 ※見込み
東園保存整備費	2,320,687	1,904,214	3,974,566	544,180	2,900,000 ※見込み
事業内容	園池周辺の3Dレーザー測量及び不用樹木伐採	表土掘削 基準点測量 発掘調査	表土掘削 発掘調査 3Dレーザー測量	遺構保護及び 埋め戻し	遺構保護及び 埋め戻し 報告書作成
補助率	50% (国)	50% (国)	50% (国)	50% (国)	50% (国)

表4 東園保存整備事業請負業者一覧

年度	種別	業務内容	請負業者
平成23年度	史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業	3Dレーザー測量	(株)オオバ
平成24年度	史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業	表土掘削 基準点測量	萩土建株式会社 有限会社ナガト地研
平成26年度	史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業	表土掘削 3Dレーザー測量	三栄建設有限会社 大和コンサル株式会社
平成27年度	歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業	遺構保護・埋め戻し	三栄建設有限会社
平成29年度	歴史活き活き！史跡等総合活用整備事業	遺構保護・埋め戻し 報告書作成	有限会社恩村組 有限会社松陰堂印刷所

第4章 発掘調査の概要

1. 調査の経過と方法

調査経過

発掘調査に伴う史跡現状変更は、平成24年10月17日付け萩文第184号で申請し、平成24年11月16日付け24受庁財第4号の1516で包括的な許可を得た。その後、平成25年11月15日付け25受庁財第4号の720で現状変更計画書（期間変更）の承認を受け、平成26年4月1日付け26受庁財第4号の121で現状変更計画書（平成26年度の調査範囲）の承認を受けた。

平成24年度の調査範囲は、山口県文書館蔵『孝姫様基之允様東園御部屋差図』（以下「差図」と記す）を現在の地形図に投影した資料を参考とし、井戸が所在したと考えられる3箇所にトレンチを設定した。調査は平成25年1月21日から着手し、同年3月29日に終了した。

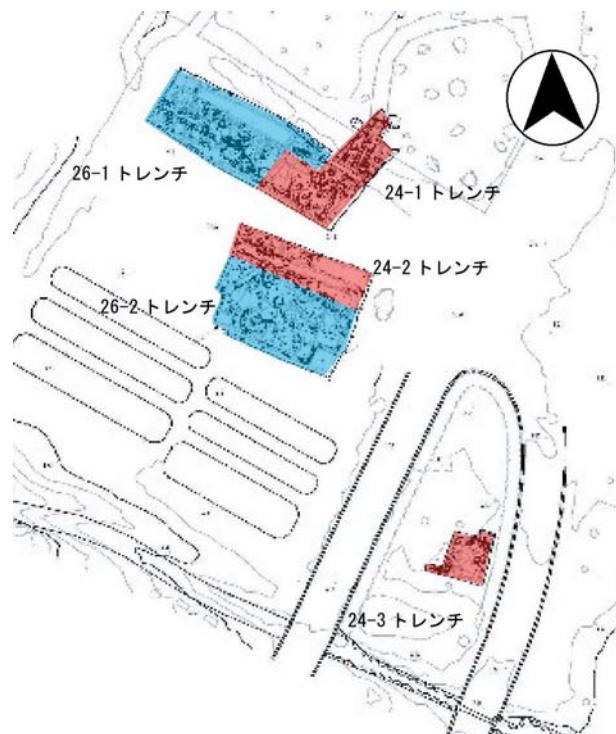
台所屋の井戸の検出を目的とした24-1トレンチ（39m²）は、すべて人力掘削で調査を行った。調査区内では南北石組溝・東西石組溝等を検出した。次に主殿内の井戸の検出を目的とした24-2トレンチ（30m²）では、近現代の堆積土である約20m³について重機掘削を行い、その後、人力掘削による調査を行った。調査区内では東西石組溝・土坑列等を検出した。ただし、調査区中央に近現代の暗渠埋設による大きな搅乱があり、遺構の検出は断片的なものとなった。以上2箇所のトレンチでは、当初の目的であった井戸の検出はできなかった。最後に湯殿・二階屋の東側に記された井戸の検出を目的とした24-3トレンチ（16m²）は、すべて人力掘削で調査を行った。調査区内では井戸・南北石列・柱抜取穴等を検出した。

平成26年度調査は平成24年度調査で検出できなかった井戸2箇所の検出を目標に実施した。調査は平成26年7月21日から着手し、平成27年3月27日に終了した。

26-1トレンチ（50m²）は24-1トレンチの北西側を拡張して設定した。近現代の堆積土約35m³は重機掘削を行い、その後、人力掘削による調査を行った。調査区内では24-1トレンチから連続する可能性のある東西石組溝・石組抜取跡・土坑列等を検出した。次に26-2トレンチ（50m²）は24-2トレンチの南側を拡張して設定した。近現代の堆積土約35m³は重機掘削を行い、その後、人力掘削による調査を行った。調査区内の多くが後世の削平を受けており、遺構の残存状況が良好ではなかったが、石積土坑や土坑列等を検出した。「差図」に記された井戸についてはいずれも検出できなかったが、うち1箇所については検出遺構と土層断面の観察から24-1トレンチと24-2トレンチの間に存在する可能性が極めて高くなった。

地区割設定

この度の発掘調査では調査区内にグリッド設定を行わなかった。よって、任意の地区割設定での遺物取り上げとなつた。24-1トレンチではSX11を境に



第9図 トレンチ配置図

「北半」と「南半」に分け、さらに「南半」を東西方向約3m毎で区分し、それぞれ「南半東」と「南半西」とした。24-2トレンチも同様に東西方向約3m毎で区分し、「東半」・「中央」・「西半」とした。24-3は一括とした。次に26-1トレンチは東西方向約3m毎で区分し、「東半」・「中央」・「西半」とした。26-2トレンチは東西・南北方向それぞれ約3m毎で区分し、「東半北」・「中央北」・「西半北」及び「東半南」・「中央南」・「西半南」とした。今後の調査の際には後述する今回の検出遺構を考慮し、東園の遺構と遺物の状況をより全体的な視野で正確に把握するためにも、適切なグリッド設定を検討・実施したい。

遺構番号

報告書で取り上げた検出遺構は、遺構略号と併せて原則、1トレンチから3トレンチの順で1番から通し番号を付した。なお、本文において遺構の説明を割愛しているものもある。

2. 検出遺構

基本層序は、大別すると各トレンチ共に上層から〔第1層〕表土、〔第2層〕明褐色粗砂層（近現代包含層、マサ土含む）、〔第3層〕灰褐色シルト層（近現代包含層）〔第4層〕褐色シルト層（包含層）〔第5層〕橙色～赤褐色シルト層（遺構検出面）〔第6層〕橙色粘土層（花崗岩風化土及び礫混じる、自然堆積か）となる。

遺構検出面は1・2トレンチではほぼ同一高（標高3.0m前後）であり、3トレンチは前者に比べ約30～70cm低い（標高2.7～2.3m）ことが判明した。以下、各トレンチの主な検出遺構について列挙する。

1トレンチ（24-1・26-1トレンチ）

SD1 南北方向の石組溝。約5m分を検出。石組には50cm×20cm前後の安山岩を用いて、背面を30～70cm程度掘り込んで据え付ける。溝幅は約30cm、深さ16cm前後、底石は無い。溝は北から南へ傾斜する。調査区北端寄りでは、所々で石材が抜き取られるが（SK2～4、SX5）、北壁付近で東側石を2石検出していることから、SD1はさらに北方へ続くものと考えられる。南北方向の軸線は北で東に25°傾く。

SK6 SD1の東側石縁辺部から約90cm東で検出。70cm×50cmの円形の土坑。深さは30cm。埋土には小礫が充填されており、よく締まる。その上部で小礫層を掘り込んだ黄褐色粘質土が堆積する。礎石抜取跡の可能性がある。

SK7 SD1の西側石縁辺部から約70cm西で検出。直径50cmの楕円形の土坑。深さは25cm。埋土は上下2層堆積するが、いずれも單一層で地業痕跡や柱痕跡等は認められない。同様の土坑はSD1を挟んだ東側でも検出している（SK8）。

SS10 近代構築物による搅乱（SX11）の北端、26-1トレンチ北東隅付近で40cm×20cmの安山岩の平石を検出。SS10は調査区外の北方へ広がる。据付掘方は不明。建物等に伴う礎石の可能性がある。

SD12 東西方向の石組溝。約1.5m分を検出。側石上面に蓋石を乗せた暗渠である。溝幅は約40cm、深さ15cm前後。溝は西から東へ傾斜する。上層の近代構築物（SX11）で搅乱を受けており不明瞭ではあるが、SD1がSD12に接続すると考えられる。東西方向の軸線は東で南に27°傾く。

SS13 SD12西端の蓋石と直交して南へ伸びる石列。石列には40cm×20cm前後の安山岩を用い、西側に面を持つ。石材の据え付け痕跡は無い。検出面はSD12上面より約10cm低く、石列はほぼ水平に並ぶ（標高約2.85m）。後述する2トレンチでもSS13の延長線上で同じ高さの石材を検出した（SS45）。

SD14 底石を伴う東西方向の石組溝。約2.0m分を検出。西側は後述するSK15で削平を受ける。溝の平面形

態は直線ではなく、やや湾曲する。溝幅は40～50cm、深さ10～20cm。

SK15 SD14が途切れた西側、東西約6m×南北最大1.5mの範囲で溝状堆積を検出。深さ20cm程度の堆積で埋土はよく締まっているが、大小の礫を多く含んで安定しない。埋土からは棟瓦を含む瓦類、土器類、釘等が出土する。SK15は先述のSD12・14、後述するSD23を接続する位置にあたることから、当初存在した石組溝あるいは建物の礎石・石列等の抜取跡であると考えられる。さらに約3.5m西にも同様の溝状堆積（SK16）が広がるが、この一帯では遺構検出面である第5層上面で近代土坑（SK17～22）を多数検出した。加えて、焼土や炭化物、黄褐色細粒砂など、主体となる検出面の鍵層とは異なる堆積が多く、精査できなかったため攪乱扱いとした。

SD23 東西方向の石組溝。調査区西端寄りで約3m分を検出。側石には30cm×10cmから50cm×20cmの安山岩を用いる。石材の据え付け痕跡は無い。溝幅は約40cm、深さ12cm前後、底石は無い。溝は東から西へ傾斜する。SS24はSD23東の見切石であり、西方は調査区外へ続く。北側石列では2箇所で石材の抜取跡を留める（SK25・26）。SD23の東西方向の軸線は東で南に28° 傾く。

SD27 50cm×20cmの石材2石とその東側の溝状堆積（SK28）及びSS29が組合う南北方向の石組溝である。溝幅は25cm前後。残存状況は良好ではないが、SD27の延長線上の調査区北壁で側石の抜取跡があること、また、南端でもSS30を検出していることから、SD27は調査区外の南北両方へ連続していたものと考えられる。

SS31 径約80cmの掘方に小礫を充填し、その上面に30cm四方、厚さ10cmの石材を据え付けたもの。建物に伴う礎石あるいは根石と考えられる。なお、SS31の上面高はSD27やSS24・29とほぼ同じ高さ（標高3.1m前後）を測る。

SS32 SS31と同規模の石材である。第5層上面の攪乱を受け、掘方は判然としないが、石材直下には小礫や割石が堆積しており、SS31と同じ高さで据えられている。SS31との対角線上の距離は心々で約1.4m、東西方向では約0.9mを測る。

SK33 SK15・16の南側で検出した溝状堆積。東西約6m×南北最大1mの範囲で検出。深さ10～15cm程度の堆積で大小の礫を多く含み安定しない。埋土からは棟瓦を含む瓦類、土器類、釘等が出土する。埋土掘削後、底面からは根石状の石材（SS34～36）を検出したが、建物に伴うような規則性は認められなかった。SK33はSK15と同様、当初存在した石組溝あるいは建物の礎石・石列等の抜取跡の可能性があり、さらに調査区の南方に広がるものと考えられる。

SK37 一辺60cmから90cmの不整形な五角形を呈する土坑である。深さは約20cm。石組溝あるいは石列の抜き取り跡と考えられる。

SK38 一辺1mの方形土坑である。深さは約80cm。埋土からは人頭大の石材に加え、土器類、瓦類、金属製品等が多く出土した。近接した石組溝あるいは石列等の石材を撤去した際に発生した不用品を廃棄した土坑と考えられる。

SX39 東西1.5m×南北0.6mの範囲に平瓦及び棟瓦の凸面側を主体に敷き並べ、その北側の段差部分の立ち上がりに平瓦を建て掛けたもの。階段状遺構か。後述するSX40・41より先行する遺構である。

SX40・41 50cm×30cm前後の楕円形の土坑が東西方向に約90cm間隔で並ぶ（SX40a～j）土坑列である。列の軸線は東で南に約27° 傾く。土坑の残存状況により一定しないが、深さは20cmから30cm。埋土は単層1層あるいは2層の水平堆積が大半で、柱痕跡の可能性を示すものはSX40-hのみである。また、同様のSX41

(SX41a~i) をSX40の約1.8m南側でも検出している。これらの遺構は第5層上面での検出であり、検出高はトレンチ西側(26-1トレンチ寄り)で3.1m、トレンチ東側(24-1トレンチ寄り)で3.0mを測る。主な検出遺構の高さと比べると、いずれも約10cm高い。SX40・41は御殿建物に伴う遺構よりも新しい時期のものと考えられる。

2 トレンチ (24-2・26-2トレンチ)

SX42 東西1.2m×南北50cmの範囲で花崗岩風化土が堆積する掘方を検出。深さは10cm以上。掘方内には直径約70cmの円形の被熱面を留める。上面に残る石材も赤変する。北西隅にも同様の被熱面があるが、調査区外のため全容は不明。カマドか。SK43(40cm×30cmの土坑) やSX55-aが上に重複する。

SK44 東西1.8m×南北50cmの範囲で花崗岩の風化土が堆積する掘方を検出。東端には別の土坑状の堆積が上に重複する。花崗岩風化土の土質は後述するSE62の掘方埋土と酷似する。

SS45 1トレンチSS13の延長線上で検出した石材。上面の標高は2.88mを測る。ここまでSS13が連続すれば、石列長は約6mとなる。なお、SS45の南方は土坑状の堆積(SK49)が上に重複しており、石列がさらに南方へ続いている可能性もある。

SS46 南に面を持つ東西方向の石列。安山岩を用い、背面を10~20cm程度掘り込んで据え付ける。断片的に1.4m分を検出。石列の軸線は東で南に31°傾く。検出高は標高3m。石列の西側はSX55-aが上に重複し石材が欠損する。さらにその西側の調査区西壁でも据え付け痕跡等が確認できなかったため、西方への延長の有無は不明。一方、東側は1.6m分石材が抜き取られている(SK47)。後述するSD48と一連の溝になる可能性もある。

SD48 東西方向の石組溝。約4.5m分を断片的に検出。石組には40cm×20cm前後の安山岩を用い、背面を5~25cm程度掘り込んで据え付ける。溝幅は約30cm、深さ15cm前後、底石は無い。SD48の検出高は標高2.99~2.95mを測り、西から東へ傾斜する。所々で石材が抜き取られているが(SX56-e・f・g)、調査区東壁付近で石材の据え付け掘方の堆積を確認していることから、SD48はさらに東方へ続くものと考えられる。SD48の東西方向の軸線は東で南に35~36°傾く。

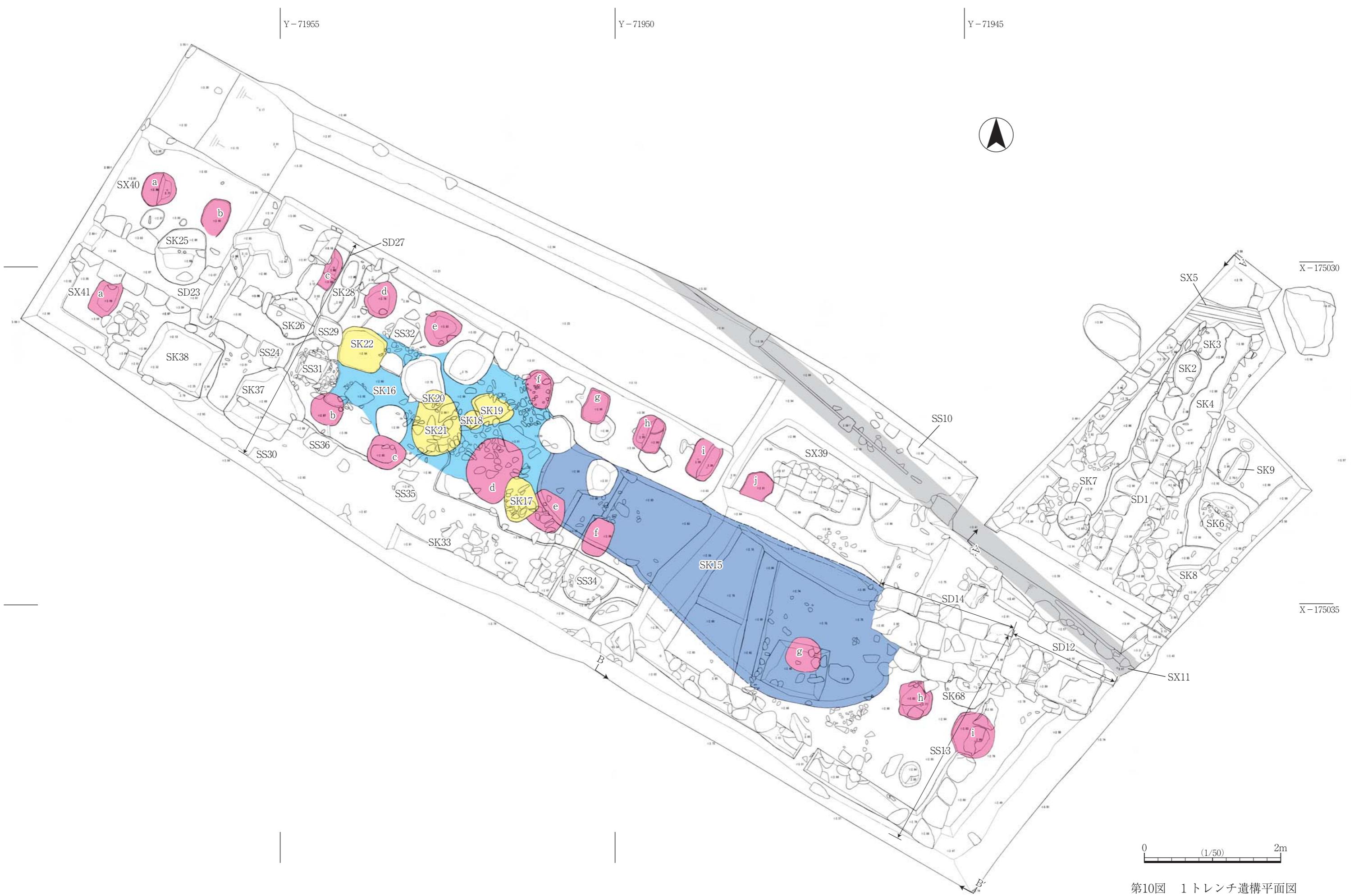
SS50 北に面を持つ東西方向の石列。約1m分を検出。SD61構築時に多少の搅乱は受けているが、東西方向の軸線は東で南に35°傾く。検出高は背後のSD48より5cm程度低い。

SK51 東西4.5m×南北3.5m範囲に不整形に広がる土坑。深さは10cm~15cm。埋土は炭化物が混じる橙褐色のシルト質であり、しまりの無い不安定な堆積である。

SK52 東西5.5m、南北5m、幅1.5mで逆L字形に広がる土坑。SK51の上に重複する堆積である。深さは10cm~15cm。埋土は、にぶい橙褐色のシルト質であり、しまりの無い不安定な堆積である。調査区の南壁・東壁の堆積状況からこの堆積はさらに調査区外へも広がると思われる。SK51・52は共に埋土から石組溝や石列に用いられたような石材が多く出土していることから、御殿建物の解体後に伴う埋め戻し土の可能性がある。

SK53 SK51埋土掘削後に検出。80cm×60cm、深さ40cmの土坑。埋土からは多くの土器類が出土する。廃棄土坑か。

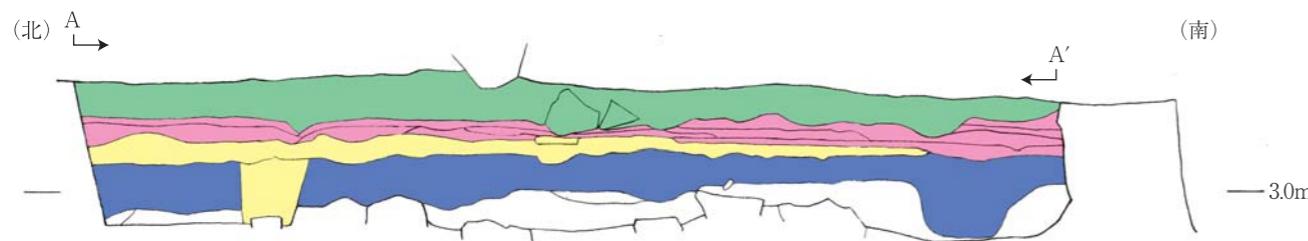
SK54 1.5m四方の隅丸方形の掘方の周囲に50cm×25cmから20cm×15cm大の花崗岩を2段積んだ土坑。L字形に石積が残存し、それ以外は抜き取られる。埋土の深さは約40cm。上層2層(約5cm~30cm)は石材抜き取り後の埋土。その直下から完形の丸瓦1点が出土。一方、下層(10cm前後)の堆積はSK54構築時の堆積あるいはSK54構築加工時の堆積と考えられる。底面からの出土遺物は無い。貯水施設か。



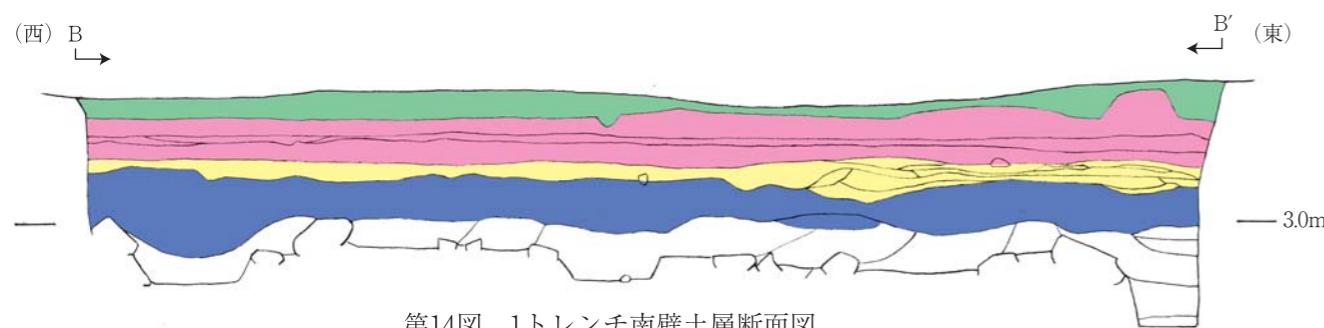
第10図 1トレンチ遺構平面図



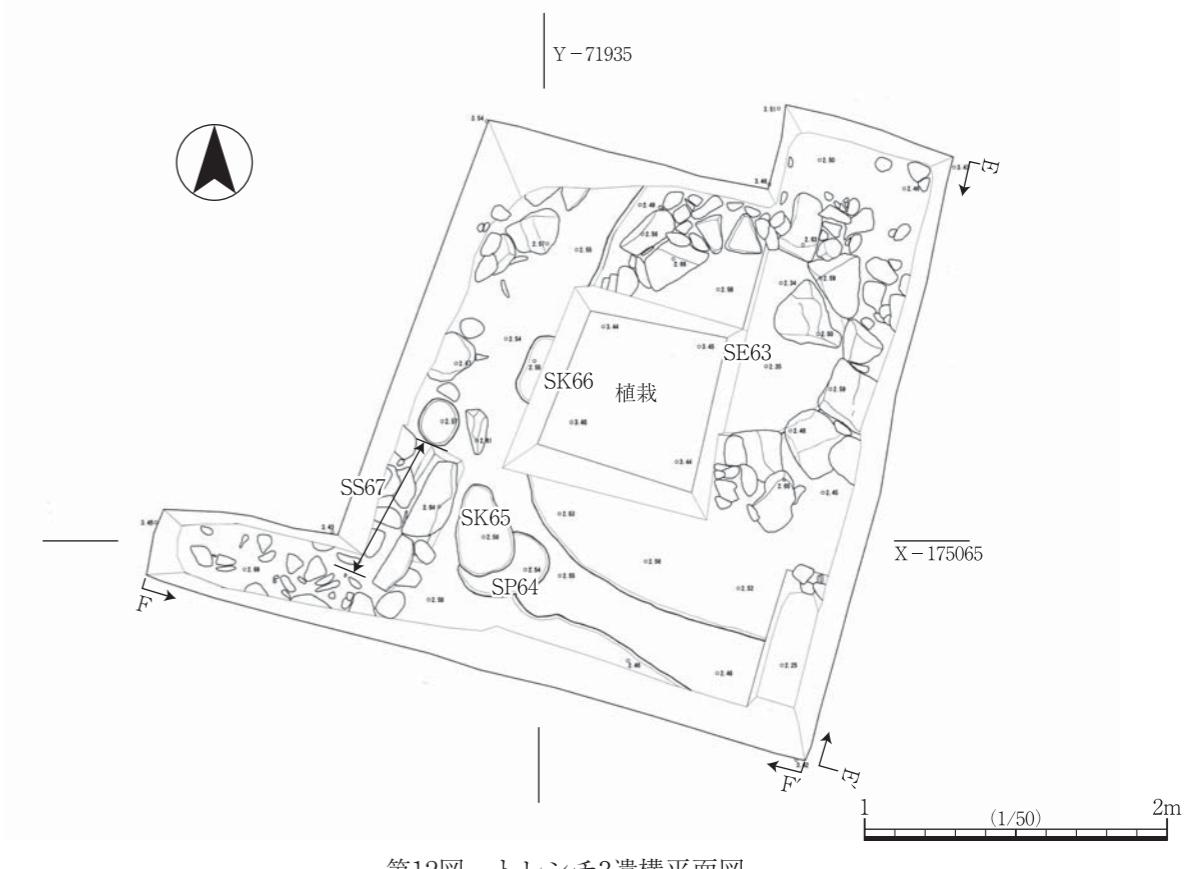
第11図 2トレンチ遺構平面図



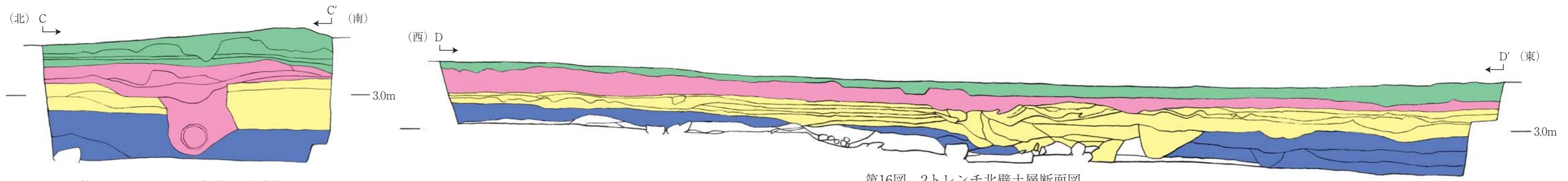
第13図 1トレンチ西壁土層断面図



第14図 1トレンチ南壁土層断面図



第12図 トレンチ3遺構平面図

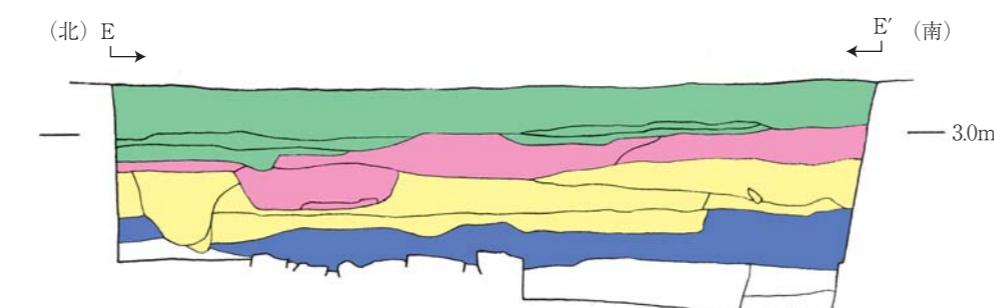


第15図 2トレンチ東壁土層断面図

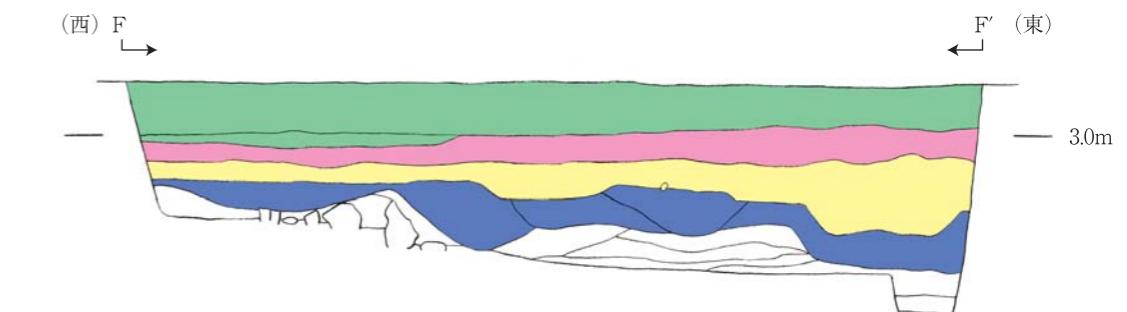
第16図 2トレンチ北壁土層断面図

1 (1/40) 2m

- …第1層 表土
- …第2層 明褐色粗砂層 (近現代包含層)
- …第3層 灰褐色シルト層 (近現代包含層)
- …第4層 褐色シルト層 (包含層)



第17図 3トレンチ東壁土層断面図



第18図 3トレンチ南壁土層断面図

SX55～58 80cm×50cmから50cm×30cm程度の楕円形の土坑が東西方向に約90cm間隔で並ぶ土坑列である。南北方向に約1.8m間隔で並ぶ4列を確認した。SX55はa～hの8基、SX56はa～gの7基、SX57はa～iの9基、SX58はa～dの4基の土坑である。深さは10cmから25cm。埋土は単層1層あるいは2層の水平堆積であり、柱痕跡を示す堆積は無い。これらの遺構は全て第5層上面で検出した。1トレンチで検出したSX40・41と同様、列の軸線は東で南に約27°傾く。SX40・41、55～58の土坑列はいずれも東西方向、南北方向ともに整然と並んでおり、一連の遺構となる可能性が高い。

SK59 長さ1.3m、幅10cm前後、深さ5cm以上の溝状堆積。完掘はしていない。埋土上層から赤瓦が出土。

SK59の埋土を含めたコ字形の堆積がSK54の南東に接続するような痕跡をなす。給水に伴う遺構か。

SD60 素掘りの暗渠。第3層下層を掘り込んで構築する。約4m分を検出。幅50cm前後、深さ40cm前後。埋土下半には拳大から人頭大の礫を充填する。SD60は南から北へ傾斜しSD61に接続する。

SD61 円筒土管を埋設した暗渠。第3層上面を掘り込んで構築。約10m分を検出。幅90cm前後、深さ70cm前後。溝底に直径約25cmの円筒土管を埋設する。SD61は西から東へ傾斜する。

3トレンチ（24-3トレンチ）

SE63 40cm×30cm大の花崗岩を用いた円形の井戸。直径は1.2m。埋土を約40cm掘削したところで井戸内全体で投棄された石材を検出したため、掘削は底面まで到達しなかった。据え付け掘方は確認できた範囲で東西約2m、南北約3.3m。掘方埋土は花崗岩の風化土であるが、還元化し、青灰色を呈している。

SP64 SE63と同一面で50cm×30cmの楕円形の掘方を2基検出。柱穴と柱抜取跡（SK65）と考えられる。

SK66 SE63と同一面で50cm×10cmの土坑を検出。柱穴と同様の掘方と考えられるが、一部のみ検出のため全容は不明。

SS67 SE63検出面よりも30～40cm上層で検出。60cm×25cm、40cm×15cmの石材が南北方向に並び、西側に面を持つ。石列の軸線は北で東に28°傾く。その他の石列は削平を受けたものと考えられる。調査範囲が狭小であったため即断はできないが、土層堆積状況から判断してSE63構築面（標高2.5m）に盛土整地（標高約2.8m）を行って石列を構築したものと考えられる。

3. 出土遺物

平成24年度調査では、土器類359点、瓦類3263点（519.051kg）、石製品3点、金属製品371点、銭貨6点、近現代遺物11点が出土した。

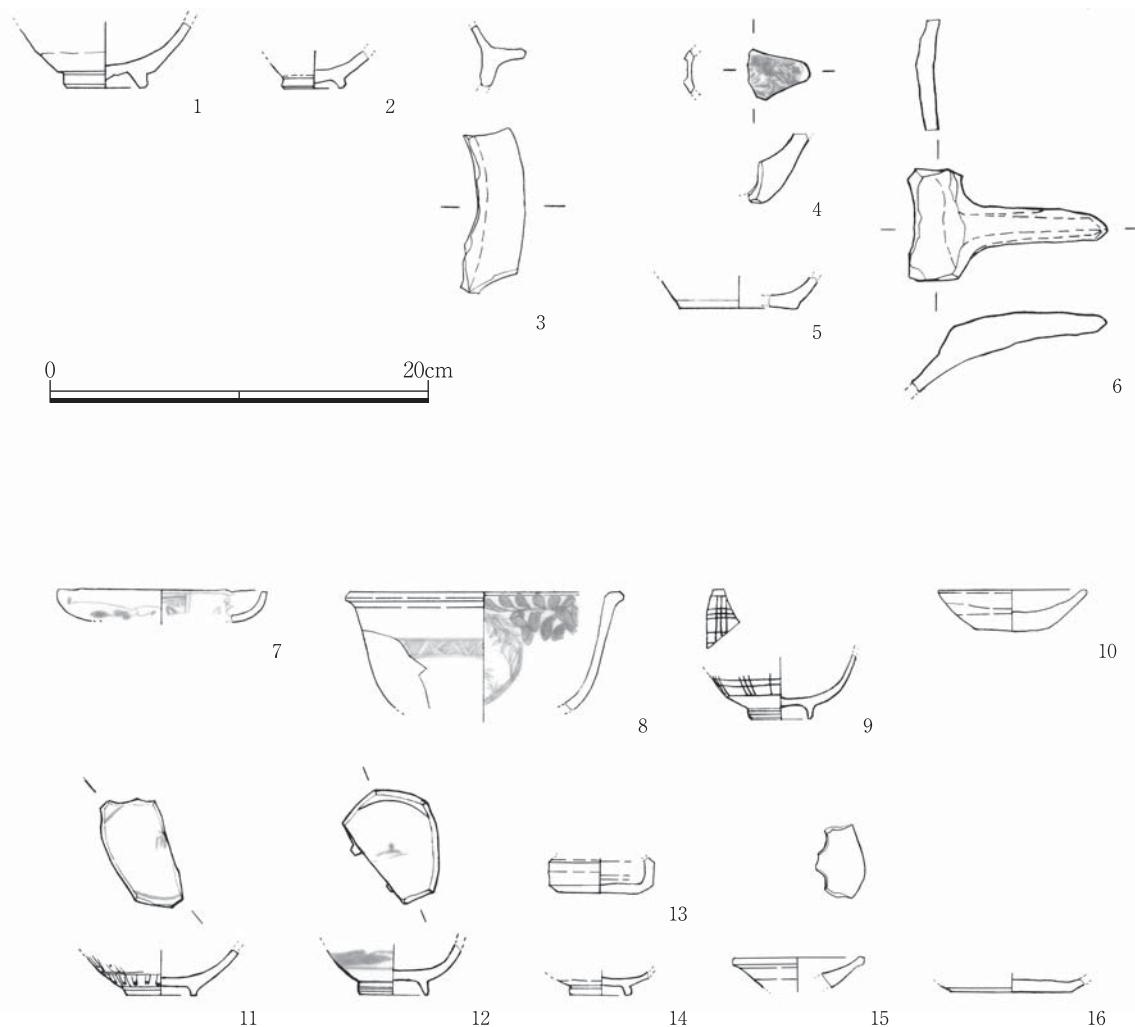
平成26年度調査では、土器類109点、瓦類10343点（1717.362kg）、石製品1点、金属製品247点、銭貨5点、近現代遺物28点が出土した。

以下では、土器類・瓦類・石製品・金属製品・銭貨の抽出資料について、トレンチ毎に列挙する。

1) 土器類

24-1 トレンチ出土遺物①（第19図、表5）

1は萩の碗。藁灰釉で底部は渦巻き高台。北半第1層出土。2は萩の小坏。土灰釉が施される。北半第1層出土。3は瓦質羽釜の把手。南半第1層出土。4は肥前染付の蓮華。内面草花紋。1820～1860年頃。北半第3層出土。5は土師器灯明皿。底部糸切り、内面に煤付着。北半第4層出土。6は瓦質焙烙の把手。南半東第3層出土。7は肥前染付の輪花皿。裏紋様は如意頭紋崩れの唐草。1780～1860年頃。北半第4層出土。8は肥前染付の鉢。草花紋。1820～1860年頃。北半第1層と南半東第3層から出土。9は小畠染付の碗。格子目。1820～1860年頃。南半東第3・4層及び北半第4層から出土。10は須佐灰釉の灯明皿。底部糸切り、内面



第19図 24-1 トレンチ出土土器類①

にはハマ痕。南半東第3層出土。11は肥前染付の碗。梵字文・見込み梵字文。1810～1840年頃。南半西第3層出土。12は小畠染付の碗。見込みは蝙蝠紋崩れ。南半西第4層出土。13は肥前白磁の合子。1820～1860年頃。南半西第4層出土。14は京都系の碗。南半西第4層出土。15は土師器目皿。南半西第4層出土。16は土師器灯明皿。底部糸切り、内面に煤付着。外表面磨滅顯著。南半西第4層出土。

24-1 トレンチ出土遺物②（第20図、表5）

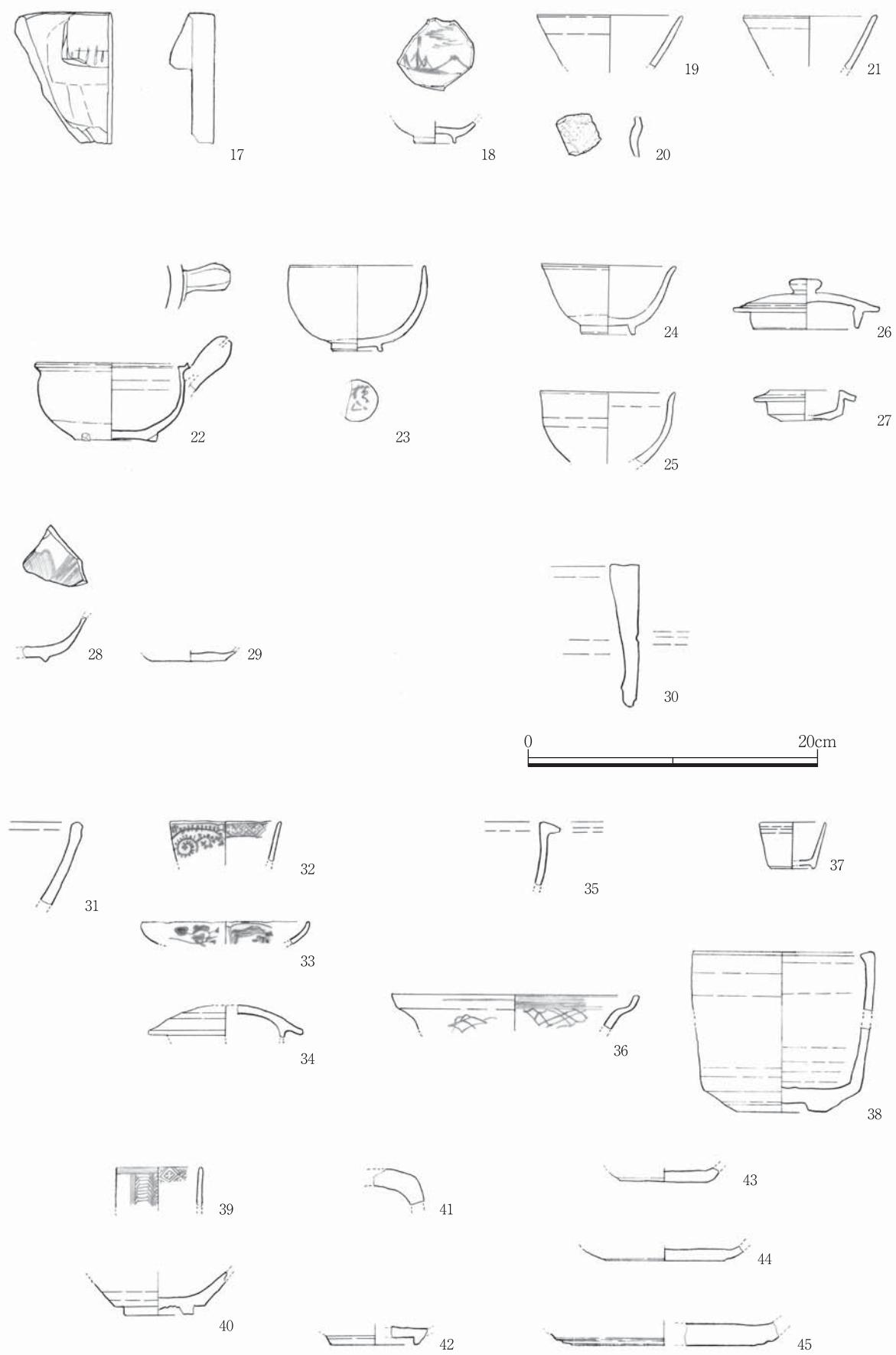
17は在地系の土師器角型焜炉。瓶掛けを留める。表面に雲母付着。北半北排水溝出土。18は小畠染付の盃。海浜風景紋。北半東排水溝出土。19は萩藁灰釉の開口碗。北半東排水溝出土。20は京都の土人形。上下型合わせの魚。表面に雲母付着。北半東排水溝出土。21は萩藁灰釉の開口碗。北半東排水溝出土。22は萩あるいは須佐灰釉のミニチュア行平鍋。把手に寿文、見込みにハリ支え痕、底部3ヶ所に団子状の脚、外表面に煤付着。南半西排水溝及び南半西第4層出土。23は京都系の丸碗。高台内に「横山」の墨書。1800年頃。南半西第4層及びSK9出土。24は萩藁灰釉の端反碗。南半北排水溝出土。25は萩藁灰釉の碗。南半北排水溝出土。26は萩藁灰釉の蓋。南半北排水溝出土。27は萩鉄釉の土瓶蓋。南半北排水溝出土。28は肥前染付の皿。蛇の目釉ハギ、裏紋様あり。1810～1860年頃。北半西排水溝出土。29は土師器皿底部。内面に朱付着。北半西排水溝出土。30は佐野の甕。内面ナデ調整。SX11（近代構築物による搅乱）出土。31は萩藁灰釉の鉢。SX11出土。32は肥前染付の輪花猪口。外表面蛸唐草紋・内面四方櫛紋。1780～1820年頃。SX41-i出土。33は肥前染付の輪花皿。裏紋様は如意頭紋崩れの唐草紋。1780～1860年頃。SX41-i出土。34は萩あるいは須佐の土瓶蓋。SX41-i出土。35は萩鉄釉の片口。SK4出土。36は肥前染付の鉢。折縁口縁。1820～1860年頃。SS13上層（第4層）出土。37は肥前白磁の小壺。1780～1840年頃。SX41-g出土。38は肥前青磁の香炉。見込・豊付に砂付着。北半第4層及びSX41-g及びSK4から出土。39は肥前染付の猪口。四方櫛紋。1820～1860年頃。SS13上層（第4層）出土。40は萩藁灰釉の碗。底部は渦巻き高台。SS13上層（第4層）。41は土師器焼塩壺の蓋。I類。1680～1700年頃。SD1出土。42は陶器底部。朝鮮半島系か。SD1出土。43～45は土師器皿底部。43・44は外表面磨滅顯著。45は底部ヘラケズリ。SD14出土。

26-1 トレンチ出土遺物①（第21図、表6）

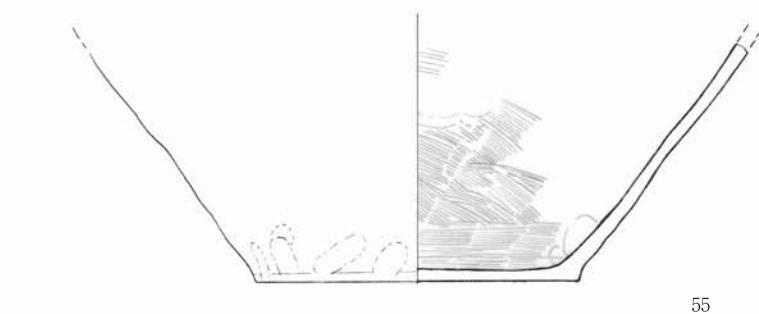
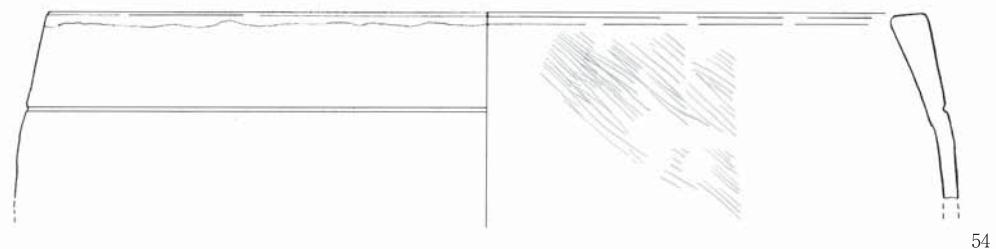
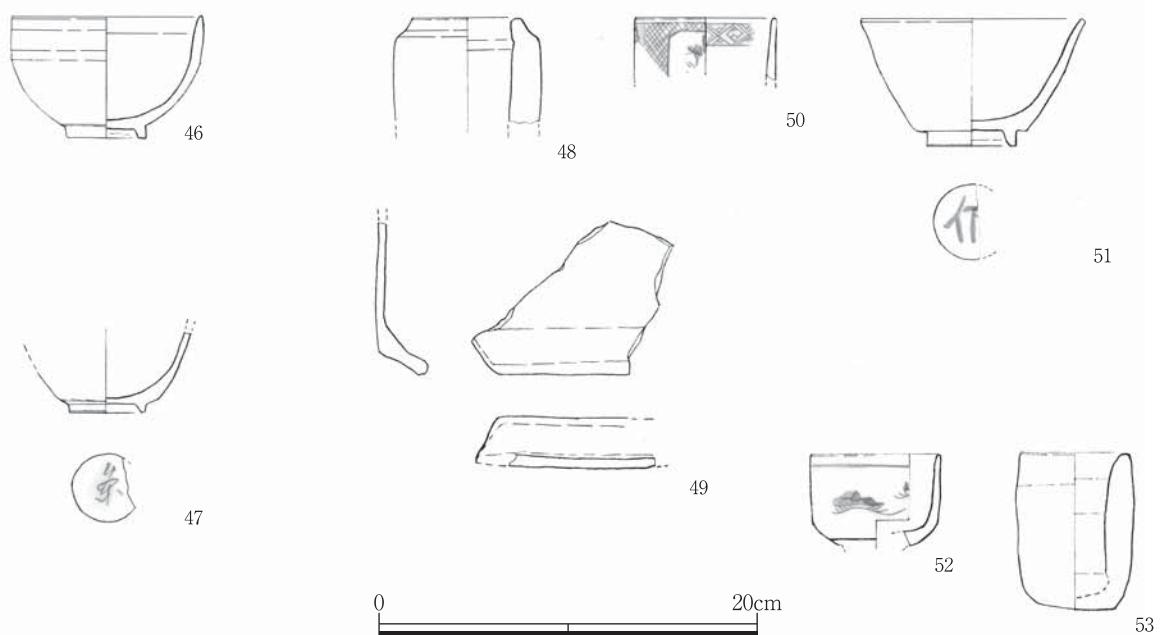
46は萩藁灰釉の碗。高台内に墨書痕あり。文字不明。西半北排水溝出土。47は萩藁灰釉の碗。高台内に「茶」の墨書あり。西半西排水溝出土。48は土師器焼塩壺の身。II類。西半南排水溝出土。49は土師器十能。中央第3層出土。50は肥前染付の猪口。四方櫛紋。1770～1810年頃。中央第3層出土。51は萩藁灰釉の碗。高台内に墨書あり。「佐」か。中央第4層出土。52は肥前染付の筒茶碗。松紋。1820～1860年頃か。西半第4層出土。53は土師器焼塩壺の身。I類。1640～1680年頃。西半第4層出土。54は土師器佐野の甕口縁部。内面は刷毛目痕。SK19下層出土。55は土師器佐野の甕底部。内面は同心円の当て具痕及び刷毛目痕。SK19下層出土。56は須佐土灰釉の蓋。SK22出土。57は萩藁灰釉の碗。SX40-a出土。

26-1 トレンチ出土遺物②（第22図、表6）

58は肥前白磁の皿。59は肥前染付の皿。花唐草紋。1690～1740年頃。60は萩の猪口。白化粧土に透明釉を施す。61は萩藁灰釉の片口。62は須佐土灰釉の行平鍋把手。63は肥前染付の芙蓉手猪口。1780～1810年頃。64は小畠染付の筒茶碗。草花紋・蝶紋。65は須佐土灰釉の土瓶。以上SK38出土。66は小畠白磁の皿。型押し作り。67は須佐土灰釉のミニチュア瓶。68は萩藁灰釉の輪花皿。以上SK37出土。



第20図 24-1 トレンチ出土土器類②

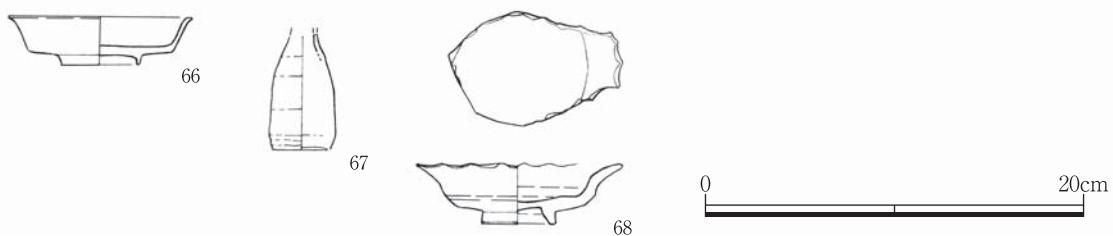
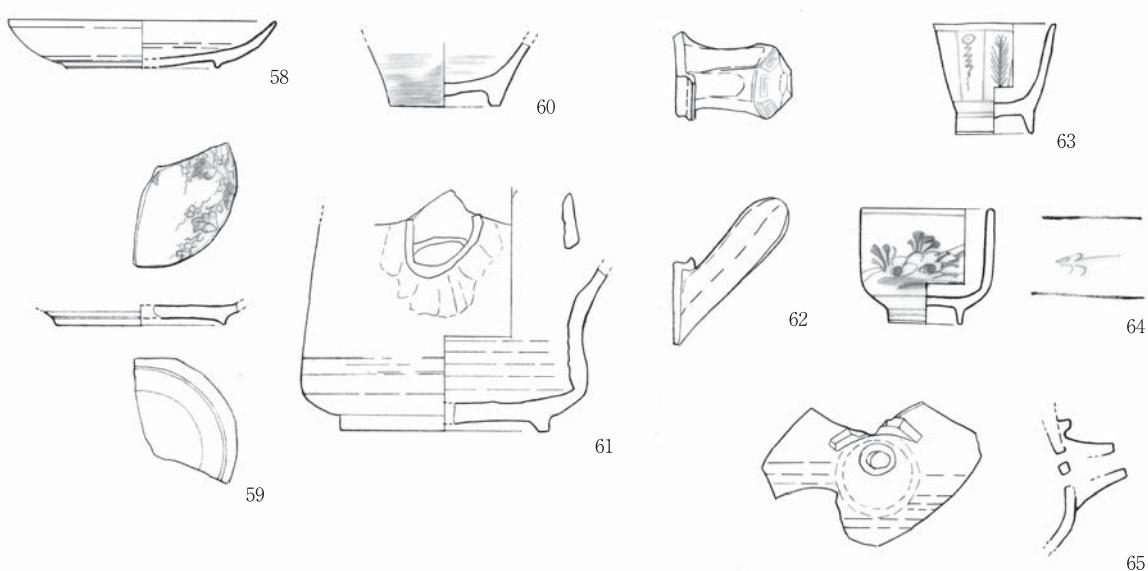


56



57

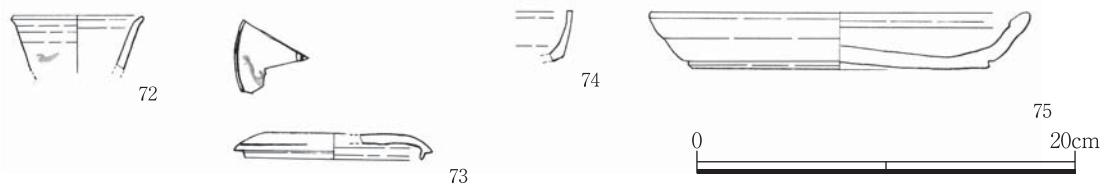
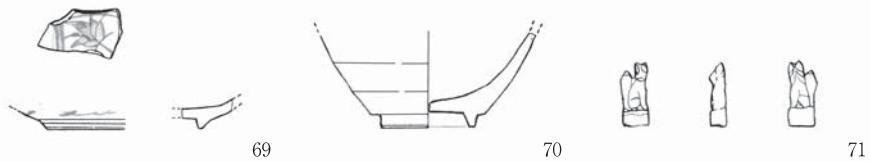
第21図 26-1 トレンチ出土土器類①



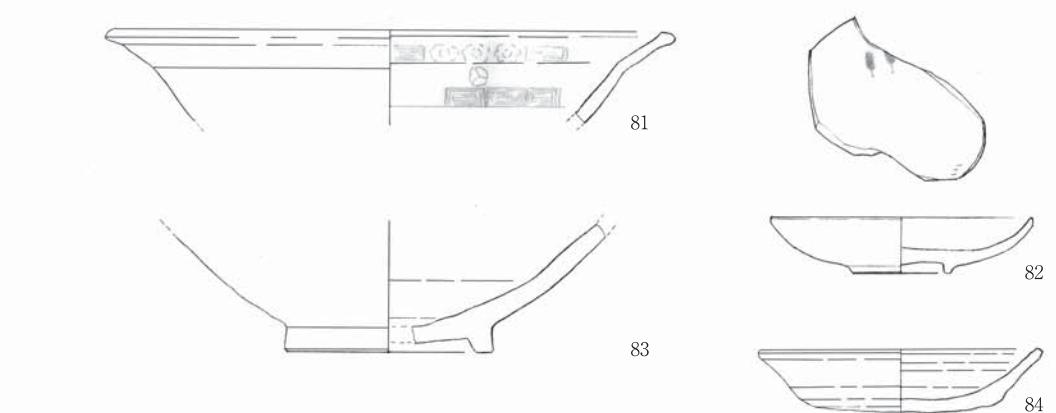
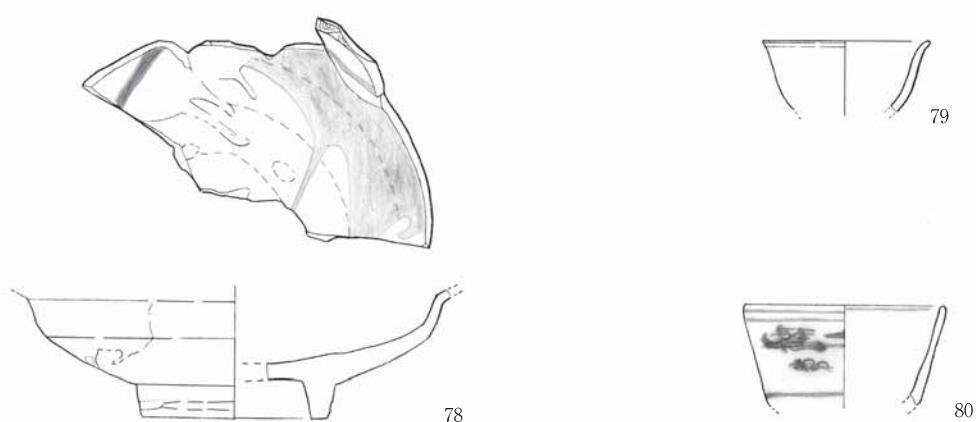
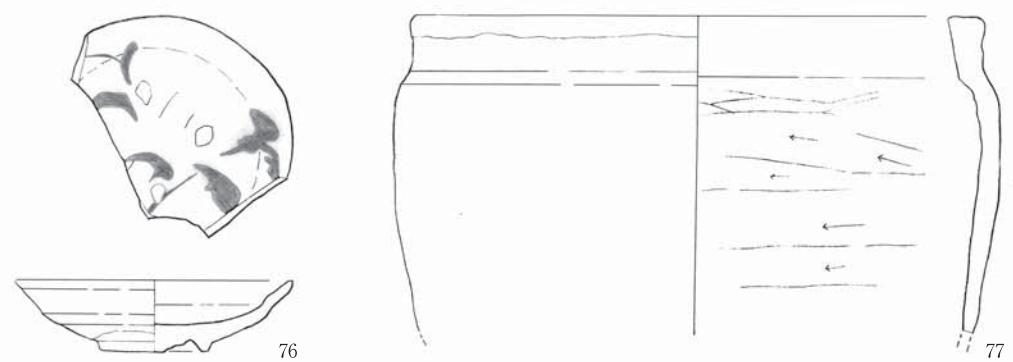
第22図 26-1 トレンチ出土土器類②

24-2 トレンチ出土遺物（第23図、表6）

69は景德鎮青花の皿。草花紋。16世紀末～17世紀初頃。西半第3層出土。70は萩藁灰釉の開口碗。西半第3層出土。71は京都の土人形。左右型合わせの狐。西半第3層出土。72は波佐見染付の小坏。西半第4層出土。73は肥前染付の蓋。鉢は熨斗形を貼り付けたもの。1820～1860年頃。西半第4層出土。74は京都系透明釉の合子身。西半第4層出土。75は在地系土師器の焙烙。底部外面に指押さえ痕あり。煤付着。西半第4層出土。



第23図 24-2 トレンチ出土土器類



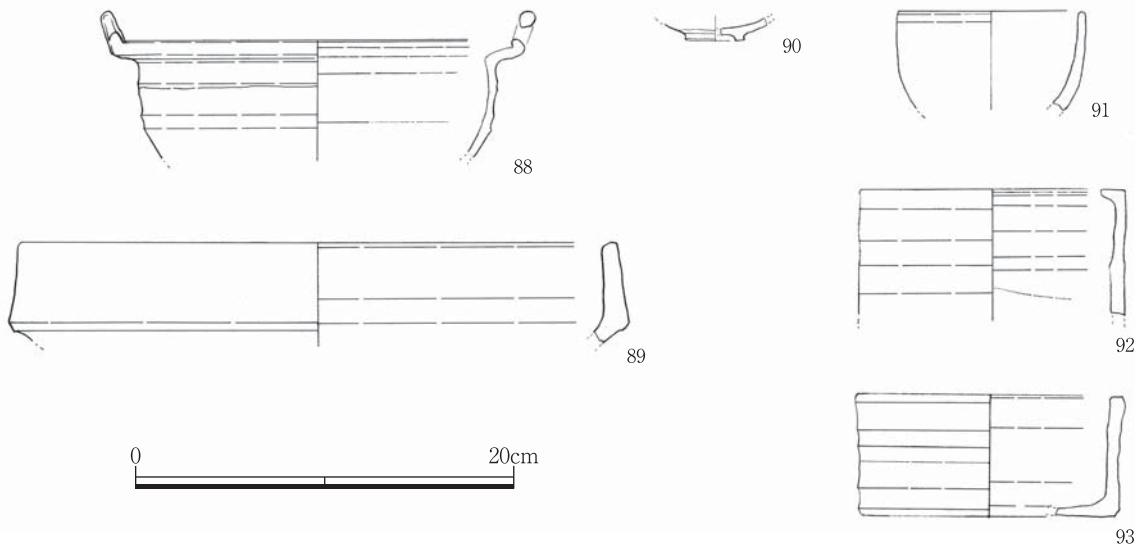
第24図 26-2 トレンチ出土土器類

26-2 トレンチ出土遺物（第24図、表6）

76は肥前灰釉の皿。鉄絵。1610～1650年頃。SK52周辺出土。77は土師器佐野の甕。SK52周辺出土。78は肥前の皿。白化粧土に緑釉・鉄釉を流し掛ける。1650～1690年頃。SK52出土。79は萩土灰釉の小碗。SK62出土。80は肥前染付の碗。SK51出土。81は肥前青磁の皿。雷紋帶・梅紋を陰刻。鰐縁。1650～1690年頃。82は肥前染付の皿。口紅で削り出し高台。1650～1690頃。83は萩土灰釉の鉢。84は土師器の皿。底部板目。以上SK53出土。85は波佐見陶胎染付の小碗。花唐草紋。86は土師器灯明皿。底部板目。煤付着。87は土師器灯明皿。底部板目。煤付着。以上SK54出土。

24-3 トレンチ出土遺物（第25図、表6）

88は萩あるいは須佐鉄釉の土鍋。口縁部に橋状の把手貼り付け。外面煤付着。第3層出土。89は土師器焙烙。関西系D類。外面に煤付着。第3層出土。90は京都系透明釉の碗。高台に面取りを施す。第4層出土。91は肥前透明釉の呉器碗。1650～1690年頃。西拡張部第3層出土。92は萩藁灰釉の香炉。西拡張部第3層出土。93は窯道具サヤ鉢。西拡張部第3層出土。



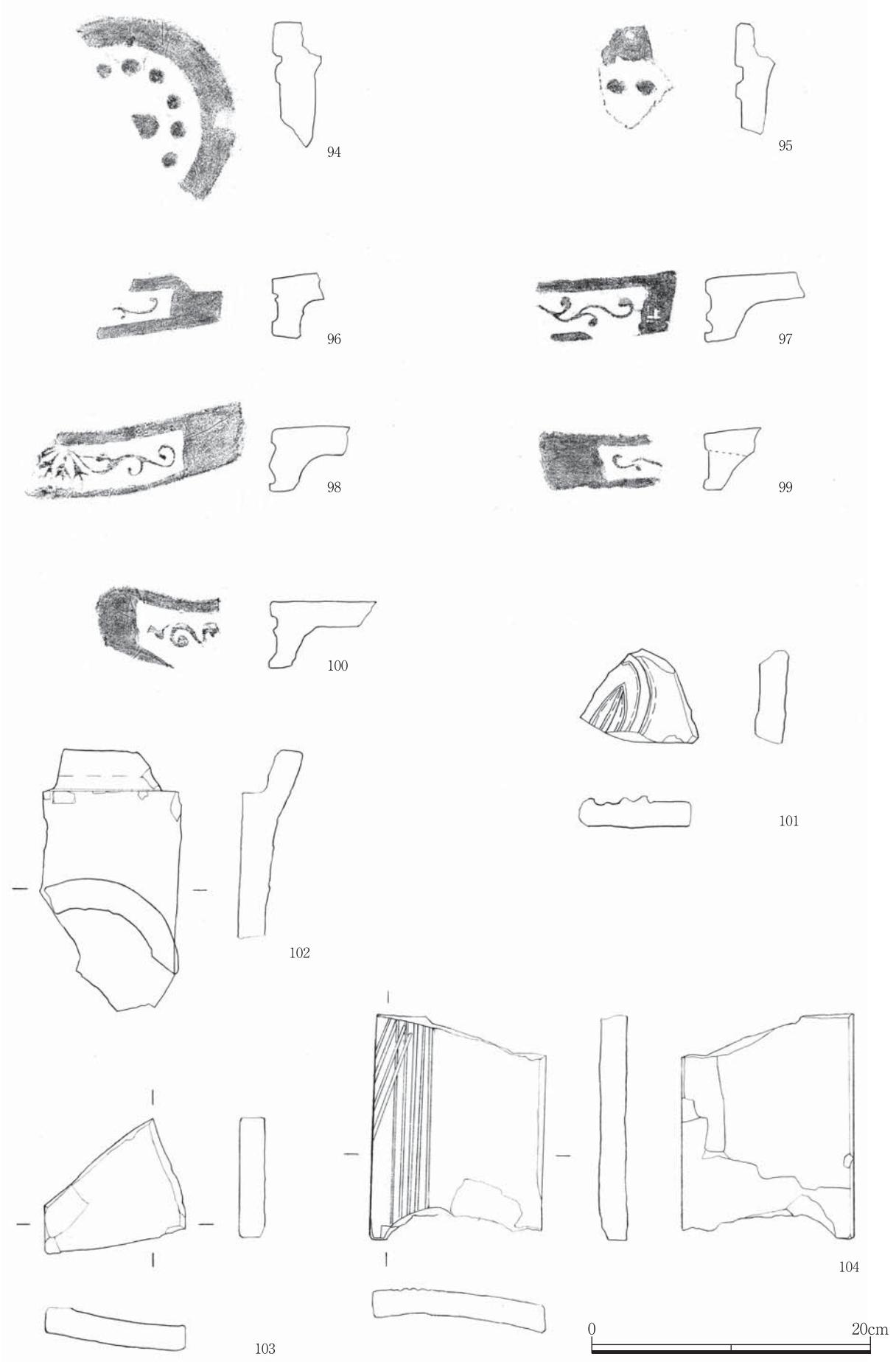
第25図 24-3 トレンチ出土土器類

表5 出土土器類観察表①

	遺物 番号	図版 番号	調査 年度	トレ ンチ	出土地点	器種	特徴	種別	備考
第19図	1		24	1	北半 第1層	碗	藁灰釉 湯巻き高台	陶器	萩
	2		24	1	北半 第1層	小壺	土灰釉 底部のみ	陶器	萩
	3		24	1	南半 第1層	釜		瓦質	
	4	15	24	1	北半 第3層	蓮華	染付 草花紋	磁器	肥前 1820~1860
	5		24	1	北半 第4層	灯明皿		底部糸切り・内面煤付着	土師器
	6		24	1	北半 第3層	焰烙		把手付	瓦質
	7		24	1	南半東 第3層	皿	染付 輪花・裏紋様如意頭紋崩れの唐草	磁器	肥前 1780~1860
	8		24	1	北半第1層・南半東第3層	鉢	染付 草花紋	磁器	肥前 1820~1860
	9		24	1	南半東 第3・4層ほか	碗	染付 格子目	磁器	小畑 1820~1860
	10		24	1	南半東 第3層	灯明受皿	灰釉 底部糸切り・内面にハマ痕	陶器	須佐
	11		24	1	南半西 第3層	碗	染付 梵字紋・見込梵字紋	磁器	肥前 1810~1840
	12		24	1	南半西 第4層	碗	染付 見込蝙蝠紋崩れ	磁器	小畑
	13		24	1	南半西 第4層	合子	白磁		肥前 1820~1860
	14		24	1	南半西 第4層	碗		底部のみ	京都系
	15		24	1	南半西 第4層	目皿		穿孔2個残存	土師器
	16		24	1	南半西 第4層	灯明皿		底部糸切り・内面煤付着・外面摩滅顕著	土師器
第20図	17	15	24	1	北半北 排水溝	焜炉		角型焜炉・瓶掛け・雲母付着	土師器 在地系
	18		24	1	北半東 排水溝	蓋	染付	海浜風景紋	磁器 小畑
	19		24	1	北半東 排水溝	碗	藁灰釉	開口碗	萩
	20		24	1	北半東 排水溝	土人形		魚・上下型合わせ・雲母付着	土製品 京都
	21		24	1	北半東 排水溝	碗	藁灰釉	開口碗	萩
	22	15	24	1	南半西排水溝・南半西第4層	ミニチュア行平鍋	灰釉	把手に寿紋・見込にハリ支え痕 底部3ヶ所に田子状の脚・煤付着	陶器 萩・須佐
	23	15	24	1	南半西 第4層・SK9	碗		丸碗・高台内墨書「横山」	陶器 京焼系 1800~
	24		24	1	南半北 排水溝	碗	藁灰釉	小碗 端反碗	萩
	25		24	1	南半北 排水溝	碗	藁灰釉		萩
	26		24	1	南半北 排水溝	蓋	藁灰釉	蓋	萩
	27		24	1	南半北 排水溝	蓋	鉄軸	土瓶蓋	萩
	28		24	1	北半西 排水溝	皿	染付	蛇の目袖ハギ・裏紋様	磁器 肥前 1810~1860
	29		24	1	北半西 排水溝	皿		内面に朱付着	土師器
	30		24	1	SX11	甕		口縁のみ・内面ナデ	土師器 佐野
	31		24	1	SX11	鉢	藁灰釉	口縁のみ	萩
	32		24	1	SX41-i	猪口	染付	輪花・蛸唐草紋・四方襷紋	磁器 肥前 1780~1820
	33		24	1	SX41-i	皿	染付	輪花・裏紋様如意頭紋崩れの唐草	磁器 肥前 1780~1860
	34		24	1	SX41-i	蓋	土灰釉	土瓶の蓋	萩・須佐
	35		24	1	SK4	片口	鉄軸		萩
	36		24	1	SS13上層(第4層)	鉢	染付	折縁口縁・口紅	磁器 肥前 1820~1860
	37		24	1	SX41-g	小壺	白磁		肥前 1780~1840
	38		24	1	北半 第4層・SX41-g・SK4	香炉	青磁	見込、豊付に砂付着	磁器 肥前
	39		24	1	SS13上層(第4層)	猪口	染付	四方襷紋	磁器 肥前 1820~1860
	40		24	1	SS13上層(第4層)	碗	藁灰釉	渦巻き高台	陶器 萩
	41		24	1	SD1	焼塙壺		蓋・I類	土師器 1680~1700
	42	15	24	1	SD1	皿		底部のみ	朝鮮半島系か
	43		24	1	SD14	皿		外面摩滅顕著	土師器
	44		24	1	SD14	皿		外面摩滅顕著	土師器
	45		24	1	SD14	皿		底部ヘラケズリ	土師器

表6 出土土器類観察表②

第21図	46	26	1	西半北 排水溝	碗	藁灰釉	高台内墨書	陶器	萩	
	47	15	26	1	西半西 排水溝	碗	藁灰釉	高台内墨書「茶」	陶器	萩
	48		26	1	西半南 排水溝	焼塙壺		身・II類	土師器	
	49		26	1	中央 第3層	十能			土師器	
	50		26	1	中央 第3層	猪口	染付	四方擗紋	磁器	肥前 1770~ 1810
	51	15	26	1	中央 第4層	碗	藁灰釉	高台内墨書「佐」か	陶器	萩
	52		26	1	西半 第4層	碗	染付	簡茶碗・松紋	磁器	肥前 1820~ 1860
	53		26	1	西半 第4層	焼塙壺		身・I類	土師器	1640~ 1680
	54		26	1	SK19下層	甕		口縁部	土師器	佐野
	55		26	1	SK19下層	甕		底部・内面同心円紋當て具痕・刷毛目	土師器	佐野
第22図	56		26	1	SK22	蓋	土灰釉		陶器	須佐
	57		26	1	SX40-a	碗	藁灰釉		陶器	萩
	58		26	1	SK38	皿	白磁		磁器	肥前
	59		26	1	SK38	皿	染付	花唐草紋	磁器	肥前 1690~ 1740
	60		26	1	SK38	猪口	白化粧土・透明釉	刷毛目	陶器	萩
	61		26	1	SK38	片口	藁灰釉		陶器	萩
	62	15	26	1	SK38	行平鍋	土灰釉	把手	陶器	須佐
	63	15	26	1	SK38	猪口	染付	芙蓉手	磁器	肥前 1780~ 1810
	64		26	1	SK38	碗	染付	簡茶碗・草花紋・蝶紋	磁器	小畠
	65		26	1	SK38	土瓶	土灰釉		陶器	須佐
第23図	66	15	26	1	SK37	皿	白磁	型押	磁器	小畠
	67	15	26	1	SK37	ミニチュア瓶	土灰釉	底部糸切り	陶器	須佐
	68		26	1	SK37	皿	藁灰釉	輪花	陶器	萩
	69	15	24	2	西半 第3層	皿	青花	草花紋	磁器	景德鎮 16c末~ 17c初
	70		24	2	西半 第3層	碗	藁灰釉	開口碗	陶器	萩
	71	15	24	2	西半 第3層	人形		狐・左右型合わせ	土製品	京都
	72		24	2	西半 第4層	小坏	染付		磁器	波佐見
第24図	73		24	2	西半 第4層	蓋	染付	鉢は熨斗形を貼り付け	磁器	肥前 1820~ 1860
	74		24	2	西半 第4層	合子	透明釉	身	陶器	京焼系
	75	15	24	2	西半 第4層	焰烙		底部指押え痕・煤付着	土師器	在地系
	76	15	26	2	SK52周辺	皿	灰釉	鉄絵	陶器	肥前 1610~ 1650
	77		26	2	SK52周辺	甕			土師器	佐野
	78	15	26	2	SK52	皿	白化粧土・緑釉 鉄釉	刷毛目・釉流し掛け	陶器	肥前 1650~ 1690
	79		26	2	SK62	碗	土灰釉	小碗	陶器	萩
	80		26	2	SK51	碗	染付		磁器	肥前
	81	15	26	2	SK53	皿	青磁	陰刻(雷紋帶、梅文)・鰐縁	磁器	肥前 1650~ 1690
	83		26	2	SK53	鉢	土灰釉		陶器	萩
第25図	82		26	2	SK53	皿	染付	口紅・削り出し高台	磁器	肥前 1650~ 1690
	84	15	26	2	SK53	皿		底部板目	土師器	
	85		26	2	SK54	小碗	陶胎染付	花唐草紋	陶器	波佐見
	86		26	2	SK54	灯明皿		底部板目・煤付着	土師器	
	87		26	2	SK54	灯明皿		底部板目・煤付着	土師器	
	88	15	24	3	第3層	土鍋	鉄釉	口縁部に橋状の把手貼付・外面煤付着	陶器	萩須佐
	89		24	3	第3層	焰烙		雲母付着・煤付着	土師器	関西系 D類
第25図	90		24	3	第4層	碗	透明釉	底部のみ・高台面取り	陶器	京焼系
	91		24	3	西拵張 第3層	碗	透明釉	呉器碗	陶器	肥前 1650~ 1690
	92	15	24	3	西拵張 第3層	香炉	藁灰釉	口縁部のみ	陶器	萩
	93		24	3	西拵張 第3層	サヤ			窯道具	

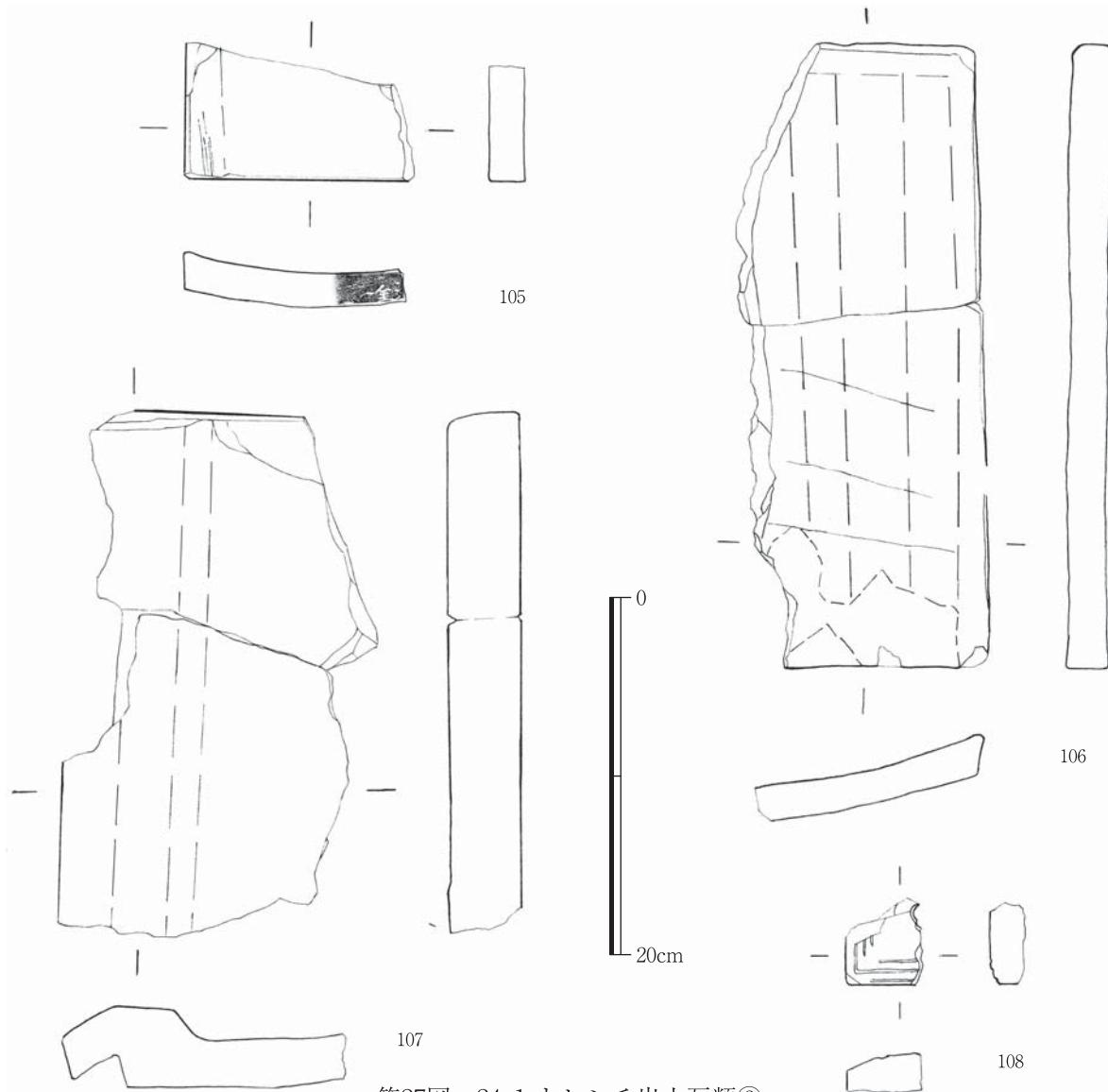


第26図 24-1 トレンチ出土瓦類①

2) 瓦類

24-1 トレンチ出土瓦類① (第26図)

94は一文字紋軒丸瓦。推定直径15.0cm。瓦当厚2.7cm。瓦範は側面に被らない。暗灰色の硬質イブシ焼き焼成。摩滅顯著。SS13上層(第4層)出土。95は推定一文字紋軒丸瓦。暗灰色の硬質イブシ焼き焼成。北半第4層出土。96は唐草紋軒平瓦。軒棧瓦の可能性もあり。瓦当厚4.2cm、側面は2面の面取り。凹面側縁寄には6条の櫛目を施紋。赤褐色から暗褐色を呈する。超硬質焼成の施釉瓦。赤瓦か。北半北排水溝出土。97は唐草紋軒平瓦。軒棧瓦の可能性もあり。瓦当厚4.5cm、平瓦厚1.9cm。瓦当面下端の頸部は別粘土を貼り付けて成形。暗灰色のイブシ焼き硬質焼成。瓦当面左脇区に「上」の刻印。南半東第4層出土。98は中心飾に三葉の堆蕊紋を置く均整唐草紋軒平瓦。瓦当厚4.4cm。平瓦厚1.9cm。軒棧瓦の可能性あり。瓦当面下端の頸部は別粘土を貼り付けて成形。暗灰色の硬質焼成。やや摩滅。瓦当面には木理に沿った多数の范傷あり。SS13上層(第4層)出土。99は唐草紋の形状から一文字紋軒平瓦と推定。瓦当厚は4.1~4.5cm。瓦当面下端の頸部は別粘土を貼り付けて成形。暗灰色の硬質焼成。摩滅顯著。北半東排水溝出土。100は軒棧瓦。瓦当厚4.7cm、棧瓦部厚1.7cm。青灰色の硬質イブシ焼き焼成。南半東排水溝出土。101は沢瀉紋を意匠とする鬼瓦。厚さ1.5cm前後。裏面横ナデツケ。黄灰色を呈するやや軟質の焼成。北半第4層出土。102・103は赤瓦。前者は北半第1層出土、後者は南半東第3層出土。



第27図 24-1 トレンチ出土瓦類②

104は熨斗瓦。焼成前に平瓦凸面中央に5条の櫛目を施紋し、その後ヘラ状工具で厚さの半分程度分割線を入れ、乾燥後に分割したもの。側縁には分割截線と分割破面を留める。橙褐色から褐色を呈する超硬質の施釉瓦。凸面と一方の側面付近にのみ施釉する。南半東第3層出土。類似した製作技法の熨斗瓦は大照院本堂・経蔵周辺でも出土している。

24-1 トレンチ出土瓦類② (第27図)

105は平瓦。平瓦広端面に「湊金」の刻印。厚さ1.8cm、暗灰色を呈する硬質イブシ焼き焼成。SK15出土。106は平瓦。全長34.7cm、厚さ2.1cm。凹面タテナデ、凸面離れ砂及び布目痕あり。灰色から暗灰色を呈する硬質焼成。SK68出土。107は目板瓦。残存長約29.0cm。平瓦部凹面側縁寄りに4.5cm前後幅で目板部を貼り付け。暗灰色の硬質焼成だが、摩滅顯著。SS13上層（第4層）出土。108は海鼠瓦。釘穴は焼成前に隅から対角線に向かって5.8cmの位置に穿孔する。縁辺部には3条の櫛目痕あり。裏面剥離。暗灰色から黄灰色のやや軟質焼成。SS13上層（第4層）出土。

26-1 トレンチ出土瓦類① (第28図)

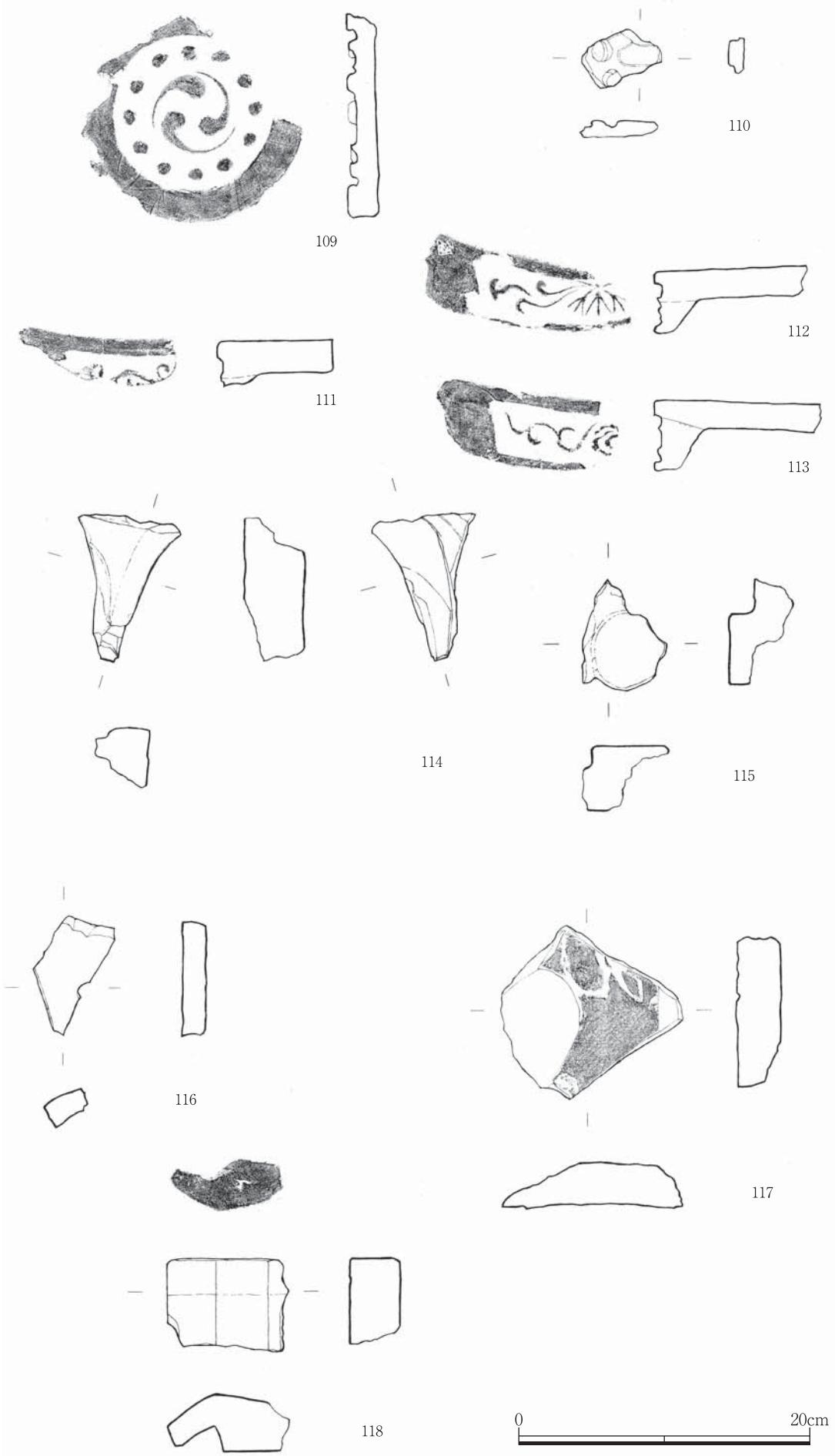
109は左巻き三巴紋軒丸瓦。瓦当径15.7cm、瓦当厚1.3cm、珠紋12。外縁端部には瓦範端を示す凸帯を留める。灰色、硬質焼成。SK38出土。110は一文字紋軒丸瓦。瓦当裏面剥離。西半第4層出土。111は唐草紋軒桟瓦。平瓦厚2.1cm。黒灰色のイブシ焼き硬質焼成。摩滅顯著。東半南排水溝出土。112は中心飾に三葉の堆蕊紋を置く均整唐草紋軒桟瓦。瓦当厚4.4cm。平瓦厚2.0cm。暗灰色のイブシ焼き硬質焼成。やや摩滅。瓦当面右脇区に「松」の刻印。東半第4層出土。113は均整唐草紋軒桟瓦。中心飾に一文字紋は入らない。瓦当厚4.9cm、平瓦厚2.0cm。暗灰色のイブシ焼き硬質焼成。SK22出土。114は下辺に割り込みのある鬼瓦。脚部寄りに円形の凹みがあることから、軒丸瓦の瓦範を施紋した可能性がある。暗灰色燻し焼き、硬質焼成。東半第4層出土。115は一に三つ星紋鬼瓦。珠紋は直径5.0cm、裏面までの厚さは4.5cm。暗灰色でイブシ焼き硬質焼成。SK38出土。116は丸瓦厚1.5cm。焼成前に凸面側から穿孔。暗褐色の超硬質焼成。赤瓦か。西半第4層出土。117は籠状工具で凸面側に文字あるいは戯画を記す平瓦。暗灰色を呈する硬質焼成。東半第4層出土。118は目板瓦。平瓦部の凹面側縁寄りに4.5cm前後の幅で目板部を貼り付け。暗灰色の硬質焼成。端面に「上」の刻印。SK25土坑出土。

26-1 トレンチ出土瓦類② (第29図)

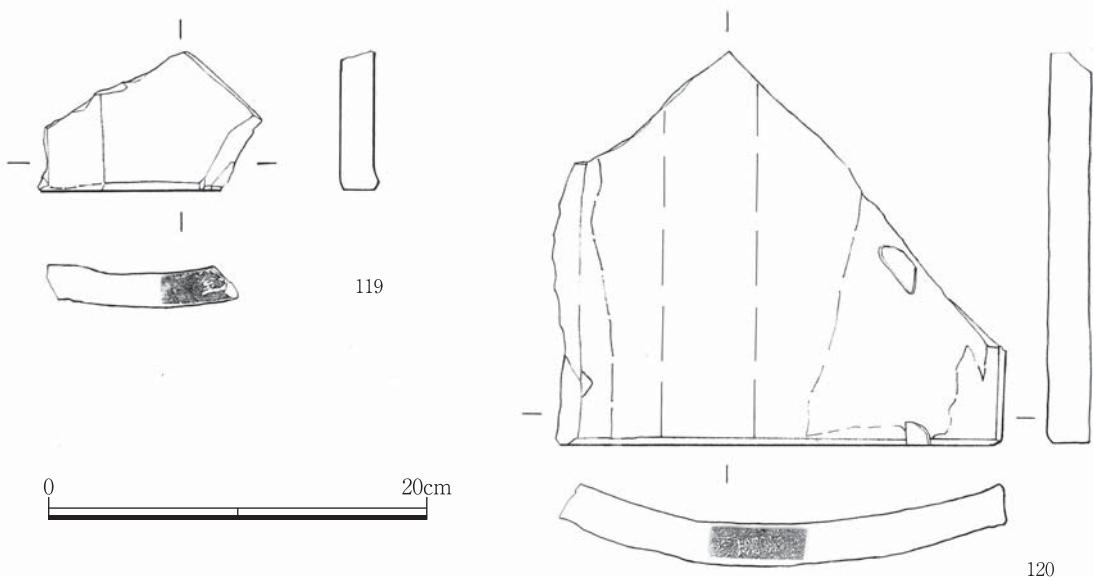
119は桟瓦。先端面側に「湊金」の刻印。厚さ1.6cm。暗灰色を呈する硬質焼成。凹面、端面はイブシ焼き。西半北排水溝出土。120は桟瓦。先端面側に「湊西金」の刻印。厚さ2.0cm。暗灰色を呈する硬質焼成。凹面、端面、側面はイブシ焼き。SK38出土。121は鬼瓦。右下端部破片。僅かに裾が広がる。外周幅約6.0cm。裏面は側縁、下端縁に幅約2.0cmの凸帯が巡る。暗灰色、硬質焼成。東半北排水溝出土。

24-2 トレンチ出土瓦類 (第30図)

122は一文字紋軒平瓦。瓦当厚は5.2cm。取り付く平瓦の厚さは2.0cm前後。暗灰色の硬質焼成。やや摩滅する。西半第4層出土。123は中心飾に三葉の堆蕊紋を置く均整唐草紋。瓦当厚4.5cm。軒桟瓦の可能性あり。瓦当面下端の顎部は別粘土を貼り付けて成形。暗灰色のやや軟質焼成。西半第4層出土。124は唐草紋軒平瓦。唐草紋が2回反転する。瓦当厚は5.0cm。瓦当面下端の顎部は別粘土を貼り付けて成形。黒灰色の硬質イブシ焼き焼成。SD61出土。125は唐草紋軒平瓦。唐草紋が3回反転する。瓦当厚は4.7cm。軒桟瓦の可能性あり。暗灰色のやや軟質焼成。西半第4層出土。126は軒平瓦か。



第28図 26-1 トレンチ出土瓦類①



第29図 26-1 トレンチ出土瓦類②

側縁から8.4cmの位置に釘穴を焼成前に穿孔。暗灰色の硬質焼成。西半第4層出土。127は目板瓦。平瓦部凹面側縁寄に平行した4条の櫛目痕。目板部の剥離。黒灰色の硬質焼成。摩滅顯著。東半第4層出土。128は袖瓦。平瓦部凸面側縁寄りに厚さ2.0cm前後の袖垂れを貼り付け。残存部袖垂れの長さは3.0から5.5cm。黒灰色の硬質焼成。平瓦部凸面以外はイブシ焼き。西半第4層出土。

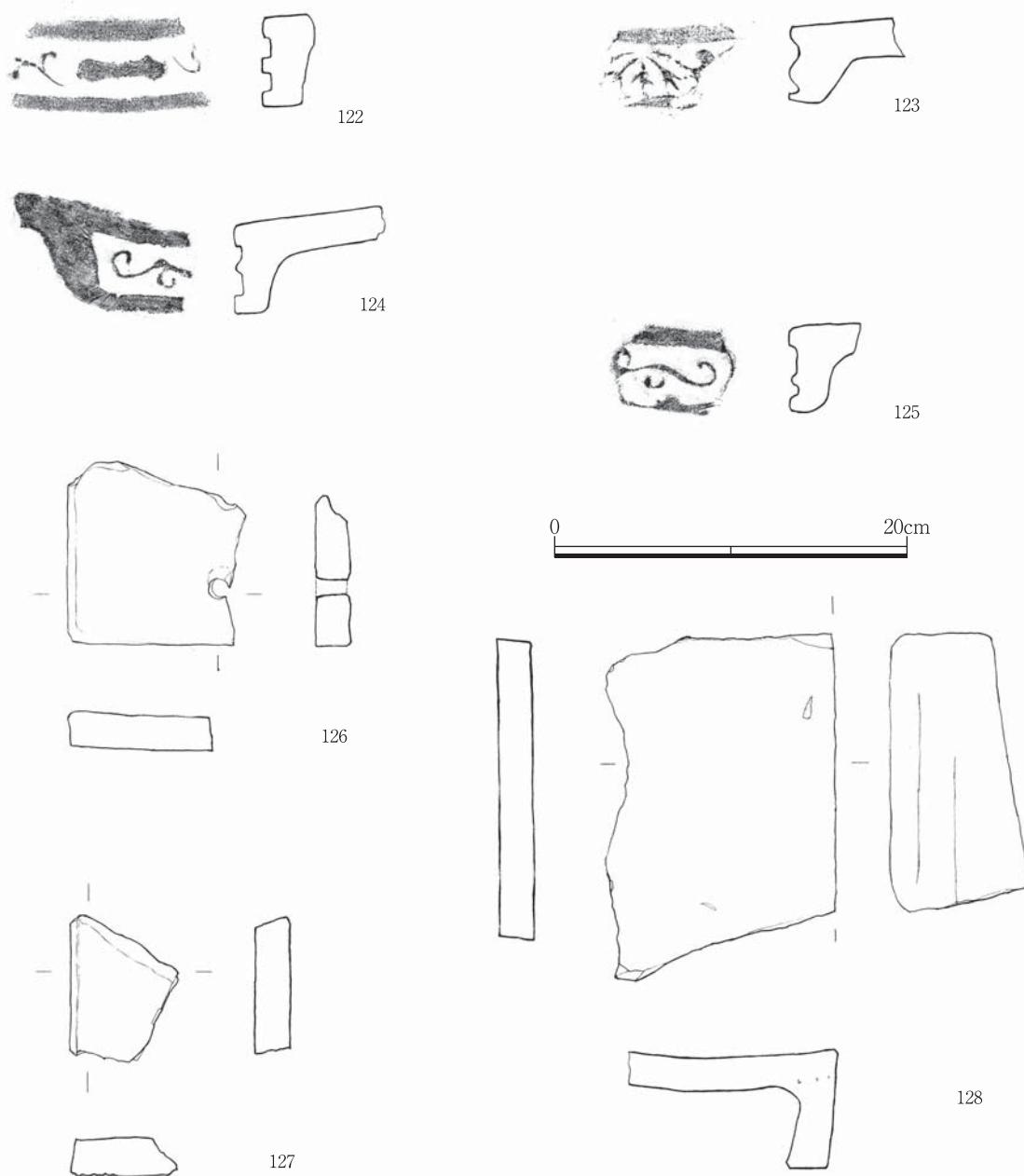
26-2 トレンチ出土瓦類（第31図）

129は左巻き三巴紋。瓦当厚1.9cm。瓦当面にコビキ痕Bを留める。灰白色のやや軟質焼成。東半東排水溝出土。130は軒平瓦。全体に摩滅顯著。瓦当面右端にごく僅かに唐草紋を留める。下外区は欠損。平瓦厚1.7cm。黄灰色から黒灰色のやや軟質焼成。SK59出土。131は軒平瓦。瓦当部欠損、頸部剥離面に櫛目痕を留める。平瓦厚は1.5cm。褐色から暗灰色のやや軟質焼成。SK59出土。132は軒平瓦。全体に摩滅顯著。均整唐草紋であるが、意匠不明。平瓦厚1.5cm。灰白色のやや軟質焼成。SK53出土。133は丸瓦。全長33.6cm、筒部長30.0cm、玉縁長3.6cm。厚さ2.2cm。凸面はタテナデ調整、凹面は差し縫いの入った細かい布目痕と吊り紐痕を留める。縁辺部はヘラ削りによる面取り調整。SK54出土。134は丸瓦。凸面タテナデ、凹面内叩き痕を留める。褐色から赤褐色を呈する。超硬質焼成の施釉瓦。赤瓦。

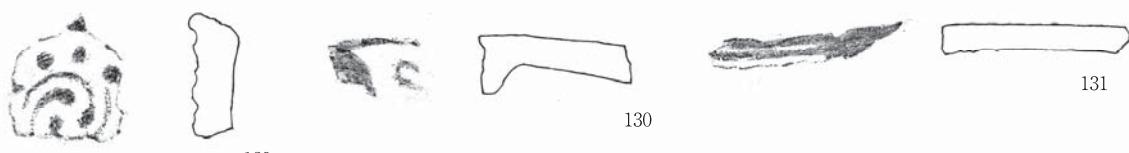
135は平瓦。凹凸両面ともナデ調整。褐色から赤褐色を呈する。超硬質焼成の施釉瓦。136は平瓦。凸面側に平面4.0cm×3.5cm、断面台形の凸帯を貼り付ける。褐色から赤褐色を呈する。超硬質焼成の施釉瓦。以上SD60出土。

24-3 トレンチ出土瓦類（第32図）

137は輪違い。黄白色でやや軟質。摩滅顯著。第4層出土。138は輪違い。丸瓦を素材に成形したものか。全長6.3cm前後、広端幅11.0cm、狭端幅8.0cm。黄白色でやや軟質。第4層出土。



第30図 24-2 トレンチ出土瓦類



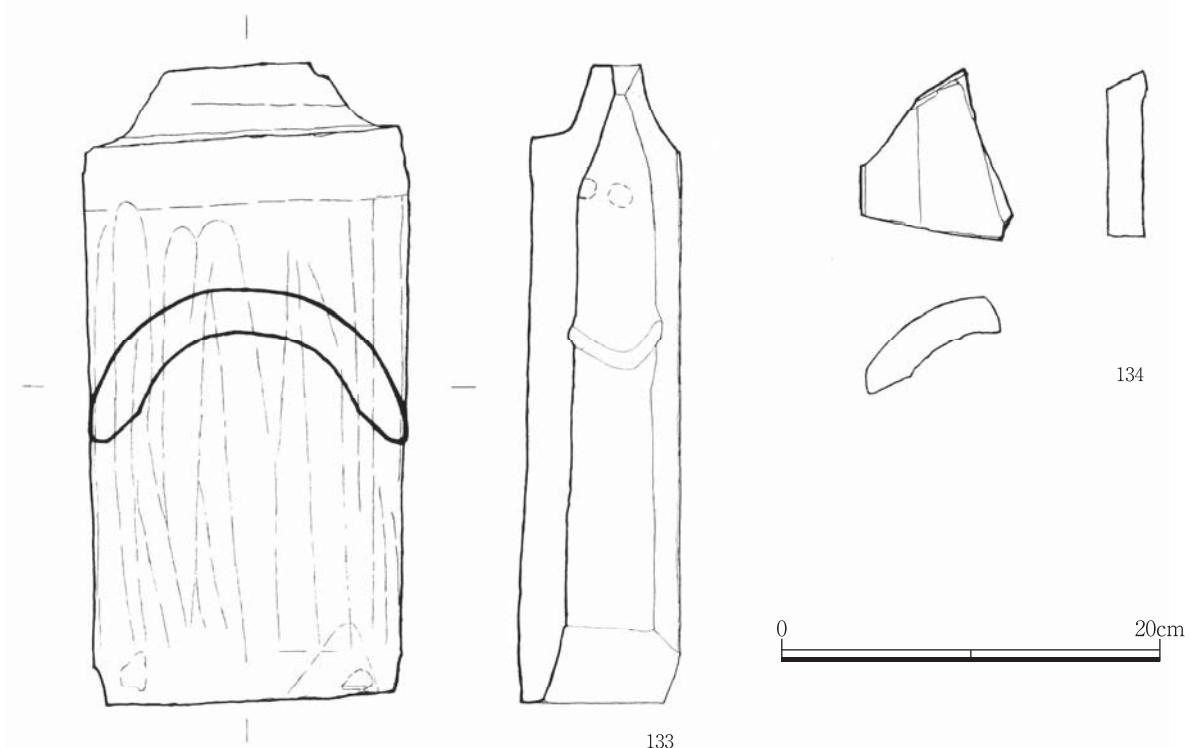
129

130

131



132

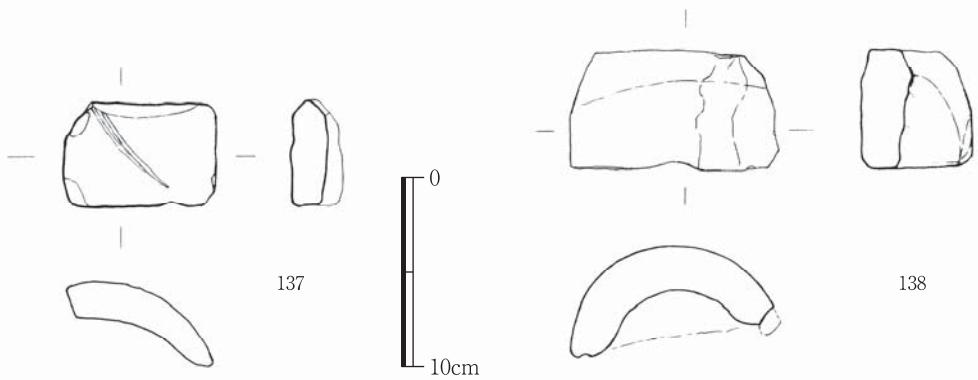


133

134

20cm

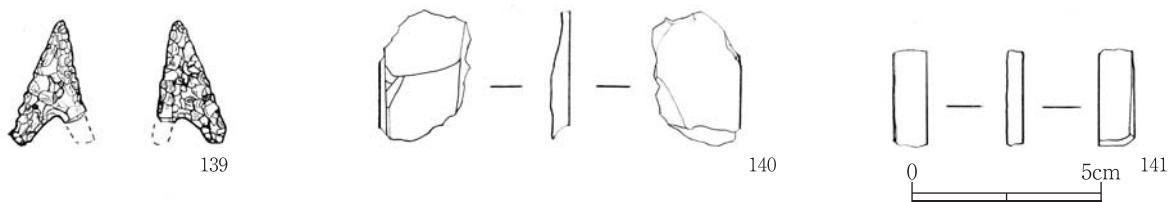
第31図 26-2 トレンチ出土瓦類



第32図 24-3 トレンチ出土瓦類

3) 石製品（第33図）

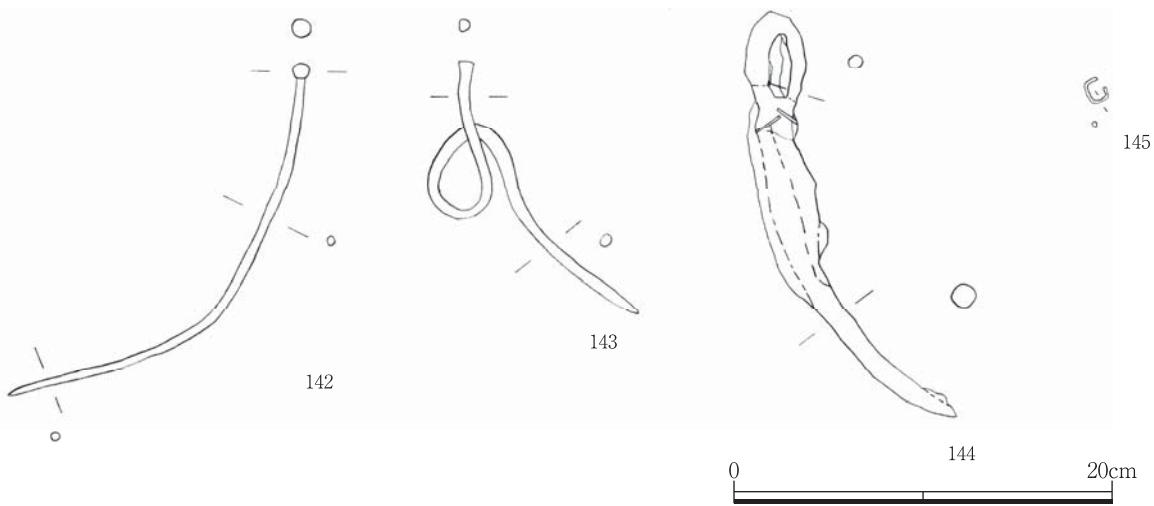
139は黒曜石の石鎌。24-1トレンチ北端第3層から出土。140は頁岩を素材とした砥石。24-1トレンチ北半表土出土。141は残存長2.5cm、幅0.9cm、厚さ0.4cmの半透明のガラス製品。表面は黄白色を呈する。簪か。24-1トレンチ南半西第4層出土。



第33図 出土石製品

4) 金属製品（第34図）

142・143は火箸。前者は24-1トレンチ北半第3層出土。後者は24-1トレンチ南半東第3層出土。144は不明鉄製品。24-1トレンチ北半第3層出土。145は銅線。24-1トレンチ北半第4層出土。

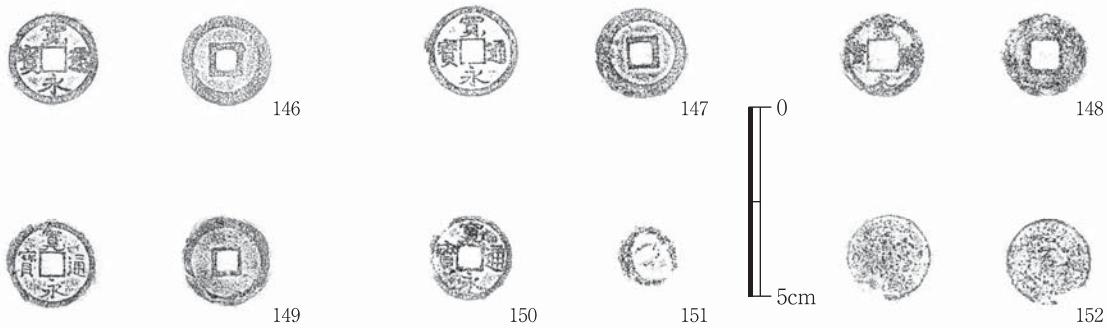


第34図 出土金属製品

5) 銭貨（第35図）

146～150は寛永通寶。146は古寛永。24-1トレンチ排水溝出土。147は古寛永。24-1トレンチ南半西第4層出土。148は新寛永。26-1トレンチ西半第4層出土。149は新寛永。24-1トレンチ北半表土出土。

150は新寛永。24-1トレンチ南半東第4層出土。151は雁首錢。24-1トレンチSS13上層（第4層）出土。152は桐花紋の一錢硬貨。最終発行年である昭和13年の銘が残る。24-1トレンチ北半第3層出土。



第35図 出土錢貨

4. 小結

主な遺構として、1トレンチでは南北石組溝SD1・SD27、南北石列SS13、東西石組溝SD12・SD14・SD23等を検出した。それぞれの溝が指向する軸線は、南北方向はSD1が北で東に25°傾き、SD27・SS13が北で東に27°傾く。一方、東西方向はSD14のみ東で南に18°の傾きと不規則になるが、SD12は東で南に27°傾き、SD23は東で南に28°傾く。南北・東西それぞれの溝の軸線はほぼ直交しており、両者は計画的に敷設されたものと考えられる。ただし、SD12とSD23は両者をそのまま延長しても一本の溝としては接続しない。これらはSD14以西のSK15・16の抜取跡周辺で、緩やかに弧を描きながら両者が接続していたものと考えられる。あるいはそれぞれの石組溝の流れる方向からみて東西を横断して接続せず、それぞれSD12から東（園池方向）へ、SD23から西（山裾を南流して「大灌」方向）への排水計画も想定できるであろう。今後の周辺調査での課題である。次に2トレンチでも東西方向のSD48を検出したが、これは東で南に35～36°傾いており、1トレンチで検出した石組溝とは直交しない。また東で南に25°傾くSS50がSD48を壊却して敷設していることからも、SD48が指向する溝の軸線は一時期古いものと考えられる。最後に3トレンチのSS67であるが、これは北で東に28°傾いており、1トレンチの溝とほぼ同じ方位を示している。以上のことから、東西方向で南に25°～28°傾く溝と南北方向で東に25°～28°傾く溝・石列等が同時期の遺構であると考えられる。一方、SD48のような軸線の異なる遺構は、東園御殿の建物が大きく改変される前段階の遺構と考えられる。なお、1・2トレンチで検出したSX40・41、SX55～58であるが、土坑列の軸線はいずれも東で南に27°傾いており、先述の東西溝・南北溝等とも軸線がほぼ一致している。ただし、検出面が第5層上面ということからも、一時期新しい遺構であると考えられる。

続いて主な出土遺物であるが、1トレンチでは、26-1トレンチ中央から西半で未掲載遺物も含め、擂鉢・焜炉・羽釜・焙烙・片口・土鍋・土瓶・十能・火箸など調理道具関連遺物の出土が顕著であった。併せて碗・皿・鉢・小壺・蓮華などの食膳具や焼塩壺なども出土し、萩碗・京都系丸碗・青磁香炉・合子などの茶事に伴う道具類も出土した。2トレンチSK51・52周辺でも肥前二彩の甕・皿、三彩の壺など茶事や饗應に供する遺物や擂鉢・焙烙などの調理道具が出土した。また1・2トレンチ両者からは、少量であるがミニチュア道具や土人形、防府佐野の甕破片などが出土した。これらの出土状況と検出遺構との関連性については、次章で検討を行うこととする。

第5章 まとめ

1. 検出遺構の検討

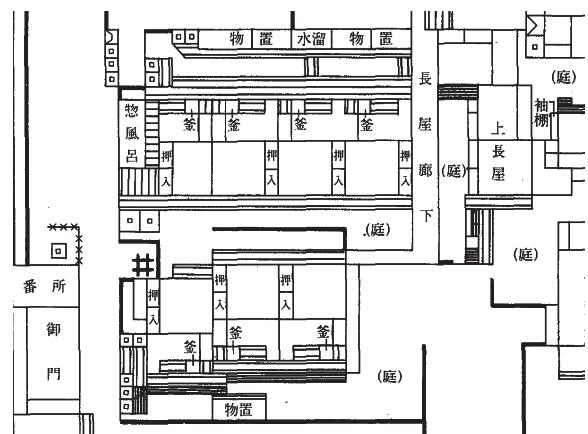
(1) 石組溝遺構について

前章で記したSD1・SD12・SD23・SD27等の南北・東西方向に直交する石組溝の性格であるが、現状では建物の周囲を巡る排水溝の可能性が高いと考えられる。これを「差図」台所屋の平面規模と比較してみた。その際「差図」に記された1畳の規模は1.97m×0.985mと換算し、規模の記述が無い戸棚や押入等は一畳・半畠で換算した。その結果、台所屋西妻から御茶屋との接続部（流シ東端）までの桁行が約11.8m、梁行が7.9m、一方、SD1とSD27の芯心距離は11.9mと僅差ではあるが、SD1とSD27の間に台所屋が収まる余地があるものと判断した。この仮定のもと、他の遺構を当てはめていくと、台所屋南面の坪ノ内にSD14・SK15・SK16が位置し、SS15が御口ウカの西側柱筋に収まる。ただし、この位置の想定では、SD1・SD12ともに床下を溝が通過することになるが、開渠と暗渠、また底石を持つ溝と持たない溝等の遺構の差違については今後の調査の中で検討したい。また、出土遺物の観点からも先述の1トレンチ（26-1トレンチ中央・西半）の調理道具類出土状況などは台所屋と近接していることを示唆するものといえる。さらに屋上屋を重ねることになるが、2トレンチの茶事関連遺物は御茶ノ間、調理道具類は御膳所との関連が「差図」にみる建物配置から推測できる。その他、ミニチュア道具・土人形については孝姫・基之允の玩具、防府佐野の甕は便槽であった可能性が高い。

(2) 土坑列について

1トレンチから2トレンチにわたり連続して広がる土坑列（SX40・41、SX55～58）は、上述の石組溝遺構等を一部壊却し、それらと同じ方位で第5層上面に構築された。現在検出している範囲からの推定平面規模は東西（SX40-aからSX57-iまで）約20m、南北（SX40-aからSX58-aまで）約12.5mを測る。

これらの遺構の性格については埋土の堆積状況や出土遺物からは明確にすることはできなかった。現時点でき把握できている状況証拠から、東園御殿よりも一時期新しい遺構とすると、「諸記録綴込」（毛利家文庫）に文久3年（1863）1月15日に本丸御殿の西長屋（大奥）の女中衆を東園に移し、東園御長屋と唱えさせたとの記録に伴う西長屋遺構が適当である。嘉永7年（1854）の「萩御城内並西御長屋共差図」（山口県文書館所蔵）に記された長屋廊下の南西側の建物をみると、庭を挟んで南北に7部屋ほぼ同じ間取りの居住空間が確認できる。この差図は一間方眼を基準に描かれており、北面建物は南北6間（11.82m）、東西10間（19.7m）、南面建物は南北4間（7.88m）、東西8間（15.76m）の規模と推定できる。今回検出した土坑列の規模が前者と近似していることから、土坑列は本丸御殿西長屋の北面建物が移築されたものに該当する可能性がある。「孝姫様基之允様東園御部屋差図」や「萩城細図」（山口県文書館所蔵）等の建物配置を勘案すれば、南面建物に該当する遺構も2トレンチの土坑列の南方に遺存している可能性がある。土坑列とした遺構群が建物遺構として確定できるよう、今後の調査で解明したい。



第36図 本丸御殿西長屋の建物配置

※「萩御城内並西御長屋共差図」（山口県文書館所蔵）
をもとに書き起こしたもの。萩市史 第1巻付図より。

2. 検出遺構と「差図」との照合

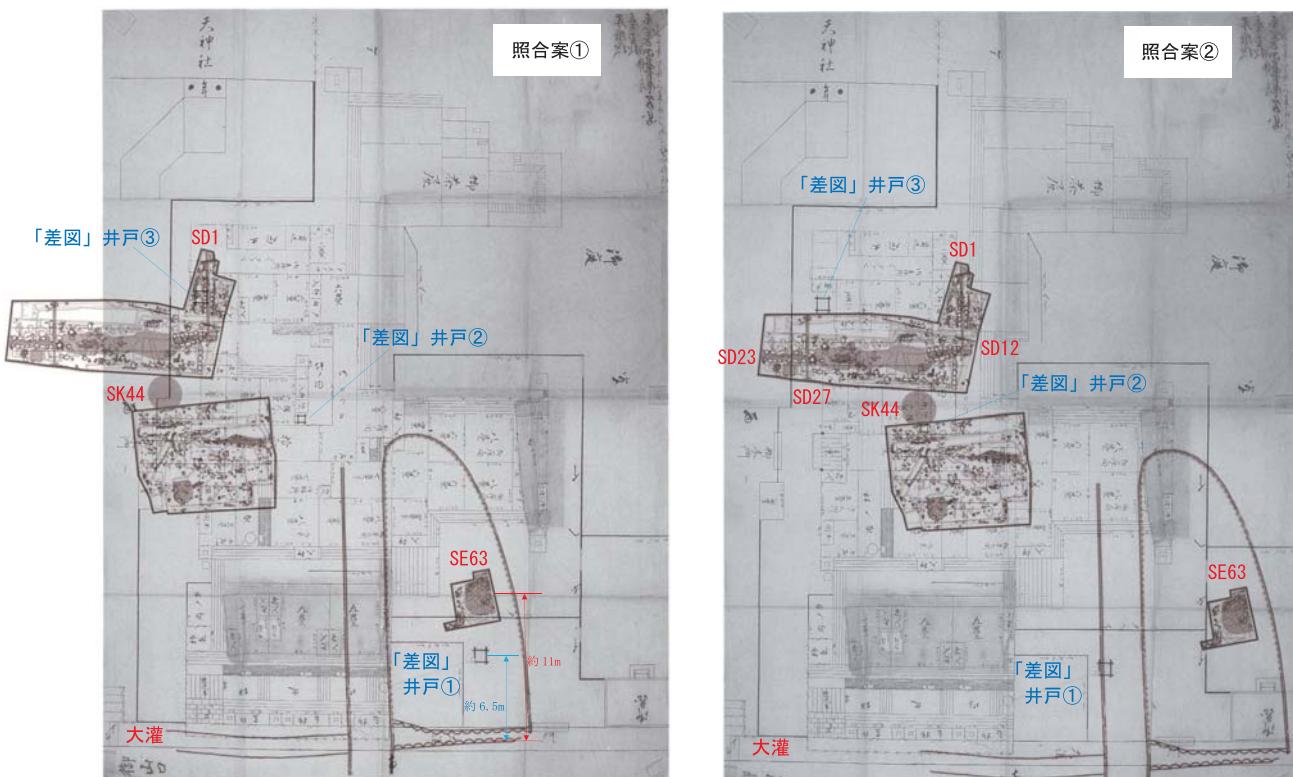
今回検出した遺構平面図を同縮尺にて「差図」と重ね合わせ、検出遺構と「差図」に描かれた井戸や建物との位置関係を照合し、両者の整合性を検証する2案を作成した。「差図」の縮尺調整方法は前項（1）と同様である。重ね合わせの基準は、南北方向はいずれも東園南端で東西に指向する「大灌」を基点とした。以下、東西方向で異なる基点を設定した2案を提示する。

照合案①：「差図」の井戸①とSE63を基点とする

両者を東西方向で対応させると、SE63は井戸①よりも約4.5m北に位置した。さらに1・2トレンチで検出した遺構の大半が西限の板塀より西側に位置することとなった。井戸②の可能性のあるSK44は板塀上に重複、井戸③想定位置にはSD1が重複するなど、井戸以外の遺構については全く整合性が見られなかった。SE63が井戸①とは対応しない可能性も考慮する必要がある。

照合案②：「差図」の井戸②とSK42を基点とする

前項でSD1・SD12・SD27等が台所屋の周囲に巡る南北溝・東西溝という前提で遺構の対応関係を検討したところ、いくつかの共通点を見出すことができた。これらを基に井戸②の可能性のあるSK44を東西方向で対応させてみたところ、南北方向も井戸②想定位置にはほぼ收まり、「差図」と検出遺構の整合性は高いものとなった。ただし、1トレンチ西端で板塀遺構が検出できていないこと、2トレンチ北西隅でカマドの可能性のあるSX42を検出した位置が「差図」にみる預人部屋と対応して問題がないのかなど、解明しなければならない課題もある。



第37図 検出遺構と「差図」との照合

※孝姫様基之允様東園御部屋差図（山口県文書館所蔵）に加筆

3. 今後の調査計画

継続的な発掘調査

「差図」に描かれた建物配置と検出遺構の照合作業は、現時点では照合案②の方がより可能性のある結果となった。ただし、今後は、両者の共通点・矛盾点をそれぞれ検証し、発掘調査を進めていく中で「差図」の骨格となる部分を究明していくことが重要である。加えて東園の外郭を示す遺構や主要建物遺構の確認も重要である。以下にその候補となる調査位置を列挙する。なお、現状では東園北方にスギ林があるため、その範囲については調査対象から除外した。

調査候補①：1トレンチ西側での調査。SD23の西限及びその後の南北方向への排水体系の確認。また「差図」に示す西側板塀遺構及び指月山山裾の状況確認を目的とする。

調査候補②：1トレンチと2トレンチの間で検出したSK44掘方中心部の調査と遺構内容の把握。併せて近接位置で検出したSX42の遺構内容の把握も目的とする。

調査候補③：3トレンチ南側での調査。3トレンチで検出した井戸SE63は、照合案①では「差図」井戸①とは確実に一致しているものとはいえなかった。誤差となっている4～5m南での井戸の有無確認を目的とする。

以上が平成24・26年度の調査成果をより明確にするために必要な最低限の調査候補である。遺構検出面は東園御殿が機能していた時期の遺構面（第5層下面）と、それ以後、幕末期に推定する遺構面（第5層上面）の二面を確認した。土層堆積状況や東園周辺の地形状況を勘案しても、東園御殿周辺の地下遺構には少なくともこの二時期の遺構は残存している可能性が高い。今後の調査においても、第4層以下ではより慎重な調査が求められる。また、今回検出した主要遺構が「差図」の時期だけのものか、あるいは建物が解除された天保8年(1837)以後、山口移鎮までの間の増改築も含まれているのかという点も念頭においていた調査が必要である。萩市ではこれまでも調査体制を勘案し、確実に調査の遂行できる100m²前後的小規模での調査を行ってきたが、これだけ遺構の重複状況が複雑であるのならば、平成2年度に策定した整備計画に示した調査計画のように、全面的な調査計画のもと、より広い面積での継続的な調査が有効であると考える。

保存整備の方向性

この度の発掘調査では、遺構検出面が現地表面より約1m下と想定よりもかなり深い位置であることが判明した。現地表面の標高値を比較すると、園池周辺は2.5m前後を計り、御殿跡周辺では4.0m前後を示した。堆積土の上層（第2層に相当）にはマサ土が堆積しており、これは近現代の盛土と考えられるが、過去の現状変更等の記録が残っていないため、その経緯詳細は不明である。何らかの理由で嵩上げが行われた可能性がある。一方、遺構検出面の標高は2.7m～3.0m前後を示した。調査期間中に長雨となった際、園池周辺の地下水位が上昇し、掘削したトレンチが完全に水没することもあった（図版7-8参照）。よって、調査中の遺構保護作業には必要以上の時間を要することもあった。今後周辺で調査を実施する場合も同様の掘削深度が予想されるため、注意が必要である。

なお、将来の御殿跡・御茶屋跡の地下遺構を活かした整備についても今回の現地表面と遺構検出面の高さの相違を十分に考慮し、立体的な復元が適切な環境であるのかを見極め、その上で改めて地下遺構を確実に保存し、活用できる整備手法を検討する必要があると考えられる。

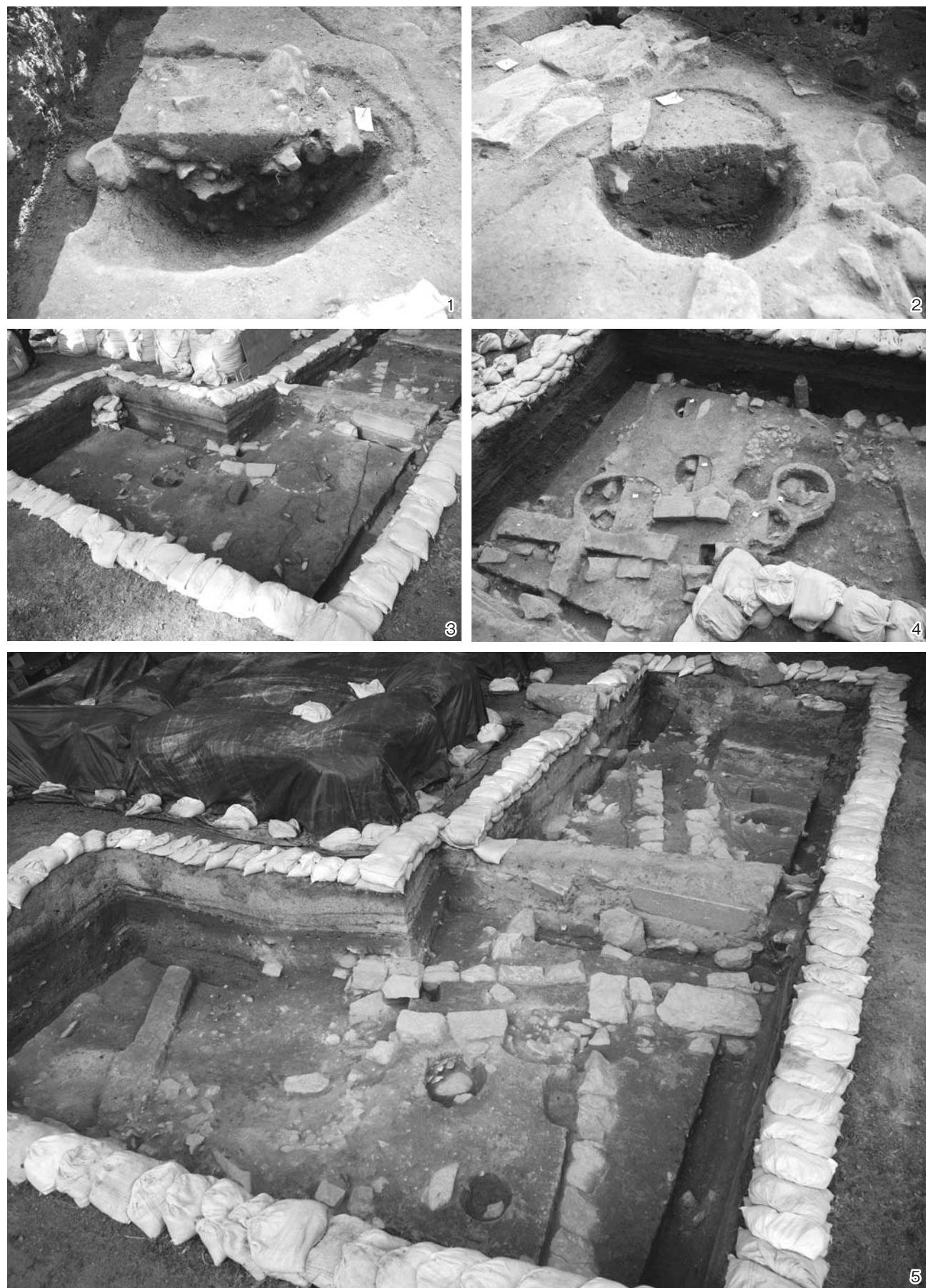
写 真 図 版

図版 1



1. 遺構検出作業（東から） 2. SD1・SK2～4ほか遺構検出（北北東から） 3. SD1土層堆積（北西から）
4. SD1・SK2～4・SK6～8遺構検出（北西から）

図版2

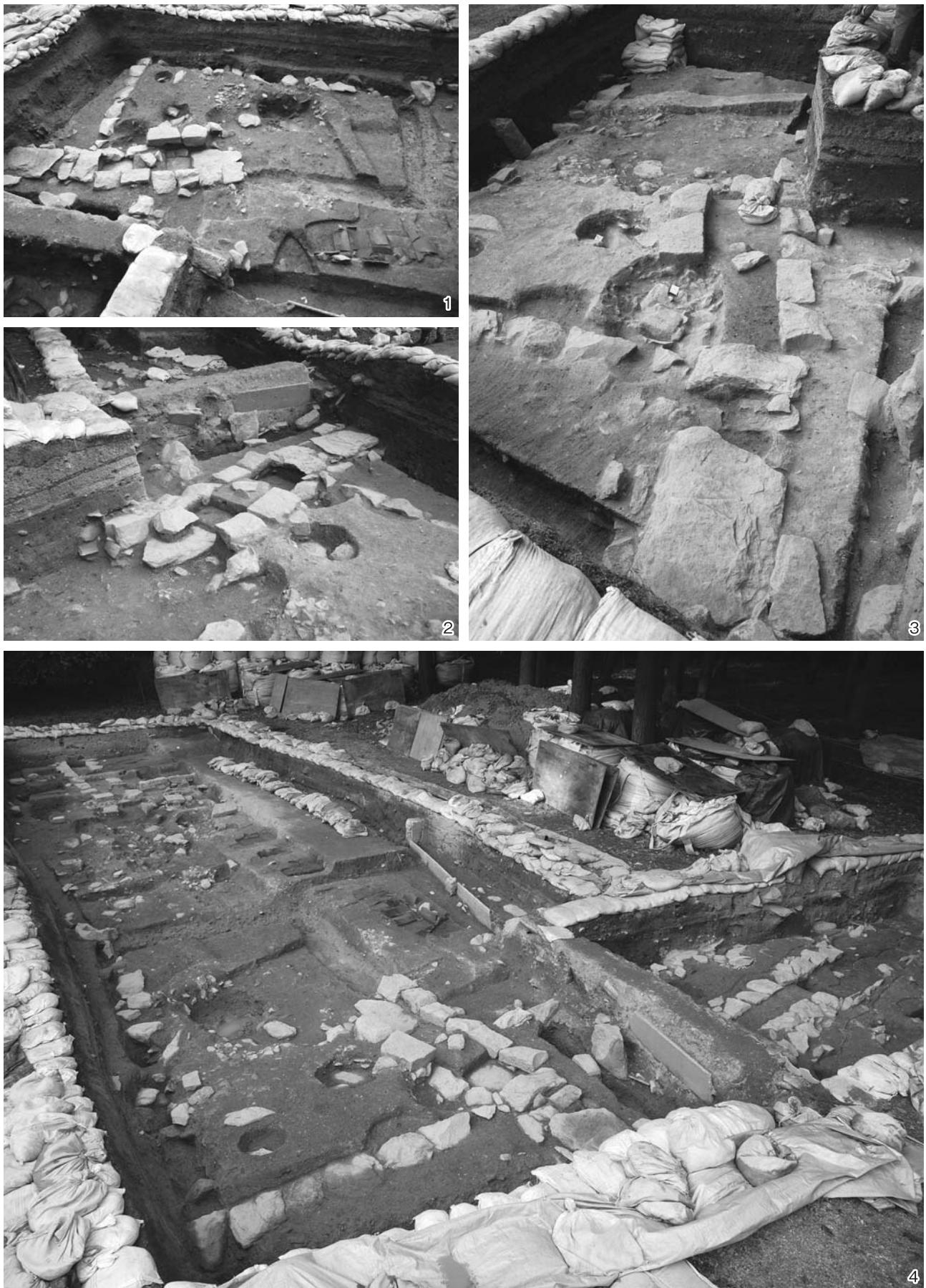


1. SK6土層堆積（北東から） 2. SK7土層堆積（北から） 3. 第5層上面遺構検出 [SX41-g～i・SK68ほか]（南から）
4. 第5層上面掘削（北から） 5. SD1・SD12・SS13・SD14ほか遺構検出全景（南南西から）

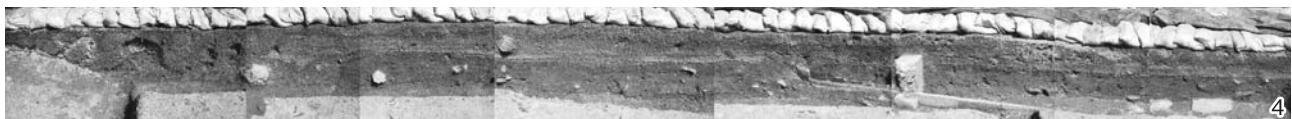
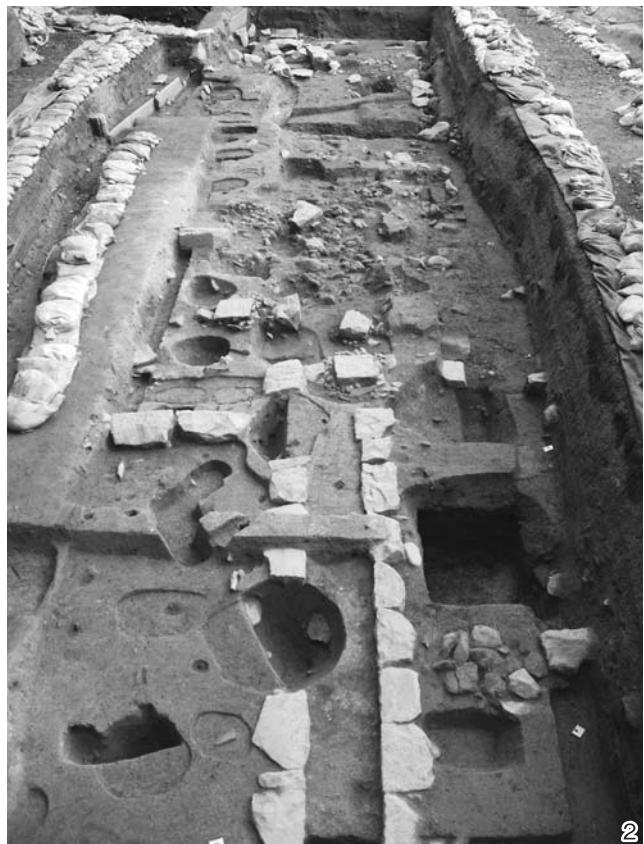


1. SK15土層堆積（南から） 2. SK68土層堆積（東から） 3. SD12・SD14遺構検出（西から）
4. SD1・SD12・SS13・SD14・SK15ほか遺構検出全景（北西から）

図版4

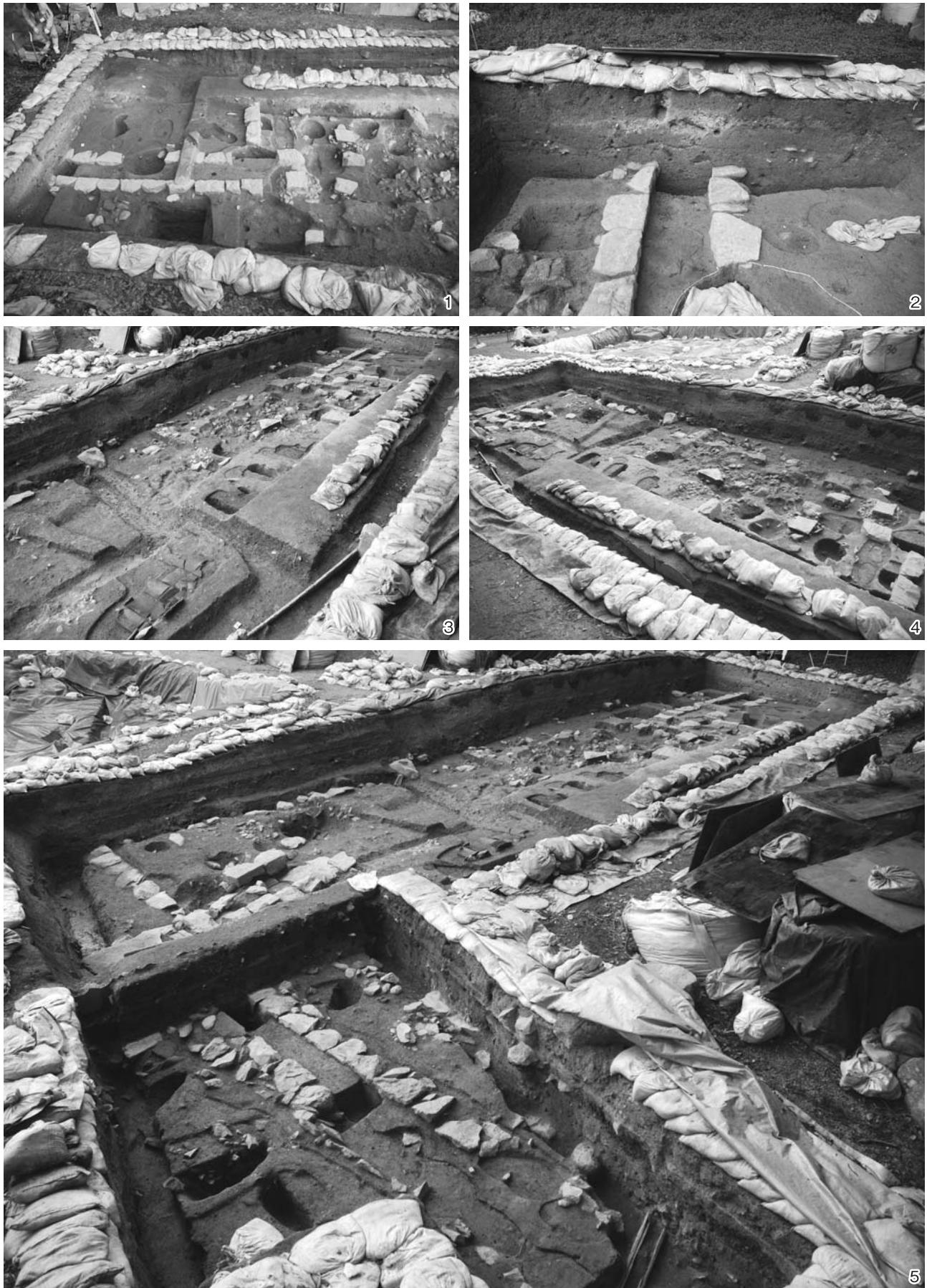


1. SD12・SD14・SS13・SK15・SX39遺構検出（北東から） 2. SD12・SD14・SK15遺構検出（西から）
3. SD12・SS13・SD14・SK15遺構検出（東南東から） 4. 遺構検出全景（南東から）

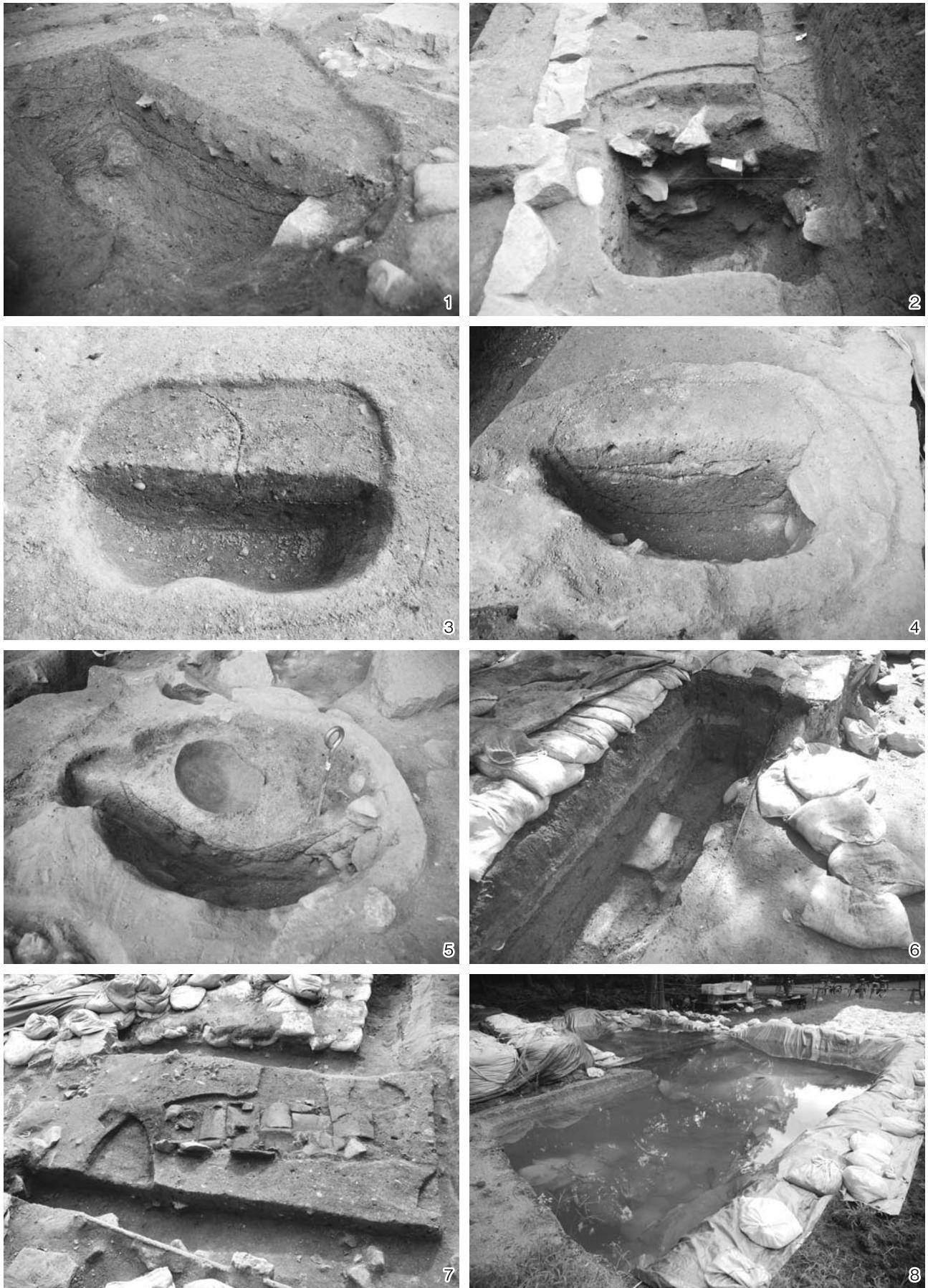


1. 第5層上面近代土坑等の遺構検出（南西から） 2. SD23・SX40・SX41・SX15ほか遺構検出全景（北西から）
3. SS34遺構検出（南西から） 4. 北壁土層堆積（合成） 5. SK15・SK16・SK33ほか遺構検出全景（西から）

図版 6

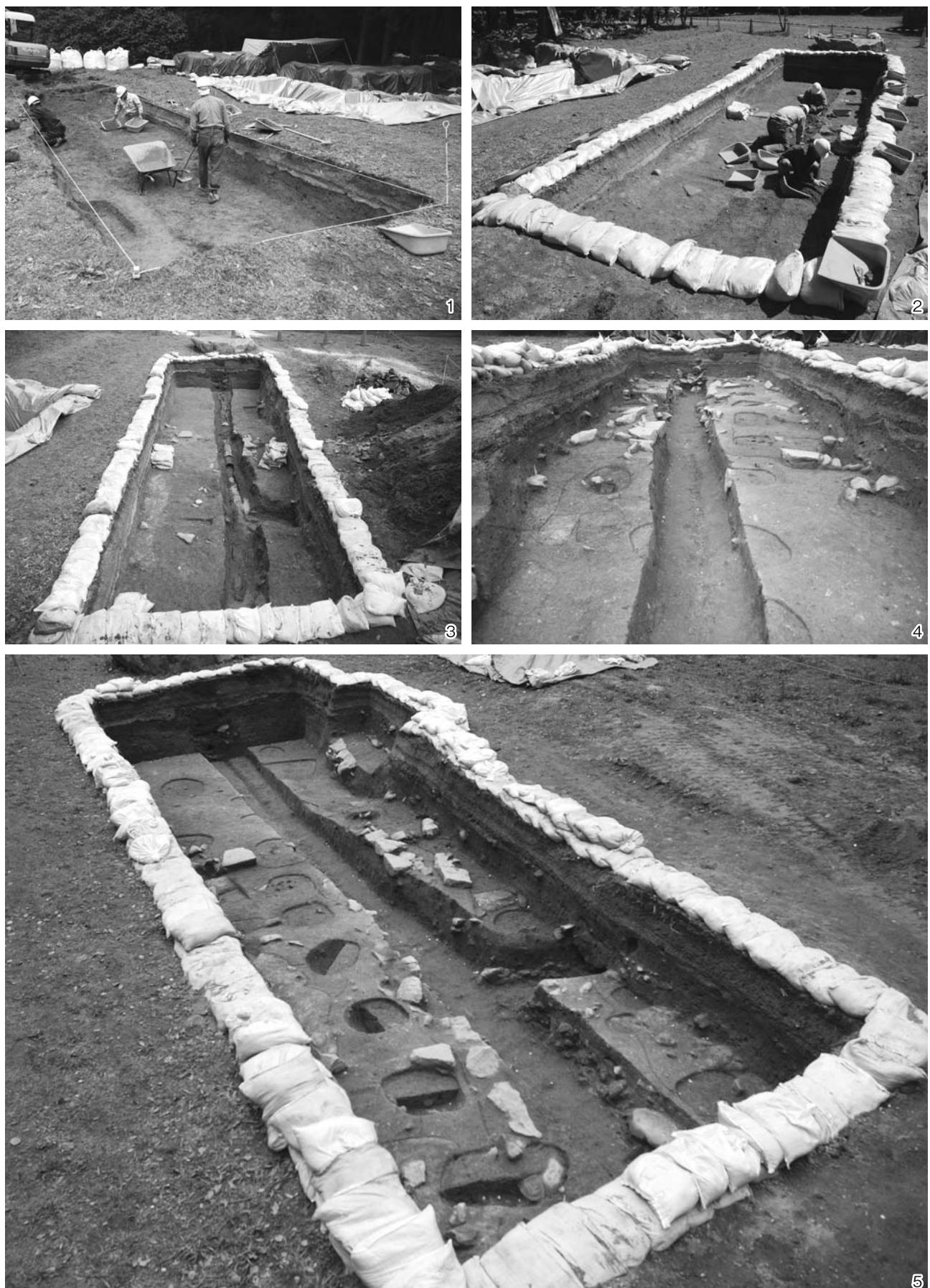


1. SD23・SD27・SS31・SS32ほか遺構検出（南西から） 2. SD23土層堆積（南東から） 3. SX39・SX40・SK15ほか遺構検出（東から） 4. SD27・SS31・SS32・SX40ほか遺構検出（北から） 5. 遺構検出全景（東から）



1. SK39土層堆積（南西から） 2. SK38土層堆積（北西から） 3. SX40-h土層堆積（北西から） 4. SX41-a土層堆積（南東から） 5. SK19下層遺物出土（南東から） 6. SS10遺構検出（西から） 7. SX39遺構検出（北東から） 8. 調査区内に滞留した雨水（南西から）

図版8

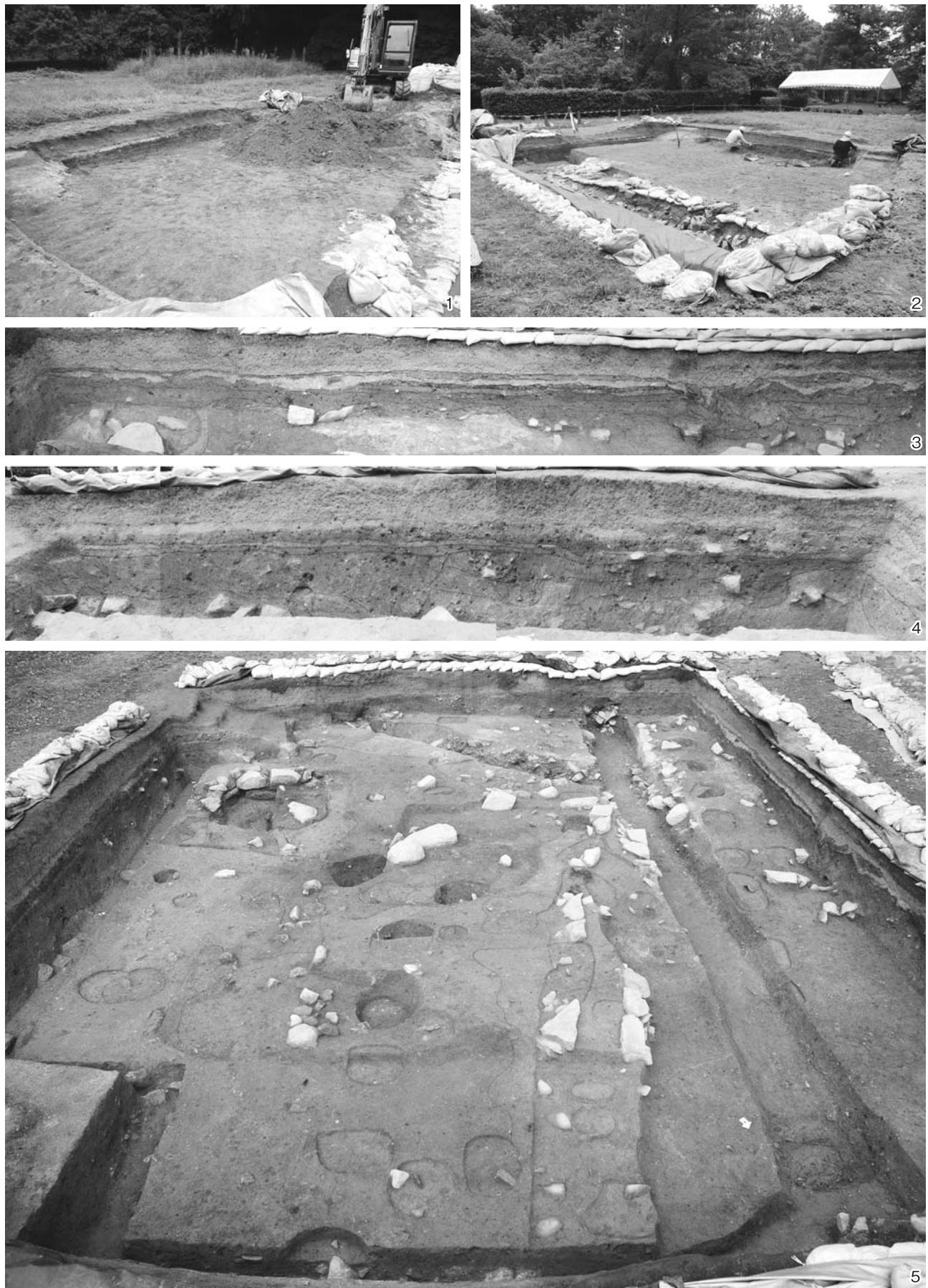


1. 近現代堆積土の重機掘削（東から） 2. 遺構検出作業（西から） 3. SD61遺構検出（北西から） 4. SD61完掘、
SX55・SS50ほか遺構検出（南東から） 5. SK44・SS46・SD48・SX55ほか遺構検出全景（北北西から）

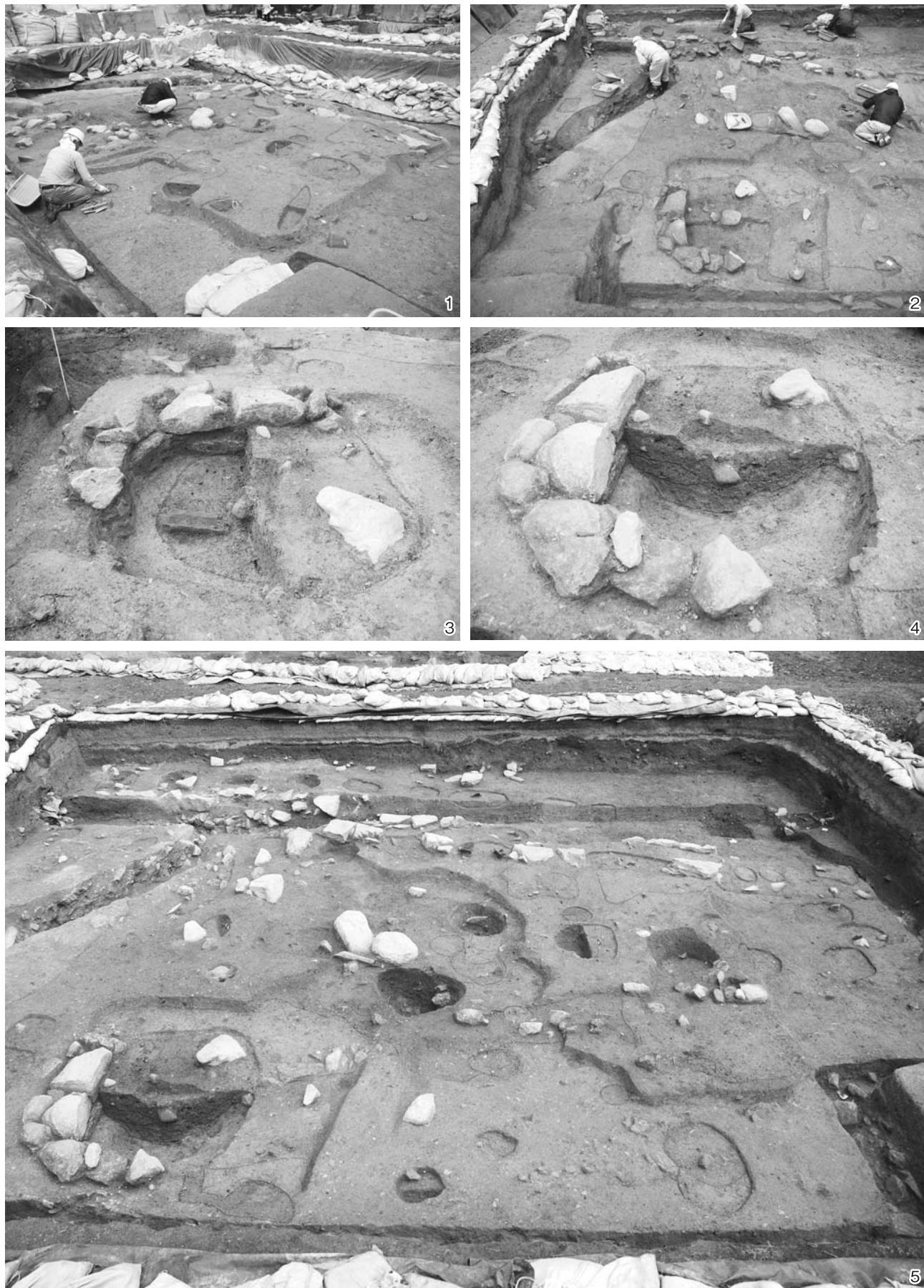


1. SK42・SK44・SS46・SX55ほか遺構検出（南西から） 2. SK44遺構検出及び土層堆積（南西から） 3. 1トレンチ南壁土層堆積[SK44と一緒に連か]（北東から） 4. SX55-a土層堆積（北西から） 5. SX55-d土層断面（東から）

図版10

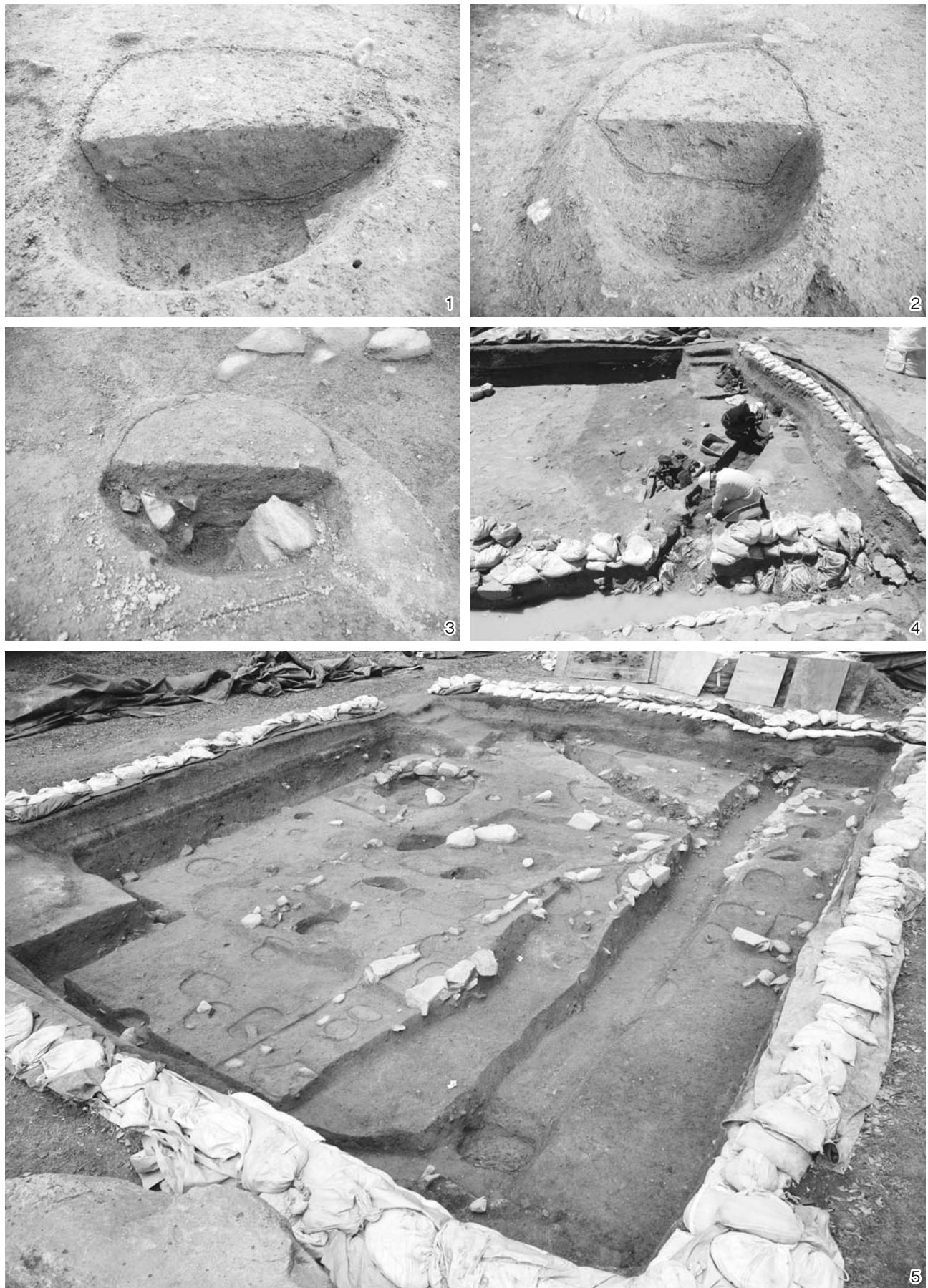


1. 近現代堆積土の重機掘削（東から） 2. 調査区壁面整形作業（北西から） 3. 北壁土層堆積（合成）
4. 南壁土層堆積（合成） 5. SD48・SX55～58・SK54ほか遺構検出全景（南東から）



1. SK51・SK52埋土上層・下層での遺構検出作業（南から） 2. SK51埋土上層・下層での遺構検出状況（南西から）
3. SK54遺物出土（東から） 4. 同左底面検出（南南西から） 5. SK51～54・SK62ほか遺構検出全景（南南西から）

図版12



1. SX57-e土層堆積（北西から） 2. SX58-c土層堆積（南から） 3. SK62土層堆積（北東から）
4. SD60掘削作業（北から） 5. 遺構検出全景（北東から）

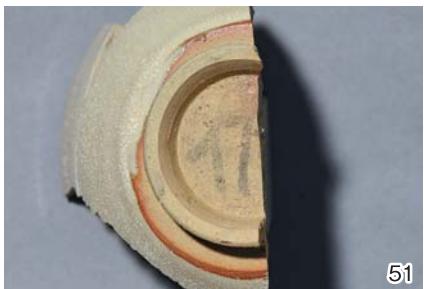


1. 発掘調査着手前（南東から） 2. SE63遺構検出（北北東から） 3. SE63・SP64・SK65・SK66・SS67遺構検出（北北西から） 4. SE63・SP64・SK65・SS67遺構検出（南東から） 5. SE63・SP64・SK65・SS67遺構検出（南南西から）

図版14



1. 南壁土層堆積（北東から） 2. 同左（北西から） 3. 東壁土層状況（南西から）
4. 同左SE63据付掘方埋土の堆積（西から） 5. SE63井戸内で礫検出（東から）



図版16



報告書抄録

ふりがな	しせきはぎじょうあと とうえん
書名	史跡萩城跡（東園）
副書名	保存整備に伴う発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	萩市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第10集
編著者名	西川雄大・柏本秋生
編集機関	山口県萩市まちじゅう博物館推進部文化財保護課
所在地	山口県萩市大字江向 510 TEL.0838-25-3131
発行年月日	西暦2018年3月26日（平成30年3月26日）

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせき 史跡 はぎじょうあと 萩城跡	やまぐちけん 山口県 はぎ しおおあざ 萩市大字 ほりうち 堀内	352047	10004132	34° 41' 97" ～ 34° 41' 93"	131° 38' 06" ～ 131° 38' 40"	2013. 1.21 ～2013. 3.29 2014. 7.11 ～2015. 3.27	285 m ²	保存目的調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 萩城跡 (東園)	矢倉跡	江 戸	石組溝、井戸、礎石、石列、土坑、抜き取り跡、瓦敷など	近世～近代国産陶磁器、輸入陶磁器、土師器、土製品、瓦類、石製品、木製品、ガラス製品、金属製品、錢貨など	東園保存整備事業に伴う遺構確認のための発掘調査。

要約	東園は4代藩主吉広の頃に「御花畠」と称する庭園や「御茶屋」の存在が記されており、6代藩主宗広の頃に古くからあった池を浚渫して回遊式庭園を作庭し、東園と命名するとともに御茶屋も改装した。園内には天神社の他、寛政3年(1791)にはその東隣に秋葉社が遷座された。東園の地は藩主やその宗族などがくつろぐ遊息の場あるいは祭祀の場として利用してきた。現在は、池がほぼ当時のままの形状で残っているが、御茶屋跡は整地され、天神社跡は竹林となっている。現在も残存状況の良好な園池及びその周辺の景観を含めた大名庭園の姿を整備・修景し、御茶屋及び東園全体をとり囲んでいた築地塀(土塀)の復元を目指し、発掘調査による地下遺構の確認に着手した。
----	--

萩市埋蔵文化財調査報告 第10集

史跡 萩城跡（東園）
保存整備に伴う発掘調査報告書

2018年3月26日

編集・発行 山口県萩市まちじゅう博物館推進部文化財保護課

〒758-8555 山口県萩市大字江向510

印 刷 (有)松陰堂印刷所